
魔法少女リリカルなのはF F ～ Midnight Circus ～

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはFF Midnight Circus

【Nコード】

N8521F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

レリック事件、聖王の揺りかご、ジェイル・スカリエッティ。それらが機動六課の手によって解決されてから数年。にわかに平穏の訪れたミッド・チルダ。しかしのその平和の影には多くの犠牲となる者達の姿があった。最も効率の良い消耗品として扱われる狙撃手、エルンスト・カーネルは新たに出現した世界のゆがみに何を見るのか。

プロローグ（前書き）

この作品は、アニメ『魔法少女リリカルなのは s t r i k e s』をモチーフとした二次創作です。

本編に関するネタバレを含む可能性がありますので、お気をつけください。

また、この作品には本編にない独自の設定や、本編の設定を一部無視した表現が使用されることがあります。原作の世界観を重視される方はご注意ください。

プロローグ

時空世界の広がりにはまるで蔓を伸ばす葡萄^{クラスター}の房のように、貪欲に何処までも拡大を続ける。拡張する葉は多くの陽射しを集め、それと同時に広く深い影を地上に落とす。何処まで続いていくのだろうか、この世界は。

魔法少女リリカルなのは M i d n i g h t C i r c u s 開演
です。

第一話 深緑の猛り

静寂の森を支配する木々が四方八方に枝を伸ばす様は、まるで誰よりも多くの陽光を集めようと必死の競争をしているようだ。

エルンスト・カーネルは、その周囲の環境と同色の衣服に身を包みつつ、結局の所、植物も人間もそれほどの違いはないなと薄く笑みを浮かべた。

まったく整備されていない草木の生い茂る深緑の絨毯に身を横たえる彼は微動だにせず、その鋭い眼光をもつてただ一点をにらみつけていた。

彼のかぶる鉄兜からは周囲に自生する植物や木の枝などがくくりつけられており、その顔面にも緑のペイントが施されている。更に言うとその衣服はまるで生い茂る草の茂みのようなネットに包まれているのだ。そのため、近くで見ても彼の容貌が如何なるものかを推測することは難しいが、唯一むき出しにされた双眸からはまだ成熟仕切れない少年のような雰囲気醸し出されていた。

自然の植物が支配するこの環境においては、身体を動かすことがなければ例え数メートル先にいる人間であつても彼を見つけることは不可能だと思われる。

見つからないこと。それが彼が最も重要視する事である。

「今日で何日だ？」

携帯食のサプリメントをかじりながら、その側にうつぶせになるエルンストのパートナー、ニコル・エルトニルは時折首をかしげながら双眼鏡を覗き込んでいた。肩や首が凝りやすいという彼は頻繁に身体を動かす癖があるが、エルンストはそれを悪癖だと捉えていた。

エルンストと同じ格好でうつぶせになる彼もその格好を苦にしない様子だったが、無理のある体勢から来るストレスに気がめいつている様子だった。

「5日目だ」

エルンストは短くそう答えると、顎の部分につけられた管をストローにして水筒から水を吸い上げた。水といってもそれは人体に必要な栄養素の殆どが配合された栄養剤のような物だ。一日あたり500ml程摂取するだけで、必要最低限の栄養とカロリーを補給することが出来る。エルンストは、この数日間、正確にはこの森に入って5日の間この栄養剤しか口にしていなかった。

ニコルからしてみればそれはどんな苦行だと思っただが、元来物を食することにそれほど魅力を感じていないエルンストにとってこれはむしろありがたいぐらいで、どうしても避けることの出来ない空腹感さえ無視できれば一生これで生きていっても良いと考えるほどだった。

（いや、空腹感は糖類を口にすれば何とかなるか）

エルンストは、一応持つてきていたショ糖の存在を思い出したが、それは今荷物の奥に入り込んでいて発見するのは少し時間が擁すると考え今は諦めた。

「なあ、この任務が終わったらどうする？」

突然何を考えたのかニコルが双眼鏡から目を離しエルンストに顔を向けた。

二人はこの奥深い森の一角に潜み、もう3日間も同じ場所で一つものを監視していた。それは非常に根気の要る作業であり、休憩を許されないものだ。彼らの目的は一瞬で訪れ、おそらくその一瞬を取り落とせば永遠にチャンスは巡ってこないだろう。

だから、監視を担当するニコルが双眼鏡から目を離すことは任務の放棄と考えても支障はないことだった。

「次の任務だ。まだ決まっていらないだろうが、すぐだろう」

しかし、エルンストも同時に監視をしている事から、緊張をほぐすための一時的な事と考えれば大して目くじらを立てることもないとエルンストは思い、それを咎めることはなかった。

「この二年間ぐらいそればっかだろう。そろそろ有休を使いたいね」

ニヤツと笑うニコルにエルンストは軽く溜息をついた。

エルンストは休暇のことなど考えたことはなかった。任務が終われば次の任務。それが用意されていなければ訓練所の予約を取るかどこかに任務が転がっていないか探す毎日をおこの4年の間例外なく続けている。

ニコルはここ2年あまり任務を共にしているが、彼は休暇がなければ生きていけない人物らしい。

休暇など、ただ退屈な日をお駄に過ごすだけで意味はない。そう考えるエルンストには彼のその習性を今に至るまで理解できなかった。

「上からもそろそろ有給消化率でうるさく行ってくる頃だろうぜ。これが終わったら2週間ほど休暇を取って旅行に行くつもりだ」

「そうか。それは何よりだ」

ならば次の任務は別の人間と組むことになるな。とエルンストは考えた。ニコルは、理解のしがたい生物だったがその能力は一流に違いなかった。口にしたことはないが、エルンストは彼の存在をあくまで任務の上でありがたく思っている。

彼に変わる人材がそうそう転がっているわけではないが、どこかで見つけてこなければならない。

ニコルとの出会いは偶然の産物だった。それ以来エルンストはいよいよに利用しているが、おそらくニコルにとっても自分はその程度のものだろうと高をくくっていた。

しかし、ニコルの次の言葉にエルンストはその推測が甘かったことに気づかされる。

「何処が良い？ せっかくだから、遊べるところが良いよな。2週間だと、地球のベガスなんてどうだ？ あそこはクールだぜ」

地球のラスベガス。エルンストも人伝えに聞いたことはあった。ギャンブルの王国としてその筋の人間にとっては有名どころだ。ミッドチルダは何かと規制が厳しい事も有名で、あの自由な国風を憧れるものはミッドにいても数多いと聞く。

しかし、エルンストにとって気になったのはそのことではなく、ニコルの口にした言葉だった。

「何故、俺に聞く？ 行くなら勝手に行けばいい」

「つれないこと言っふなよな。お前も一緒に決まってるだろ？」

「なぜ？」

「あのなあ、友達^{ダチ}を遊びに誘うのに理由が必要なのか？」

エルンストは思わず彼の方に面を向けた。

おそらく自分の表情は、隣に立つ司令官が突然狙撃手に撃たれた時の副司令官のような表情をしているだろうと予測が出来るが、この男は何を言った？

「な？」

ニヤツと笑う彼は、まるでしてやったりと言わんばかりの表情でエルンスト見ていたがその目には冗談が混じっている様子はなかった。

つまり、ニコルは、本気で、他でもないエルンストを、旅行に誘っている、ということだった。

「悪くはないな。お前に任せる」

だからだろうか、エルンストは柄にもなくその誘いに乗ることにした。一生に一度ぐらいはそういうことがあっても良いかもしれない。

ニコルは、「おう」と答え、再びその手に持つ双眼鏡を手にした。
「おい、エルンスト。見えたぜ」

ニコルの声に、エルンストは気を取り直すと傍らに置いてあったライフルを取り上げ、そのスコープを覗き込んだ。

「渓谷の入り口。北東15°方向。俯角10°。あの岩陰だ」

エルンストはその指示に従い、ライフルを僅かに移動させた。奥深い山の森の中に一部だけぽっかりと開けられた窪地だけにはその周囲を支配する木々の侵食を免れた場所があった。

エルンストが最初それを見た時、まるでかいすり鉢だと思ったものだった。

そして、そのすり鉢のほぼ中央部分には、岩陰や茂みに巧妙にカモフラージュされた人工物。今回、彼らがターゲットにする組織の潜伏地がそこに存在していた。

「うちの情報部は優秀だな。確認した、リカルド・マックフォートだ」

高倍率の多用途双眼鏡型デバイスと手元の写真を見比べながらニコルはそう呟いた。

エルンストもスコープをズームし、フォーカスを調整するとその顔をよく確かめた。間違いない、奴だ。

先の事件。ジェイル・スカリエッティが引き起こした聖王の揺りかご事件の重要参考人で、奴がスカリエッティに武器や違法物の横流しを行っていたらしい。それだけではなく、リカルドはそれまでに多くの反政府ゲリラやテロリストに武器を供給していた大元の商人でもある。

エルンストとニコルがはいつくばる丘の頂上からリカルドが下りたヘリまで、およそ2・3 km。エルンストは入念に作り込んだ地形図とリカルド達がいる場所を比べ、マントーゲットとヘリの見た目の大きさと環境補正からその距離を割り出した。

ニコルも同じ距離を目算し、二人はここで仕留めることに決めた。エルンストはライフルを構え、銃床を肩に当てた。ライフルの前床には衣服などが入れられたサックが置かれ、エルンストはそれを依託物として空いた左腕を銃床に添え、チークパットに頬をすりつけた。

「風は安定している。右からの風、風速2。距離2・3 km。少し上、だいたい中心から2 mmを狙え。」

エルンストは頷くことなく、先程までリカルドの心臓を狙っていたレティクルの中心を、それから2 mmほど上げた。レティクル上では僅かに2 mmだが、それが着弾点を数十cm上にずらす。

彼の持つライフル型デバイスは一般的なものと異なり、人工知能のような機能が搭載されていない。いや、元々はサウンドインター

フェイスのシステムが搭載されていたのだが、こういった任務ではエルンストにとっては煩わしいだけだった。

「風速+0.5修正」

ニコルの持つ双眼鏡型デバイスはその周囲の環境の情報を読み取る機能が搭載されている。エルンストは僅かに頷くと、ほんの少しだけライフルを右に移動させた。

スコープに表示される値には、その移動量はまだ不足していると表示されているが、エルンストはそれを無視した。

「捉えた」

エルンストは答えた。

「よし、いつでも撃て」

ニコルも答えた。この任務を受領した時点で、彼らはリカルドの殺害許可を与えられている。通常ならいちいち司令部に確認を取らなくてはならないこともこの環境においては省略できる。

（あんたには恨みはないが、あんたが生きていると何かと不便な連中が居るらしい。黙って死んでくれ）

情け容赦なく。という言葉が最も当てはまるだろう。エルンストは、ライフルの引き金を、まるでスイッチと言っても良いような形状をする引き金を正に文字通り押した。

火薬の炸裂音はしない。そもそもこのライフルは火薬を必要としない。搭載された発射体である円錐状の特殊合金は、発射体勢を整えた瞬間に薬室内で宙に浮き、高速で回転を始める。そして、引き金を引くことでそれが加速され、マズルより投射される頃にはおよそ音速の5倍近い速度までたつする。

まるでそれはレールガンのような形ではあるが、その飛翔体の加速には魔術が使用されている。

音速の五倍で飛翔する発射体は、2.3km程度であれば僅か2秒足らずで駆け抜ける。その飛翔体が纏う衝撃波はその斜線上にある木の葉や塵粒子をはねとばし、僅かに遅れて甲高い衝撃音が響き渡る。

銃床から殆ど反動を感じず、ライフルも跳ね上がらない。エルンストはそのままリカルドの命の行方を見守った。2秒後、リカルドの身体がはじけ飛んだ。

体内に侵入した弾頭はその速度故に殆ど変形することなく人体を貫通するはずだが、それが纏う衝撃波によって人体はいたく傷つけられ、弾頭の芯に刻まれた『エクスプロード』の魔術印は侵入と共に体内で小爆発を起こす。

身体の中身を周囲にまき散らしながら、その場に倒れ込んだそれを見て、エルンストはそれがまるで使い古したボロ布のように見えた。

「ターゲット排除確認。任務完了……。ようやくこれで帰れるな」
ふう、と言つてニコルは双眼鏡から目を外すといったものような首をコキコキとさせて立ち上がろうとした。

エルンストもスコープから目を外そうとライフルを持ち上げるが、その視界の隅になにやら不吉なものが移ったような気がしてすぐに構え直した。

「何だ？」

ニコルもそれに気がついたのか、既に待機モードに移行させていた自身のデバイスを再び元の形に戻しそれを覗き込んだ。

最初、それは鳥のように見えた。4羽の鳥が交互に位置を入れ替えてつつ長い道のりを渡り行く、その様は彼にとつてなじみ深いものだったが、それが次第に鳥の大きさより大きな身体を持ち、その手には見慣れたものが握られていることに気づいた頃には、彼は既にライフルを構えていた。

「航空魔導師だつて？ 何だつてここに……。こんな所で飛行訓練なんてありえねえぞ」

ニコルは情報部から与えられた情報を何度も何度も思い返し、その情報にはそれらの存在はあり得なかった。

「あいつ等のデバイスをよく見てみる。あれは、時空管理局のものではない。それに、あのレリーフは見覚えがある」

あれは敵か、それとも敵ではないか。二人はあれが味方ではあり得ないと言うことだけは分かっていたが、はたしてあれが自分たちを狙うものかそれとも放置しておいてもかまわないものか、その確信が必要だった。

「ナツクルハート・デバイス社。リカルドの会社じゃねえか」

「既に事業解体をされた会社の生き残りか、リカルドの子飼いか。放置しておくには危険だ」

エルンストは、どうする？ とニコルに目をやった。この場合、事の決定権はニコルに与えられている。

「とにかく、撤退だ。気づかれずに逃げられたらそれでいい」

確かにそれは的確な判断だった。相手は4人でこちらは二人。それだけで数的不利な状況であるし、彼らに与えられた任務はあくまでリカルドの暗殺だけだ。不要な戦闘は避けるのが彼らの美学とされているが、どうやら状況はそれを許さなかったらしい。

「撃ってきた」

エルンストは、その家の一人がデバイスを掲げその先端が光るのを確認した。

「こっちの位置が感づかれたか？」

ニコルも双眼鏡をのぞき込み、発射された魔法弾の行方を追った。「いや、闇雲に撃っているだけのようだ」

一人が放った魔法弾は、二人のいる場所からみてまるで明後日の方角へと消えた。しかし、方向は合っている。

その四体の魔導師は複雑なマニユーバを描きながら、耐えることなく魔法弾を発射し始める。

着弾までおよそ5秒。

距離、およそ3・5 km。それはエルンストの有効射程ギリギリの範囲だった。

「とにかく、応戦するぞ。まぐれ当たりって事もある」

ニコルは再びはいつくばり、最初に撃ってきた一人をターゲットに選定した。

敵はこちらがスナイパーであることを知っているのだろうか。一発撃つごとにその位置を変え、まるでデタラメな軌道を描き飛び続ける。そのため、わずか四人で可能となる砲撃など、飽和攻撃とはほど遠いものだったが、その着弾の威力からしてニコルは手合いの魔導師がおよそ空戦B＋A＋ランクだと当たりをつけた。

（なるほど、さすがリカルドの子飼い。優秀だ）

相手の射線をずらすための機動は本来なら乱数回避が徹底されるものだが、人間である以上その中でもどうしても一定のテンポというものが発生する。

ニコルの双眼鏡型デバイス【コールド・アイズ】はターゲットをロックしその機動パターンを学習し、その次の瞬間の位置を予測し続ける。

ニコルは、それを口答で告げるにはあまりにも状況が動的すぎるため、エルンストには無断で彼のデバイスと自分のデバイスの情報をリアルタイムで共有することとした。

突然、スコープに現れた敵の軌道予測曲線にエルンストは一瞬間食らうが、ニコルの仕業だと言うことは目に見えて明らかだったため何も言わずにその軌道予測曲線に自身のライフルを合わせた。

エルンストのデバイスは二つに分かれ、それぞれが独自に情報共有をしつつ活動している。一つはライフル銃型デバイス【クリミナル・エア】、そしてもう一つは単眼スコープ型デバイス【ストライク・ビューワー】だ。

そして、ストライク・ビューワーは様々な監視装置と情報共有することによって圧倒的な視界を持ち主に提供する。故に、その機能の大半は情報処理にあてがわれ、実際スコープとしての性能は高価な一般的光学スコープと大差ない。

新開発されたキハイル式デバイスシステムの恩恵に感謝するべきだとエルンストは思った。

故に、ニコルはエルンストの視界の一部となり常に彼と共にある。エルンストは引き金を引き絞り最初のターゲットを撃墜した。真

っ赤にはじけ飛ぶ元航空魔術師はまるで、アルカリ金属を含む花火のようににはじけ飛び地上へとゆっくり落下していく。

「次、すぐとなり」

エルンストが発射した瞬間、ニコルはそう指示を飛ばすとすぐにそれをロックする。

しかし、敵の一人がはじけ飛んだ瞬間から残りの砲撃が徐々に幅を狭めていつていっているとエルンストには感じられた。

二人目を視界の中心に据え付け、それが魔術弾発射の後、急制動をかけて反転する瞬間を狙い、エルンストは再び引き金を引く。

（そういう場合は制動をかけずに旋回するんだよ！）

はじけ飛ぶ肉片と、弾のエネルギーで沸騰する血液を視界の端で確認しエルンストはニコルの指示を待った。

「次だ」

後二人にまで迫った敵には、しかし焦りというものが感じられない。こういった手合いは、戦力が半減すると知ると殆どの場合撤退に移るものだと思っていたが、何故だ。

その思考は、敵の片方が放った魔術弾が二人のすぐ正面100m先に着弾したところで遮られた。

視界を埋め尽くす灰色じみた塵霧に二人は目を背けた。

（発見された）

本能的にエルンストはそう悟った。発見されなければ最強であるはずのスナイパーは、発見されてしまえばその戦略的優位性はあっけなく瓦解する。

エルンストは狙撃を断念し、クリミナル・エアのセクターを操作した。

単発方式から連射方式へ。ストライク・ビューワーも精密狙撃用の高倍率から、視界を広く取る対空照準へとシフトさせる。連射方式のライフルは命中精度が落ちになり、その弾速も半分以上に低減する。また、発射体の回転も弱まり弾頭の安定性も大きく低下するが、ファイアーパワーは圧倒的となる。しかし、本来対空砲か

としてセッティングされていないこの銃では、装弾されている弾数が圧倒的に少なすぎる。魔法弾を連続発射できるだけの魔力を持たないエルンストにとってそれは命の切れ目だった。

秒間15発とセッティングをすぐさままたき込み、エルンストは間髪入れず残り少ない弾丸を敵へたたき込み始める。

フルオート射撃では4秒持たない。0.3秒ごとに指を切りながら、合計3秒と少しの時間をかけてようやく片方を撃墜する。

そして、その射撃は彼らの位置を敵に完全にさらす結果となった。二人はもはや身を完全に起こし、地面に足をつけて身体をさらしていた。

エルンストがニコルのサポートを受け、すぐさま銃口を最後の一人へと向けた。

そして、身が凍り付いた。彼のスコープがそれを映し出した瞬間、それから発射された光は衝撃となった彼らに襲いかかる。

エルンストは、

「伏せろ！」

と言ってライフルさえも投げ出さん勢いで膝を折り、倒れ込むように地面に這い蹲った。

耳を塞がなければ潰れてしまいそうな爆音と共に、頭を押さえつつ伏せるエルンストの背に赤色じみた暖かなシャワーが降り注いだ。ビチャツという生々しいその感触に、エルンストはニコルの死を悟った。

「クソ野郎が！」

僅かに白ろばむ視界と、ノイズだらけの聴力をふるい、エルンストは着弾を確認してその場に待機していたそれに狙いを定めた。

一秒間続いた彼の射撃は、白い霧と共にその音を途切れさせた。

第二話 時空管理局教導隊

ミッドチルダの地上に設置された教導隊の宿舎の側には朝も明けきらない内から威勢の良いかけ声が響き渡っていた。

「クラント、カリス。遅れてるよ、もう少しだからがんばって」

軽装の訓練服に身を包む集団が、宿舎の隣に設けられた広いグラウンドを走り回っている。そのどれもが、まだまだ幼さを残す少年少女だったが、そんな彼らを励ますように後ろから声をかけるその声は、そんな彼らよりも更に幼い印象を与えていた。

栗色に輝く長い髪は頭の片方でまとめられ、整った顔の造形から発せられる笑顔は美人と言うにはあまりにもあどけない。

体つきもコンパクトにまとめられ、その彼女が着込む訓練服はどう考えても子供の仮装にしか見えない。彼女を知らないものがそれを見たら、そのあまりにも場違いな姿に目を見開くだろうが、この時空管理局においては彼女の名を知らないものなど存在しない。

「はい、それじゃあ今朝の訓練はこれで終了。朝食を取り終わったら、午後からはデバイスを使った訓練だから各自準備しておいてね。質問は？」

まるでさっきまでのランニングを苦にも思っていない様子で、彼女はゆっくりと彼らを見回した。

空腹で走らされた疲労からか、彼らの誰もが膝に手について息を荒くするばかりで誰も質問を投げかけることはない。

「よろしい、では解散ね。お疲れ様」

彼女、高町なのははそのまま「敬礼はいいよ」と言って訓練場を後にした。

「お疲れ様でした！！」

という威勢の良い若者のかけ声を背に受けながら、なのはは少しだけ額に浮かんだ汗を拭って小さく息を吐き出した。

「おーい、なのはー。訓練終わったのかあ？」

幼くて威勢の良い、そして少し乱暴な声がなのはの行く手から聞こえた。

なのはその越えに相好を崩し、はじけるような笑顔で手を振った。「ヴィータちゃん。おはよう。訓練はさつき終わったよ」

ヴィータと呼ばれた少女は、なのはの隣に立って歩き始めた。彼女は小柄なのはに比べても随分と身体が小さい。長く両サイドでまとめられた髪と、相手を射貫くような眼差しは歴戦の勇士を思わせるが、平たい胸の前で組まれた腕とどこかつまらなさそうに浮かべられた表情からはそれを全て台無しにするほどの可愛らしさが醸し出されている。

二人は暫く雑談を交わしつつ道を行き、教導隊本部施設へと足を運ぶ。その道の途中、迷彩柄の軍服に身をつつむ一人の男とすれ違い、二人は敬礼を交わした。

そして、その彼が曲がり角の向こうに消えたところで、なのはは、あれっと思つて振り向いた。

「どうした？ なのは」

いきなり立ち止まったなのはにヴィータは少し小首をかしげる。

「今の人、ここでは見えないね。新しい人かな」

一等空尉でありながら現場の教官を務めるなのはは、ここにいる人間の殆どの顔を覚えていた。しかし、先程通り過ぎた男はなのはには見覚えのない顔だったらしい。

誰だろうと考えても彼ほどの若い男の顔など、新人の訓練士以外に思い当たるところはなく、あの様子は任官間もないという雰囲気醸し出していなかった。

少なくとも彼女の記憶の中には一度も出現したことのない人間であることは間違いなかった。なのはは無意識に自らのデバイス、レイジング・ハートに手を伸ばし、レイジング・ハートは自主的にデータを検索した。

該当者無し。それはつまり、彼女が彼と出会ったことは一度もないと言ふことは証明されたことだった。

ただすれ違っただけに過ぎない一人の兵士。しかし、彼女の胸には何故かそれだけではないという予感がしていた。

なのはは、怪訝そうな表情で自分を見るヴィータにぎこちない笑みを浮かべ、その建物に入った。

「エルンスト・カーネルー等陸士。入ります」

教導隊所属の陸士訓練所の一角。書斎と応接間の両方を合わせたかのような広い部屋にエルンストは足を運んだ。快晴の朝であるにもかかわらず、そのカーテンは閉め切られ、照明も少し薄暗く落とされている。

「任務ご苦労、カーネルー等陸士。無事に帰還出来たようで何よりだ」

その応接間の奥、広い木の机に腰を下ろす一人の男がそんな彼を出迎えた。

「無事ではありません、ベルディナ・アーク・ブルーネス一等陸佐。ニコルが死にました」

「らしいな」

ベルディナはそういうと、ゆっくりと椅子から腰を上げた。

「だが、お前等はターゲットを見事仕留め、航空魔術師4人をやった。悪くない功績だ」

そして、ニコルという優秀な観測士が犠牲になった。ベルディナはエルンストから背を向け、小さく溜息をついた。ニコル・エルトニルー等陸士の殉職は既に彼の三尉特進という処理が行われ、訓練中の事故による殉死という事で書類ができあがっていた。

自分たちの仕事はけっして表に出されることなく、任務による死亡は訓練中の事故死と言うことで全ての決着がつく。特例でその書類に目を通すことが出来たエルンストは、わかりきっていたことを改めて知らされ少し気分を害した。

その死が自分たちのミスによるものであるなら、それは納得できるし、相棒が死んだ事にも意味があるとエルンストは思ったが、今回は本来ならあり得ない戦闘によって引き起こされたものであるためエルンストは承伏しかねていた。

あれは情報部のミスだ。任務を終え、命からがら帰還したエルンストはそう考えるようになった。情報部が提供したデータによると、あのとときあの場所にはターゲット以外にはSP程度の戦力しか存在しないはずだった。

ターゲットの身辺警護を執り行うSPは、はっきり言って彼らにとっては戦力外に過ぎない。それらSPが組織を組んでその身辺を警護したところで、それをカバーできる範囲はせいぜい半径1km程度のことだ。彼らはその三倍、3km近い距離から狙撃を行い、完璧に任務を果たした。

しかし、その後出現した航空魔導師の編隊はまるで、あのとときあの場所でターゲットが狙撃されることを見越して展開していたようにしか思えない。エルンストはあの連中の平均ランクはおおよそAランクだと考えていた。おそらくその目算は間違っではないだろう。そして、彼らが行った戦闘は明らかに対狙撃手のために専門訓練を受けたものの動きだった。

（そうなければ）

とエルンストは思う。

（俺たちのチームが、たかだか航空魔術師4人にやられるはずがない）

その後、ここに出頭する直前にエルンストは情報部に情報漏洩の可能性があると報告書を提出したが、その返答はまだ届いていない。もしも、それが真実なら、ロストログア事件の重要参考人であるリカルド・マックフォートを邪魔に思う人物がそれを排除した記憶を持つもの諸共に闇に葬り去ろうとしたということか。

そして、エルンストが現在最も怪しいと考えている人物が彼の目の前にいる時空管理局教導武官正、ベルディナ・アーク・ブルーネ

又一等陸佐だった。

彼はエルンスト達に直接今回の任務を通達し、情報部の情報を彼らに与えた人物だった。

教導隊の責任者を務める傍ら、エルンスト達のような非合法任務を請け負う者達への橋渡しを行う事からエルンストは出会った当初からこの人物をよく思っていたいなかった。

腹の奥が読めない、二枚舌どころか三枚も四枚も舌を持つ男、スリムに引き締まったその腹の下には薄汚い陰謀が渦巻いている男。おそらくニコルもそう感じていたのだろう。今では確かめることは出来ないが。

次第に険しくなる眉間のしわを見たベルディナは、再びその身を椅子に沈め深く溜息をついた。

「そんなに睨むなよ。俺だって優秀な観測士を失って気落ちしてるところだ。まあ、お前のような優秀な狙撃手が生き残ってくれたことがせめての幸いではあったがな」

その表情、仕草、口調からは演技を感じられない。ならばこの人物は無関係なのかとエルンストは一瞬思ったが、そのような演技などこの人物には容易なことだと思い直した。まるで飄々として肩をすくめる彼の姿はまるでエルンストと同じ年齢とも思えるほど若々しい。しかし、彼の経歴を見る限りその年齢はエルンストの4倍以上の年を重ねているはずだった。エルンストカーネル、”記録上”18歳。しかし、彼が駆け抜け生き残ってきた任務は他に類を見ないほど過酷で危険なものだった。

「俺はあいつと一緒に死ねれば良かったと考えます。次の任務を、一等陸佐」

判断できないことは判断するな。情報が不足しているならまずは情報を収集せよ。邪推や都合の良い結論は破滅を呼び込む。狙撃手訓練時代に教官から教わった教訓を彼は忠実に守った。

情報が不足しているのなら集めればいい、あらゆる手段を講じてそれを行えばいい、自分にはそれだけの技術が与えられた。しかし、

不足しているのは特権というものだった。

「次の任務はもう決まっている。そろそろ届くころだな」

ベルディナはそういうと、そのまま押し黙った。

そして、エルンストが直立不動に耐えきれなくなる寸前に彼の背後の扉が叩かれた。

「高町一等空尉入ります」

その声はまるでエルンストの心を優しくなで上げるような、彼にしてみれば最も不快に感じるような声だった。

扉が開き、その人物が顔を見せた時、エルンストは、ああ、この人だったのかと思った。

そこに立っていた女性は、先程外の通路ですれ違った訓練教官だった。

高町なのは一等空尉。他人に興味のないエルンストでもその名前は知っていた。時空管理局のエース・オブ・エース。10年間飛び続けた空の覇者。最強クラスの航空魔術師。

しかし、エルンストは少し疑問に思った。航空教導隊の教官であるはずなのはがなぜ、陸士訓練所で教官を行っているのか。

「やあ、高町一尉。呼び立てて済まんね」

「いいえ、ベルディナ一佐。訓練終わりの中休みの最中でしたから」「ここに来て一週間になるが、順調か？」

エルンストは直立不動がいい加減疲れてきたので、休めの体勢になり二人の会話の行く末を見守った。

「とても良いです。みんな元気で教えるのにも身が入ります」

それにしても、そうか。彼女がここに来てから一週間程度にしかないのか。だったら、自分が任務の前に彼女と顔を合わさなかったのも納得がいく。

「それは何よりだな。君をこちらに呼び込んで正解だったようだ。

しばらくの出向任務だが、まあよろしくやってくれ」

「恐縮です、一佐」

エルンストは、なのはがどついういきさつでここにいるのかおお

よそ理解できた。さしずめ、ベルディナが優秀な教官を引き込むために航空隊を口説き落とすのだらう。

おそらく航空隊も彼女ほどの人材をみすみす渡すわけにはいかないところ、短期間による出向任務ということで落ち着いたに違いない。

ならばなのは……。そこでエルンストは教導隊の慣習的な事を思い出した。おそらくなのはに伝えられたことはこうに違いない。

『君が教導隊の教官としてやって行くにしても、航空魔術師が航空隊のみに携わるわけにはいかない。空と陸、その双方を同時に考えることの出来る経験がこれから先には必要となる。現場に立つにしても、教導武官を目指すにしてもだ』

エルンストは、そういつてベルディナがなのはを口説き落とす場面をつぶさにシミュレートできた。この老獪のことだ。もっと言葉巧みに、女をたぶらかすかのような狡猾さで行ったに違いない。

その場面はどこかのホテルのラウンジが高級レストランかと予想したが、それはさすがに想像力が豊かすぎるとエルンストはそこで思考を打ち切った。

ベルディナは一通りなのはと雑談を交わし、さてと、と呟いて懷から煙草を取り出し火をつけた。

一般的な官邸は全面禁煙が言われているが、彼はそんなブームなど気にすることなくそれを吹かす。

狙撃手の習性で身体に匂いがつくことを嫌うエルンストは少し不快に眉をひそめるがベルディナは全く意に介さず言葉を続けた。

そしてベルディナは五指をエルンストに向け、

「順番は逆になったが、紹介しよう。高町一尉。こちらはエルンスト・カーネル一等陸士だ。今回、君の訓練補佐官として任命された」なるほど、それが自分の次の任務か。とエルンストは思うと、改めてなのはに向き合い、背筋を伸ばして敬礼をした。

「お初にお目にかかります。高町一等空尉。自分はエルンスト・カーネル一等陸士であります。高名な一尉と共に出来ることを光栄に

思います。」

それは一通りの儀礼のようなものだった。会った瞬間から氣にくだわれないと感じていた手合いだったが、相手は上官で自分は下っ端である以上それを表に出すわけにはいかない。

なのははそんな彼に笑顔を向け、ゆつたりとした仕草で敬礼を返した。

「初めまして、エルンスト一士。私は高町なのはは一等空尉です。高名なんて言われると照れるけど、これから一緒にがんばりましょう。よろしくね」

やはり氣に入らないと感じたエルンストは、なのはの差し出す手を無視し、ベルディナの方へと身体を向けた。

なのはは、少し残念そうな表情で上げてしまった手を胸の前で握ると、ちらつとベルディナを見た。

ベルディナは肩をすくめ、鼻を鳴らして立ち上がった。

「まあ、よろしくやってくれ。エルンスト一士の処遇は高町一尉に一任する。彼は優秀だから、便利に使ってやれ。以上だ、二名の退室を許可する」

ベルディナはそういうと話はこれで終わりだと言わんばかりに椅子に腰を下ろすと、そのままクルツと回転してカーテンの向こうに視線を向けた。

「では、失礼いたします」

二人の敬礼と共に発せられた声にもベルディナはだらしなく手を挙げて答え、二人は部屋を後にした。

扉が閉ざされ、二人の足音が遠くへと消えていくのを見計らってベルディナは一つだけ溜息をついた。

「それにしても、情報部も良い仕事をしたもんだぜ。少し礼をいわんとな」

彼はそう呟くと、机を開きそこに設えられた専用回線の受話器を上げるとボタンをプッシュすることなくただ一言、

「情報部へつなげ」

と口にした。

第三話 高町なのは

部屋を出た二人、高町なのはとエルンスト・カーネルはそのまま一言も会話を交わすことなく執務棟の廊下を歩いていった。

ただ黙ってなのはの後ろを歩くエルンストの雰囲気になのはは酷く居心地を悪くするが、それでも何とか彼に笑いかけ会話を起こそうとして失敗していた。

さすがにここまで来れば、多少人の心を読むことを苦手とする彼女にも、彼が自分のことを何故か嫌っているということが理解できた。

しかし、その理由は全く思い当たるところがなかった。今日初めて顔を合わせるはずの相手が自分によい印象を抱いていないのだ、長年連れ添った仲間達ならいざ知らず彼女にはその理由を知るよしなど何処にもあるはずがない。

「ごめんね。本当ならここを案内するべきなんだけど、午後からの訓練が押してるから、後になりそうなの」

なのはは、一週間前にここに出向になったばかりでエルンストが本来ならここ所属である事を知らない様子だ。

ここに所属しているというのは何かと語弊がある。エルンストは教導隊所属の陸士ではないが、“書類上”の所属はこの陸士教導隊ということにされているに過ぎないのだ。ニコルもそうだった。故に、彼の死が”訓練中の事故死”ということにしても誰も疑いを持たないということとなる。

おそらく自分が任務中に死亡しても、ニコルと同じように訓練中の事故死で片付けられるのだろうな、とエルンストは細く微笑むときりつとした表情でなのはに向き合った。

「いえ、ここの構造は熟知しておりますので問題ありません。高町一尉」

ただし、構造は熟知しているとは言ってもそこに所属する人間と

の交流は浅く、彼がここにいる事を知らないものもここには多いことだろう。

朝にこの訓練所に足を運んだ時も、すれ違う者達から怪訝な視線を向けられたことにエルンストは少し安堵した。

はつきりと言おう、既に周知の事実かも知れないが、エルンスト・カーネルは人間不信のまった中にあるのだ。だから、その中でもエルンストがある程度友人として認めたニコルは貴重な人間だった。ニコルの前に組んでいた、今では名前も思い出せない相棒も任務中に死んだ。彼もエルンストにとっては悪くない相手だと思われていた。

（死ぬのはいつでもいい奴ばかりだ。結局また生き残ってしまった。）

だったら、食堂に行こうと言って彼を食堂に案内するなのはないついでエルンストも歩を進める。

そういえば、とエルンストは気がついた。彼は食堂の位置は知っていたが、それを利用するのは今回が初めてだった。

食事を単なる栄養補給と考える彼にとって、それが美味いか不味いかなどどうでもいい事に違いない。

道を行くのはが時折振り向きながら、ここの食堂は他と違っていいコックが入っており、安い割にはとても美味しいのだと、端から見ても一生懸命説明しているのに適当に頷きつつ、相づちを打ちつつその内容の僅かも記憶することは無かった。

食堂に入った二人を出迎えたのは、なにやら頬を膨らませてふてくされたヴィータだった。

「なのは、遅えーよ。あたしを飢え死にさせる気か」

その彼女もテーブルに突っ伏しながら、待ち人の隣に見慣れない男がついている事に気がついた。

ヴィータは相手を萎縮させる程の睨みをきかせてエルンストに目を向けるが、エルンストは黙ってその場に立っているだけだった。

（なんだ？ こいつ）

ヴィータは得体の知れない相手を前にした犬のように、警戒心に髪を逆立てた。

（喧嘩っ早い子犬のような奴だ）

エルンストはそう彼女を見下ろし、ただ黙ってじっとしていた。

「ええっと、その。ヴィータちゃん。こちら、エルンスト・カーネル一等陸士で、今回私の補佐をしてくれることになったの」

ヴィータは、「補佐あ？」と声を漏らしたが、なのはは絶妙にそれを回避し、今度はエルンストに向かってヴィータを紹介した。

「エルンスト君。こっちは八神ヴィータ二等陸尉。ちっちゃいけど、立派な武装隊員なんだよ」

「ちっちゃいは余計だ！」

と腕を振り回して抗議するヴィータを半ば無視してエルンストは、敬礼をし、

「よろしくお願いします。ヴィータ二等陸尉」

と、上官に対する最低限の礼儀を表した。

「お、おう」

さっきまで不躰な（とヴィータには見えた）態度を取っていた手合いがここに来ていきなり直立不動で敬礼を向けたため、ヴィータもそれを無視することは出来ず、「よろしくな」と言って敬礼を交わした。

ひとまず騒動が収まった事に安堵したなのはは（と、言っても半分以上はなのはの責任でもあるが）、ホッと一息ついて食事にしようと二人を誘った。

食券の前で何にしようかあれこれ相談するなのははとヴィータを尻目に、エルンストはとりあえず一番安い定食を選びカウンターに並んだ。

昼食時から少しだけ外れていたためか、そこに並ぶものは片手で数えられる程度でエルンストも、さんざん悩んだあげくに日替わり定食にした後発の二人も難なく食事を手にし、ヴィータが元々座っていた席に落ち着いた。

「ところでなのは。午後からの訓練、デバイス使ってすんだろ？
あたしも参加するからな」

と、食事を取りつつ暫く談笑をしていた二人（エルンストはその輪に加わらず、一人黙々と食事を口にしていた）は、午後からの訓練の事を話題にしていた。

エルンストは、食後の水を口にしながらそれに耳を傾けた。

ヴィータも訓練教官としてチームを率いているというらしいが、その彼女も午後からの訓練にはなのはと合流するらしい。どうやらなのはのチームとヴィータのチームとの合同訓練になるらしいとエルンストはそれまでの会話から推測した。

「うん、ちゃんと聞いているから大丈夫だよ。だけど、どうしようね。エルンスト君は来たばかりだから、今日は見学にしておこうか？」

なのはそういつてエルンストの表情を伺うが、エルンストは正直冗談じゃないと思った。

「いえ、俺の能力を見定めていただく必要がありますので、出来れば参加したいと考えます。高町一尉」

訓練教官とは訓練生と殆ど実戦に近い模擬戦闘を行うこともある。訓練のレベルが向上すると、そちらの方が頻度が高くなるため、補佐とはいえ訓練官に任命されたエルンストは可及的速やかに彼女たちに自分の運用方式を決定してもらわなければならない。

「そうだねえ。ちなみに、エルンスト君のデバイスはどんなの？」

なのははエルンストの首にかけられた赤い宝石のようなものに目を向けた。それは、なのはが首に提げているものと同じような様相をしていたため、なのはそれがエルンストが持つデバイスだと当たりをつけたようだ。

エルンストはその宝石を手にとると、首から下ろし、少し力を入れて握りしめた。

僅かな光の明滅に、なのはとヴィータは目を背ける。そして、その光のあとに残されたものは双眼鏡の形をしたものだった。

「監視用デバイス【コールド・アイズ】です」

それは一見ただけで戦闘用デバイスではないと分かるものだった。

なのはは少し興味深そうにそのデバイスに目を向けるが、ヴィータはすぐに興味を失った様子で食後の牛乳を口にしていた。

「戦闘用のデバイスじゃないんだ」

なのはは少し拍子抜けした様子だったが、そのデバイスの表面に記載されたキハイルの文字に少し目を取られていた。

「はい、あくまで情報収集を主眼に置かれたデバイスです。このデバイスでは戦闘は不可能と考えます」

エルンストはそう言いつつ腕にはめられた時計を目にした。彼の本来のデバイス、【クリミナル・エア】と【ストライク・ビューロー】の待機状態であるそれは現在凍結中にあつた。いや、【ストライク・ビューロー】に関しては凍結中であっても、情報収集と処理の機能は使用することが出来るが、スコープとしての機能は麻痺している状態だ。【コールド・アイズ】と情報結合して、その処理をすることには問題はない。

ここに来る前に何度もその凍結解除を試してみたが、その解除には特別な暗号が必要になっており、彼ではどうしてもそれを解除することが出来ない。

おそらく、ベルディナ・アーク・ブルーネスの仕業だろうと彼は推測した。ならば、この訓練期間中に自分はこの二つを使用するとは禁じられているのだと彼は悟った。

「情報収集ねえ。つかえんのか、それ？」

ヴィータの胡散臭そうな物言いに、エルンストは少しだけ力チンと来て言い返した。

「戦場から情報というものが完全に無くなってしまえば、これの使い道はありません」

情報は力だ。如何なる戦力を持つものであっても情報を的確に運用できなければ全く意味がない。故に、信頼性のある情報を収集する立場にあるものは事実上戦場を支配するといっても過言ではない。

これも彼が狙撃手訓練時代に聞かされた教訓の一つだった。

エルンストは常にこれが正しいと実感する毎日を送っていた。彼らが収集してきた情報は確実に戦場の全土に行き渡り、そこにいる全員を的確にサポートしてきたという自信があり、プライドもそこにあつた。

ヴィータの物言いは、それまでの自分、死んでいった相棒達をけなされたように思えたのだ。

「ヴィータちゃん、情報というのはね作戦の全部に関わる重要な要素なんだよ。そんなこと言っちゃダメ。ごめんね、エルンスト君」
なのはの言葉にヴィータは「悪かったよ」と言つて黙つた。

「だけど、どうしようかな。私としては一度模擬戦をしてエルンスト君の戦力を把握しようかなって思つてただけど」

「それは不可能ですね。これではまともに戦えません」

なのはは、首にかけられたデバイス、【レイジング・ハート】を手でもてあそびながら少し首をひねつた。

「Master, I have an idea (マスター、私に一つ考えがあります)」

「ん？ なに？ レイジング・ハート」

「Will you make him to command our new face in next sham battle? (彼に次の模擬戦で新米達の指揮をさせてみては?)」
「そうだねえ」

「I think that his Deva is suitable to command to operation (彼の持つデバイスはそれにうってつけたと思います)」
「ヴィータちゃんはどう思う？」

【レイジング・ハート】の助言を聞いてなのはは、一応ヴィータの意見も聞いておくことにした。

「別に良いんじゃないの。あたしもそれが最善だと思うぜ」

「それなら、通常訓練は情報関係の子達についてもらつて。今回の

締め模擬戦は、みんなの作戦指示をエルンスト君にしてもらって事で良いかな」

エルンストは頷いて一言「了解」と言った。

「その模擬戦の相手は誰になるのですか？」

通常で行けば、それはおそらくシミュレーターが作り出すガジェット（自動攻撃機）の模擬体か、何らかの機能を持ったマンターゲツトか、とエルンストは考えていた。どうということはない、実際エルンストが受けた訓練はそれが殆どだったからだ。

「私たちだよ？」

エルンストは、それを聞いて少し驚いた。聞くとところによるとなのはオーバーSランクであると知っていた。現在は陸士部隊の規定により、その能力に制限がかけられているにしても、その能力はAAランク〜AAAランクに相当するはずだ。そして、彼女のいう”私たち”とは、その隣で退屈そうに座るウィータも含まれているのだろ。彼女の能力は見た目では計り知れないが、なのはと交流を持っていると言うことは少なくともAAランクは超えているはずだとエルンストは推測した。

少なくともAAランクを超える魔導師二人が新米の相手となる。新米の訓練にしては少し荷が重すぎるのではないだろうか。

その二人の様子からして、手加減することなど絶対にあり得なさそうだ。

（新米虐めか、それともそれがこの流儀なのか）

どちらにせよ面白いことになりそうだとエルンストは僅かに頬をゆるませた。

「それじゃあ、そろそろ行こうか」

「ああ、気の早い奴らはもう訓練場に来てるかもしれないな」
二人はトレイを持ち上げて返却場所にそれを返した。エルンストもそれに習い、トレイを返却し二人の後を追った。

第四話 不可解な戦術

午後の訓練の前半は、通常通りガジェット（小型自動歩兵）を相手とした戦闘訓練だった。

エルンストは新米達をざっと見渡して、彼らは必要最低限のレベル程度にはデバイスを扱っているなと感じていた。

（だが、訓練を受けてまだ数週間程度なのは分かるが、練度が低すぎる）

シミュレーションフィールドが生み出したビル群の模擬体が立ち並ぶ訓練場の高い場所で、訓練生に対して様々な指示を出すのはとヴィータの隣でそれらを俯瞰していたエルンストは、僅かに溜息をつき【コールド・アイズ】を下ろした。

「エルンスト君の目から見てどうか？ あの子達は」

訓練を受けているのは、最近時空管理局に入隊した4人の魔導師のようだ。

なのはは彼らの個々が映し出されたモニターを見ながらエルンストに声をかけた。

「バランスは整っていると思います。最近デバイスを手にし始めたばかりにしてはですが。しかし、やはりまだまだ雑ですね。自分の目の前しか見えていない」

エルンストは、自分の前にも設えられたモニターを少しだけ操作し、模擬体ガジェットの進路を少し変更した。

彼にとっては少しだけパターンを変えただけのことだったが、モニターに浮かぶ彼らはまるで左右から強襲を受けたかのように狼狽し、その戦列を乱していた。

そうなればそれぞれの意思で各個撃破しか方法は無くなり、エルンストは彼らに襲いかかる4体のガジェットの戦術アルゴリズムをそれぞれに変更した。

「一人やられたぞ。センターのエルトだ」

ヴィータが、ヤレヤレと言いながらモニターを指さした。

エルンストの【コールド・アイズ】もそれを知らせるように、さつきまでそこにあったオレンジの光点が消えた。あとは、三つの青の光点が残されただけ。

おそらく、すぐに決着はつくだろう。

エルンストは、再びガジェットのアлゴリズムを変更すると、それを見守った。

「エルトは武装解除してそこに待機。動いちゃダメだよ」

なのははすかさずエルトに指示を送り、彼は悔しそうな表情で「はい」と言ってその場に待機した。

エルトは彼らのチームのリーダーを執り行っている人物だ。エルンストは、最初にガジェットの設定を変更した際、4体ともエルトを集中的に狙うように設定していた。

それは、リーダーであるエルトが狙われるのは戦場では必ず起こる状況であるし、他のメンバーがどのようにして敵からリーダーを守るのかを見てみたかった部分がある。

それにしても、何故あの連中は今の時期にもなつてこんなところで訓練をしているのだろうか。エルンストは少し疑問に思った。

自分のことを照らし合わせて考えてみた結果、新米であっても今の時期なら正式配備された実働部隊に所属になり、通常なら訓練はそこで行われるはずだ。それに、ここで行われているのは基礎訓練というよりも実戦訓練に近いものである。

ならば、そういった訓練はむしろ正式部隊で行われるべきなのではないかとエルンストは考えに至った。

そう思っている間にも青色の光点は次々とその光を失い、結局10分もしないうちに全ての光点が視界から消え去っていた。

（ストライク・ビューワー、コールド・アイズと情報結合。情報処理開始）

それを見計らい、エルンストはさつきまで【コールド・アイズ】が収集していた情報の全てを【ストライク・ビューワー】に送り込

んだ。

それに答えるように、腕輪の形となった「ストライク・ビューワ」は一瞬だけ光を明滅させ、すぐさま情報を処理にかかった。

その処理には数秒も擁することなく、先程の戦闘結果がその詳細に至るまでまとめ上げられ、エルンストが独自に設定している戦闘評価まで終了した。

本来ならこれはリアルタイムで行っても良かったのだが、それでは隣にいる二人に自分は「コールド・アイズ」以外のデバイスも持っている事を知らせることとなる。

それは別段どうということはないのだが、機能凍結されているデバイスをさらけ出すのはエルンストにとってあまり良くないことのように感じられ、結果的に気づかれないようにそれをするしか他がなかったのだ。

「コールド・アイズ」はあくまで情報を収集する事しかできない。それを処理するには他のデバイスが必要となる。いっそのことこの二つをくつつけてしまおうかとも思ったが、それが出来る技術者はおそらくアーマード・ウェポン・デバイス社にしかないだろうと思ひ断念した。

エルンストの隣でいろいろと相談し合うのはとヴィータはエルンストの「ストライク・ビューワ」のことに気がついていないだろう。

なのははとりあえず、4人に集合の号令をかけると少し苦々しい表情を浮かべ、訓練場をあとにした。

結果を言う必要もないな。とエルンストは集合した4人の表情をみてそう感じた。特に最初に撃墜されたエルトの落ち込み具合は、激しかった。

エルンストは、なのはの指示で先程の戦闘の評価と各個人の優劣

を口にした。

「確かに個々人の技能は最低限問題ないレベルだ。しかし、それが統合されてどうして戦力が落ちる。特にエルト、お前はリーダーとしてチームを率いる立場にあるにもかかわらずお前が最初に狼狽してどうする。いかに絶望的な戦況かでも常に冷静に周囲を観察し、適正かつ的確な指示を部下に与えなければならぬ。そして、他のものはどうしてエルトを的確にサポートしない」

おそらく、なのはここまで厳しく指摘しないだろう。彼女なら良いところをほめつつ、欠点をやんわりとながら的確に指摘することで訓練生のモチベーションを高める方法をとるだろうが、エルンストにはそれは出来なかった。

それもそのはず。エルンストは今まで教官としての訓練を受けたことはないのだから。

なのはとヴィータはエルンストの後ろに立ち、彼の行く末を見守った。

「なあ、なのは。いいのか？ あれで」

ヴィータはなのはを横目で見ながらささやいた。

「うん。今は見守ろう」

二人にはエルンストの指導方法には問題があると感じていたが、彼の口から出される事項の全てはまるで彼らと同じ戦場にいたかのような精細さがあった。

実際、なのはとヴィータがモニターしていた情報以上の情報を彼は掴んでおり、どういうわけか訓練生達が個々人で行っていた会話の内容さえも掴んでいるような雰囲気さえも持つ。

あれが、【コールド・アイズ】の能力なのか、となのはは思うが、情報収集にのみ重きを置かれたそれだけでは不可能なことだとも感じていた。

「高町一尉。一通りの評価は終わりましたが」

物思いに沈みかけたなのはそういつて自分を見るエルンストに気がつき、すぐに笑顔を浮かべて入れ替わるように訓練生に向き合

った。

「はい、では今のカーネル一士の指示をしつかりと頭に置いてもう一度だね」

そんななのはの言葉に訓練生はあからさまに苦い顔を浮かべた。しかし、不満を言うものは誰一人いないことにヴィータは「少しは成長したか」とつぶやき、なのはの指示でさつきと同じ配置へと戻った。

エルンストは飛行適正がそれほど高くないので、ヴィータのサポートをもらう形でビルの上へと足を下ろした。

「さてと」

なのはは再びモニターを空中に出し、それを操作しようとしてエルンストのほうを向いた。

「ねえ、エルンスト君。今度の目標の配置は君がやってくれないかな」

なのはは先程の戦闘で最後にエルンストが操作したガジェットの配置を見て、彼ならどういう風な訓練を行うのか少し興味がわいたようだ。

エルンストは頷いて、

「ガジェットの配置と機能は自分が設定しても良いということですか？」

と確認した。

なのはは、

「うん、そうだね」

と端的にそういうと、自分のモニターをエルンストの方へと受け渡した。

「連中では15分持たないかも知れませんが。俺は容赦がないですから」

「少しは加減してね。それに、次の模擬戦の判断材料になると思うから、あまり無茶な要求はしない方が良くと思うよ」

「それもそうですな」

エルンストはそう答えると、モニターの光点に映る訓練生を中心にして、合計4体のガジェットを配置した。

「それだけで良いのかよ」

ヴィータは、4体じゃ少なすぎるだろうと思いエルンストを聞いた。確かに、先程の戦闘で出されたガジェットは合計15体。エルンストが操作した最後の4体以外はことごとく撃墜されていたので、それがたったの4体だけでは訓練にならないのではないかと考えるのは当たり前のことだ。

「おそらく4体ぐらいなら何とかなるでしょう」

エルンストは少しだけ論点をずらして答えた。おそらく二人は、エルンストが訓練生を甘く見すぎていると感じているはずだ。しかし、4体ぐらいというのは訓練生にとってではない。むしろ、自分にとってのことだった。

エルンストの脳裏には少しだけ二人を驚かせてやろうという思惑が渦巻いていた。

訓練生を中心にして扇状に配置されたガジェットのセッティングが終了した。

エルンストはなのは達の表情を見、二人は頷いた。

「それでは訓練を開始する。ガジェットの総数は全部で4体。それを30分以内に全て撃墜せよ。なお、君たちのモニターにはガジェットは表示されないこととした。これは相手の情報攪乱ジャミングを受けた状態でいかに適切に目標を発見し排除できるかを試す訓練だ。ただし、ガジェットは常に君たちをモニターしていると言つことを各員心せよ」

訓練生の4人の表情に安堵が広がるのをエルンストは感じた。その程度の訓練なら今までさんざん受けてきている。それも相手はたった4体。30分も待たないうちに簡単に撃墜できると考えているのだろう。

（さて、何処までついてきてくれるか）

エルンストは、【コールド・アイズ】をのぞき込み、【ストライ

ク・ビューワー」の接続をオープンにした。

【ストライク・ビューワー】が操るもの、それはエルンストの意識によって制御される4体のガジェットだった。エルンストが4体なら何とかなると言ったのは、機能凍結を喰らった【ストライク・ビューワー】が現状リアルタイムで操作できるガジェットの事だったのだ。

情報結合と処理を主眼にする【ストライク・ビューワー】であれば、単純な機能しか持たない機動歩兵ガジェット程度なら造作なく操ることが出来る。そうして、命を救われた場面も何度もあった。

「では、作戦開始」

エルンストはその言葉と共に【ストライク・ビューワー】のコントロールをオープンにした。

ガジェットの諸元がエルンストの脳裏に入力され、それが自分の思いのままに制御されるということを確認するとエルンストはガジェットを個々に操作し始めた。

訓練生の行動は素早かった。開始の合図と共に、リーダーであるエルトと情報収集及び後方支援を担当するノアを残し、フロント・アタッカー（前衛攻撃担当）の二人、クラントとカリスはすぐさま散開し、ノアとの情報を双方回線で共有しつつ索敵を始める。

彼らの交わす念話を盗み聞きしているエルンストには、彼が非常に落ち着いているということが手に取るように分かった。

（まずは、接敵か）

エルンストは4体のガジェットを2体ずつの2班に分け、それぞれをフロント・アタッカーへと向けた。

二体の内片方は真っ直ぐと向かい、もう片方は不規則に迂回させる。

二人はほぼ同時にガジェットと接敵した。

グローブ型のデバイスを持つカリス、剣の形をしたデバイスを持つクラントはすぐさまカートリッジをロードし真っ直ぐそれへと向かっていく。

（勢いのいい戦法だ。短期決戦を狙っているな。当然だ）

エルンストはガジェットをすぐさま後退させ、それぞれ距離を取るように威嚇射撃を続けた。

しかし、二人の機動力はそれを容易に回避し、エルンストのガジェットは二人の追尾を受けることとなる。相手も時折威嚇のためか射撃系の攻撃を繰り返してくるが、本来近接戦闘を得意とする彼らではその弾頭制御はお粗末なもので、【ストライク・ビューワー】ランダム・アボイダンスがはじき出した乱数回避により全く難なく避けることが出来る。

時に地を疾走し、空中へ舞い上がり宙返りを繰り返出し、予測不能な急制動を繰り返すガジェットに二人は少々困惑し始めた。

ガジェットは本来自動制御されることが殆どであるから、相手がまるで自分の動きに合わせそれを凌駕するマニューバを繰り返すことは彼らの常識には無いのだろう。

彼らの動きが一瞬止まった。

エルンストは、その瞬間を逃さなかった。

彼らがロックするガジェットはあくまでも囷、その背後に常に発見されず、付かず離れず追尾していたもう一つの敵に彼らは気がつかなかった。

突然街角から現れたもう一体のガジェットに二人とも狼狽され、その間断ない射撃にクラントがあっけなく撃墜された。

反射神経の高いカリスはさすがに離脱できたようだが、いまだ敵を一体も討ち取っていないまま一人の仲間を失ったことに歯ぎしりしている様子が手に取れる。

クラントを追っていたガジェットもすぐさま目標をカリスへと移行させ、カリスは都合4体の敵に追い回される結果となった。

カリスはすぐさま後方に待機しているエルトとノアに応援を要求した。二人は既に状況を把握していた様子で、彼の要求より前に行動を開始していた。

（一度合流させても良いが、それでは少しつたないか）

追尾は【ストライク・ビューワー】に任せ、エルンストは徐々に

接近しつつある三体の光点をみてそう思った。

（だが、個人戦の技法はある程度把握したことだ。この辺りで合流させて、団体戦の技法を確認するのも良いかもしれないな）

エルンストはそう考え、それを「ストライク・ビューワー」に伝えた。

「ストライク・ビューワー」は了承の合図を光の点滅で伝え、追尾していたガジェットを一旦散開させた。

エルンストは彼らの進行速度から、その合流地点を割り出すとそれを包囲するような形でガジェットを配備させ直した。どうやら、散開したと同時に「ストライク・ビューワー」はガジェットに攪乱幕を射出させていたらしく、彼らはガジェット達の位置を再び見失っている様子だった。

エルンストの推測と寸分も変わらない場所とタイミングで彼らは合流し、ノアを中心に守るようにエルトとカリスがその前後についた。『あのガジェットは何か違う。こっちの動きを完全に予測し、こっちの虚を突く行動に出た』

『とにかく散開するのは危険だ。各個撃破されるのは拙い』

時間は既に20分を経過し、あと10分間で勝敗が決まる所まで来た。

エルンストは、細く微笑み、

（そう、戦場ではどこから敵が来るか分からない。どこから攻撃されるか分からない状況は恐ろしいだろう？）

そして、敵に発見されないということがいかに戦術的優位を生み出すか。エルンストはそれを彼らに教えたかった。

ガジェットの配置が完了した。

2体を地上に配置し、あとの2体は上空、ビルの屋上の物陰で彼らを見下ろす。屋上のガジェットが三人を捉えたことを確認すると、エルンストは地上のガジェットと一気に動かしした。

前後より飛来するガジェットにカリスとエルトは個々に散開し、それぞれ攻撃を行った。中央のノアから注意が逸れた。

エルンストはそれを見計らい、屋上のガジェットにノアの撃墜命令を下した。

突然空から降り注ぐ魔法弾の雨に、ノアは完全に逃げ道を失い、実にあっけなく撃墜されることとなった。

そして、それはカリスとエルトの注意を引くには絶好の機会となり、その後4体のガジェットから一斉発射される大規模飽和攻撃に彼らはなすすべもなく瓦解した。

「状況終了。訓練生、全員帰投せよ」

エルンストは、全員の光点が消滅したところを見計らい、訓練生にそう伝えガジェットを消去させた。

エルンストは、指示を仰ぐためなのは達に目を向けるが、彼女たちは少し驚いた様子で彼に目を向けていた。

その視線には困惑と驚愕に加え、僅かに疑念の文字が渦巻いているように思えた。

（少しやり過ぎたか）

エルンストはそう思うが、やってしまったことは取り返しがつかないと思い直すと、二人に指示を仰いだ。

第五話 疑惑

「これでお前達も身に浸みただろう。例え相手より遙かに劣る戦闘力しか持ち合わせなくともそれらを適正かつ的確に運用することで、上位の戦闘集団と同等以上の戦果を上げることが出来る」

エルンストはその言葉を正に身を以て彼らに理解させた。

そして、その後、かねてより予定していた模擬戦闘ではエルンストは訓練生を後方から指揮し、なのはとヴィータを良いところまで追い詰めはしたが結果的に二人のタッグにより惨敗を期した。それでも、今までは二人を追い詰めることすら出来なかった訓練生達は改めて集団戦闘の大切さと、エルンストの情報戦力高さを目の当たりにし、彼らのエルンストに対する棘が若干和らいだように見え、なのはとヴィータは少しだけ安心した。

それでも、なのはとヴィータはエルンストが何か隠しているのではないかという疑念が頭から離れず、その模擬戦の前半はエルンストの真意を測るために少し精細を欠いた行動だったように思える。

エルンスト・カーネル一等陸士。任官してからまだ僅か4年程度である陸士にもかかわらず、彼の情報戦術にはベテランのなのはとヴィータであっても驚愕するしかなかった。

だからこそ、疑念が更に深まる。彼は一体何者なのか。何が目的でこの陸士教導隊に就任となったのか。彼のその人となりの僅かが見えてくるに従って、彼は教導官を目指しているようにはとても思えなかった。

なのはとヴィータは、今日の訓練の報告書をまとめ上げ、ベルデイナへとそれを提出し終わった後、なのはの自室で休憩していた。その部屋は若い女性にしては随分と簡素に見えるが、所々に見受けられるアクセサリー類やファッション情報誌などからなるほどこれは確かに女性の部屋だと納得のいく塩梅だろう。

その隅に、地球の最新ファッション、東京渋谷食べ歩きツアーなどと題されたムック本がバックナンバーまで揃っているところを見ると、今度の休暇で地球に帰省する予定でもあるのかも知れない。

なのははベッドに腰掛け、枕を抱き寄せると執務椅子によじ登ったヴィータと話を始めた。

「今日はなんだか少し疲れたな」

そっぴなのははそのままころんとベッドに横になった。

「まあな、あのエルンストって奴、なんか気にいらねえ」

ヴィータは部屋に設えられたコーヒーマーカーから勝手にコーヒをつぐと、砂糖とミルクをたっぷり入れて飲み始めた。

なのはは訓練終了後、報告書を提出しにいったところで、ベルディナからエルンストに関する諸元が入力されたデータを渡された。彼は、「悪い、渡すの忘れてた」とへらへらしていたが、なのはは苦笑いを浮かべてそれを受け取った。

そして、先程部屋に来たヴィータと共にそれを眺めていたところだったのだ。

エルンスト・カーネル。時空管理局陸士教導隊所属の一等陸士。魔導師ランク、陸戦B+。4年前任官して以来、様々な部隊を転々としながら現在ここに至る。

何故、一つの部隊に所属しないのかその理由は、本人の対人関係に関する問題とだけ記されその細部に関しての記載は存在しなかった。

そして、今日ここに所属になる前の部隊は、陸士の一部隊。主に地上本部周辺の警備を担当する大規模部隊で、若い陸士なら大抵のものは一度はその部隊に所属するというものだった。

しかし、彼のあの戦術スキルはとても警備部隊で培われたものではないということは明らかだった。

あれではまるで、情報戦と諜報戦に長けた特別戦技捜査官のようではないかとヴィータは呟いた。

なのはもそれには賛成だった。だから、ベルディナから渡された

プロフィールには隠匿された部分が多く含まれているのではないかと邪推しているのだ。

「何にしても能力は申し分ないわけだから、私たちとしてはありがたいんだけどね」

正直なところ、時空管理局はその創設以来慢性的な人材不足が続いている状態だ。その状態を鑑みれば、例えその出身が不明な人物でも能力さえあれば、例えそれが幼い子供であっても戦力としてしまう。

なのはもそういった経緯を持つため、あまり大きな声でエルンストに対して疑念があるとは言えないのだ。それに、なのはが数年前まで所属していたかつての実験部隊の事を思うと、誰でも人に言えない事情がある事は重々理解していた。それは、例え気を許しあった友人や仲間であっても簡単には告げることの出来ないものである。

Fの遺産、戦闘機人。こんな事は考えたくはないのだが、エルンストもそれと何か関係しているのではないかと思ってしまう。

かつての実験部隊。今はその実験期間を終え、解体されてしまったかつての職場である機動六課を思い出し、なのははそこで共に戦った仲間達の事を思いやった。

「みんな、今どうしてるかな」

なのはのいうみんなをヴィータもよく理解していた。

幼少より彼女と共にあった仲間、フェイト・T・ハラオウン、ハ神はやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ、アルフ。そして、彼女をこの世界へと導いたユーノ・スクライア、まるで兄のように常に彼女を見守り影ながらサポートをしてくれるクロノ・ハラオウン。誰もがなのはにとってかけがえのない仲間であり、家族も同然の間柄だった。

時折連絡のある彼らは、現在順調に自分の目的のために歩みを進めている様子がうかがえた。

フェイトはあの後、問題なく執務艦長に任命され、現在ではその補佐官と共に一艦の主として時空世界を飛び回っているらしい。は

やてはその後部隊長の職務を辞退し、現在は新部隊立ち上げの補佐をする立場にあるらしい。聞くところによると、二年ほど前、彼女の補佐により、かつての機動六課の実働部隊が産声を上げたとか。その部隊がどのようなものなのか、同じ時空管理局に所属する彼女でもその詳細は聞かされていないということから、それなりに秘匿事項の多い部隊なのだろうが、はやての持つ部隊のことだ、おそらく優秀な人員で構成された良い部隊なのだろう。シグナムを始め、ヴィータを除くヴォルケンリッターは良いはやての護衛と補佐役として有名になりつつある。

クロノは執務官提督として時空管理局をよく導いている。最近、テレビで彼の姿をよく見かけるようになった辺り、順調にキャリアを積んでいることだろう。

そして、ユーノは。なのははベッドの枕元に置かれた二枚のフォトスタンドをちらつと眺めた。

そこには、フェレットの姿をした彼を幼い自分が抱えている写真と、数年前かつての聖王関連の事件を解決した後に彼と撮った写真が並べられていた。

ここ数週間ほど会っていない。以前なら二人とも何とか時間を見つけて食事や買い物に出かけていた、当然娘のヴィヴィオもつれて。しかし、なのははに舞い込んだ昇進の話から急激に忙しくなり、今となっては連絡を取ることもおぼつかなくなっている状態だ。

なのははここに来るまで昇進の話をことごとく辞退していた。それは、今の一等空尉の階級に何の不满もないことも上げられるが、これ以上の昇進をすればいずれ現場にいらなくなってしまう可能性が高まるからだ。

しかし、なのははベルディナに言われた言葉にその考えを改めるべき時が来たということを感じていた。

『君が何時までも現場にいたいという気持ちはよく分かる。しかし、現実はそのもいつていられない。君はそろそろ、次世代を築き上げそれを育成する立場に立つことも考えなければならぬ。ここで、

一つ自分のリアルな将来というものを考えてみてはどうか」

その言葉に彼女は反論できなかった。

そして、思い悩む彼女にユーノは的確な助言をすることが出来なかった。何せ、それはなのは本人の将来に関することなのだ。事実上他人であるユーノにそれをどうしろとは言えない。それはなのにも理解できることだったが、出来ることなら彼には何らかの道を指し示して欲しかったとも思っていた。

そんな彼女に一つの道を与えたのが、ベルディナ本人だったのだ。彼は、ひとまず当面の所、教導武官の道を目指してみてもどうかと進めた。教導武官、それはベルディナの立つ教導隊の頂点のセクション。時空管理局武装隊の将来的なビジョンを模索しそれに関して全ての責任をおう重要なセクションだった。

そのため、彼女は見識と経験を深めるため航空教導隊から陸士教導隊へと出向になったのだ。

「なのは、なのはってば！」

ヴィータが自分を呼ぶ声に、なのははユーノの写真を見つめたまま物思いにふけていた事に気がついた。

「な、なに？ ヴィータちゃん」

「そろそろ飯に行こうぜ」

なのはは時計を見た。確かにヴィータのいうとおりそろそろ夕食時のようだ。今日の訓練はいつもよりハードだったこともあり、なのはも幾分空腹が身体を支配していた。

「そうだね、行こうか」

なのはは制服の上着を取るとそれを羽織り、ボタンをきつちりはめネクタイをしつかりと結んだ。上官たるものの部下の範であるべし。こういう所も気を遣うなのはは良い上官であるのだろう。

ヴィータは彼女に比べると幾分かだらしく見えるが、それでも彼女の元気の良さが伺えてなのはは微笑んだ。

なのははヴィータと共に部屋をあとにする。

「ねえ、ヴィータちゃん。ヴィータちゃんは、将来のことについて

何か考えてる？」

「あたしか？ あたしははやてと一緒にいられたらそれでいい。今はなのはのおもりだけだな」

「おもりって、私そんなに子供じゃないよ」

「あたしらヴォルケンリッターにして見りゃ子供さ」

「そっか、そうだね」

なのははヴィータが少し羨ましくなった。ヴィータは何者にもとらわれることなく、自分が決めた道を貪欲に突き進む。それが他人からすれば失笑を喰らうような淡い望みであっても、彼女はただそれを目指して歩いていくだろう。そして、なのははそういう思いこそ強い力を持つということを知っていた。

私はどうしたいのかな。なのはは隣を歩くヴィータと雑談を交わしながらそんなことを考え続けていた。

答えは出なかった。

第六話 突然の出向

それから一週間は平和なものだった。

朝起きて、午前の基礎訓練を行い、午後はデバイスを使用した実戦訓練をただひたすらに続けた。その間に入った一日だけの休暇でも自主訓練をする者が多くおり、エルンストはその監督と指導に名乗りを上げた。

訓練生はこの一週間で随分と成長したとなのは実感した。

それは、エルンストの存在が大きいことは目に見えて明らかだった。

訓練生はエルンストが自分たちと同年代だということを知らなかったらしい。故に、自分たちと殆ど年の変わらないエルンストがあればど見事な戦術を見せたことに驚くと共に、自分たちも負けてはいられないという気概を誘発したというわけだ。

エルンストはそれを見て、皮肉混じりに、

「それだけやれるのなら、何故今までそうしなかった。お前達はまじめにしていなかったのか？」

といってその成果を評したが、既にエルンストの人となりがある程度理解していた訓練生にとってはそれは最高位のほめ言葉だと感じたらしい。

なのはとヴィータはそれを見て、この訓練生達はこのままエルンストに任せてしまってもいいかなと思いはじめたようになった。

しかし、訓練が軌道に乗り始めいよいよこれからだというところで三人はベルディナから直接呼び出しを喰らうこととなる。

それは午後の訓練の仕上げの途中だった。突然訓練所を訪れた一人の教導官が三人に至急ベルディナの自室へと来るよう要請をしたのだ。

エルンストを始め、なのはもヴィータも、あまりにも急な呼び出しに眉をひそめたが、命令とあればしかたがないとして、訓練を中

断しベルディナの執務室へと急いだ。

ベルディナは部屋を訪れた三人に、

「よう、早かったな」

と喋って急な呼び出しを詫びた。

どうやら彼はその直前までどこかと連絡を取っていたらしく、彼の手には通信機の受話器が握られていた。

既に話し合いは終了していたのか、ベルディナは、

「では、そのように頼む」

と喋ってそれを下ろし、改めて三人と向き合った。

「いろいろ立て込んでいてな。本来なら事前に通達しておくべきだったが、それも出来なかった」

ベルディナはそう喋って手元の端末を三人に手渡した。

小型のホロディスプレイの発信器である少し長めの棒は、スイッチ一つで空間にモニタを投影できる。これは、時空管理局を始め、ミッドチルダのあらゆる場所で広く使用されているものであるため三人にもなじみ深いものだった。

三人は殆ど同時にそれをオープンし、そこから現れた何らかの書類に目を通した。

「特務機動中隊ですか。聞き慣れない部隊名ですね」

その書類を一通り目を通したなのはそこに記載された部隊名を見て小首をかしげた。聞き慣れない部隊名だ。しかし、どこかで耳にしたこともある。それはとても重要で、なのはにとっては忘れてはいけないような気がする者だった。

「特務機動中隊。先のレリック、ジェイル・スカリエッティ関連の諸事件を受けて時空管理局古代遺物管理部に設立された新設部隊。その前身は同部署に設立されていた実験部隊、通称機動六課にあり、この部隊はその実働部隊として他の武装隊とは独立して設立されたものであると記憶しています」

エルンストはまるでどこかのマニュアルを読むかのように滞りなくその経緯を口にした。

機動六課。と聞いて、ヴィータは少し前にはやてが私的通信で、「新しい部隊を設立したんやあー。よかったら、また遊びに来てなあー」とお気楽極楽を地でいくような声でそういつていた事を思い出していた。

なのはもそれを聞いて、思い出した。はやてに関する自分を忘れていたなんてどうかしてる。なのはは少しだけ恥ずかしくなり面を下げた。

「カーネル一等陸士のいうとおり。司令官は南雲白貴^{なぐも はつき}三等陸佐。君たちには馴染みが薄いと思うが、八神はやて二等陸佐の後輩に当たる人物らしい。そこで、君たちはこの部隊の応援に行つて欲しいということだ」

つまりは、エルンスト、なのは、ヴィータの三名は特務機動中隊（通称、機動中隊）への出向を命じられたということだ。エルンストは書類にある事例書の通りの命令に少し疑問を持った。

「何故今の時期に？」

「人手不足だ。それ以上の理由が必要か？」

「いいえ」

人手不足といわれればエルンストも口を噤むしか他がなかった。

しかし、人手不足といわれればなにも機動中隊だけの話ではないだろう。実際、この陸士教導隊も慢性的な人手不足に悩まされている現場であるから、いちいち他の部隊で人手不足だといわれてすぐさま出向となつては何時の日か教導隊から人がいなくなってしまうのではないか。

エルンストは、つまり、現在の新人の訓練よりも圧倒的に優先されるべき理由がそこに転がっているのだということを察し、それは同時に自分たちは知らなくてもいいような事情であると理解した。

故にエルンストは、

「了解」

とただ一言告げて任務の受諾を宣言した。

「ですが、あまりにも突然すぎます。私たちの仕事もありますし」

しかし、なのはとヴィータにはそれが理解できなかった様子だ。知るべき情報はつぶさに入手する必要があるが、知らなくてもいい、知るべきではない情報は入手する必要はなく、それに頭を悩ませる必要もない。それが徹底されることで軍隊とは権威を保つことが出来るのだと、エルンストはCDの一節を思い返していた。

コンバット・ドリル

「既に決定事項だ」

ベルディナはなのはの物言いにピシヤツとドアを閉じると、間髪入れず、

「以上、通達終わり。何か質問は？」

と三人をにらみつけた。

そこまでいわれてしまえば彼らに発言権はなく、三人は直立して敬礼を返した。

「ありません。任務了解、直ちに行動に移ります」

「よろしい、カーネル一等陸士以外の退室を許可する」

俺だけ何で？ と思いつつ、エルンストは再度敬礼をし、その場で安めの体勢をとった。

なのはとヴィータは、ちらつとエルンストを見るが、エルンストは横目で「さつさと行け」と促すと、二人もまた再度敬礼をし、速やかに部屋から立ち去った。

「さて、君はもう既に知っているだろうが。こちらの都合で、君のデバイスは一部の機能を除いて凍結させてもらっている。何度か凍結解除を試みたようだが。成功したか？」

エルンストは、やはりこいつの差し金かと口の中で小さく舌打ちをし、

「成功はしませんでした。自分の能力不足です」と正直に答えた。

「そうであってくれなければこちらが困るところだった。君の能力不足に感謝しよう」

ベルディナはニヤツと笑うと、机の引き出しを上げ、先程とは違う空間投影モニターを取り出すとそれを開いた。

そこに記載されていたのは、エルンストのデバイス凍結の決定書であり、そこにはエルンストの署名ではなくベルディナの署名が記されていた。

「今からその凍結を溶こう。今後は何の問題もなく自分自身の戦術をとるといい」

彼は何故、エルンストのデバイスが凍結処分を喰らっていたのかを説明することはなかった。

（つまり、それもある必要のないことか）

エルンストは半ば諦めの籠もった態度で肩を下ろした。ベルディナも彼の感情を理解はしていたがそれをどうこう言うことはなく、それだけ彼に告げると、彼に退出を許可した。

「では、これより出向準備を整えます。それと、出来れば射撃場の使用許可をいただきたいのですが」

エルンストはこの一週間あまり、自分自身のデバイスを触れることが出来なかった。

狙撃手であるいじょう、彼は任務や訓練のない日であっても最低一日に三度はライフルにさわってその具合を確かめる習慣をつけているのだが、この一週間はそれが出来なかった。

彼はそれをストレスに感じ、それが次第に不安につながっていくことを自覚していた。あと数日もこの状態が続けば、下手をすればデバイスをかち割ってでもライフルにさわりたいと思うようになってただろう。そんなことは不可能ではあるが。

「そうだな、使用を許可する。ただし、消灯までだ。管理課に連絡しておく」

ベルディナは、それを理解していたのか実にあっさりとそれを許可した。

エルンストは礼を言うと、再々度敬礼をし、直ちに部屋から退出した。

彼の足音が廊下の向こうに消えていくと同時に、ベルディナは「ふっ……」

と一息つき、椅子に深く背をもたれかけた。

「これで第一段階は終了か。第二段階はどうするか。俺の布石が功を奏すれいいんだがな」

第七話 ハートレス・ファイア

廊下を歩くのはとヴィータは少し疲れていた。

「いきなりここに呼ばれたってのに半月も立たないうちに出向かよ。まったくやつてらんねえな」

ヴィータは完全に不満の様子で、天井を仰ぎながら頭の後ろで腕を組んでいる。

「それでも、はやてちゃんが作った部隊に行けるんだから、私は嬉しいな」

なのはは、言葉通り期待に胸を躍らせていた。ここ数年、正確には聖王の揺りかご事件の後、はやてとは直接顔を合わせた覚えがほとんどなかった。

今度出向になる機動中隊は、あくまではやてが設立の手伝いをしただけの者だが、それでも運が良ければはやてとまた一緒に仕事が出来るかも知れないのだ。

そして、機動六課の実働部隊として設立された以上、元の部隊から呼ばれた者も多いだろう。ちょっとした同窓会になればいいなど、なのはは気楽に捉えていた。

「お前は気楽で良いよな、なのは」

ヴィータはそのなのはの気楽さに呆れつつも、それを前向きと捉え笑みを送った。

「そうかな」

なのはも自分自身のある一種の樂觀性を自覚しているが、物事をあまり深く捉えないというのは一つの欠点だとも思っていた。

「それにしても、エルンストが一人だけ残されたのは何でだ？」

「分からないけど、大切な話があったんじゃないかな」

「あたしらには内緒でか」

「エルンスト君は、何というか。いろいろ事情がありそうじゃない。多分、そういうことだと思うよ」

ヴィータは「事情ねえ」とどこか胡散臭そうな匂いのするあの二人を思い浮かべて鼻を鳴らした。

「と、噂をすれば」

なのはは、廊下の曲がり角を曲がっていったエルンストを見つけ、声をかけようとした。

しかし、エルンストは彼女が声をかけるまもなくそのまま外へ出て行ってしまった。

「話は終わったみてえだな。だけど、あっちは射撃場じゃねえか。あいつ、何のようだ？」

ヴィータのいうとおり、彼が歩いていった先にはただっ広い射撃場があるだけで、エルンストのような情報士には無縁の場所のはずだった。

しかも、なのはは彼がデバイスを持っていたことに気がついた。

数年前まではそうではなかったが、最近起こったデバイスに関する事件で、時空管理局でのデバイス管理が大きく変わったのだ。

それまでは、休日であっても自分のデバイスを持ち出しても何の咎もかけられなかったところ、今となっては訓練や作戦時以外のデバイスの所持は禁止されている。それが、時空管理局の施設内であっても同様だった。

しかし、デバイスは情報端末として広く利用されている背景があり、その代わりに支給された携帯端末だったが、なのははどうもこれと相性が悪いらしい。

しかし、今通りかかったエルンストがデバイスを持っていたということが何らかの訓練をするためだと推測できるが、一体何の訓練なのか。

「私たちも行ってみようか。午後の訓練が中途半端だったから、自主訓練としてね」

なのははそんな彼に少し興味を持ち、ヴィータを訓練に誘った。

「まあ、いいけどよ。派手な模擬戦は勘弁だぜ」

ヴィータは心持ち気が乗らない様子だったが、実際訓練がうやむ

やになってしまったのを不満にも思っていた。

デバイスの管理施設は、訓練場と射撃場の中間に位置している。ここからなら数分で取りに行けるので、ヴィータはまあいいか行つてなのは誘いに乗ることにした。

それは、よい結果をもたらさなかった。

だだっ広い射撃場。20km四方にも広がる一面の荒野にも似たそこは、大規模な射撃訓練、たとえばなのはの使用する大規模砲撃魔術などの訓練も行えるよう、時空管理局が数年前に設立したものだつた。

その射撃場の要地を買収するため、周辺の住民や他の官庁施設との大きな軋轢があり、今でも射撃場の返還を訴える周辺住民のデモ活動が休日になると見受けられる場所だつた。

エルンストは、射撃場のコントロールシステムと自信のデバイスをコネクトさせると、その調子を図るため幾つかの標的を立てては下ろしを繰り返していた。

風吹いていない、もしくは微風。無視することも出来るが、有効射程ギリギリなら少しばかり考慮に入れる必要がありそうだ。

その射撃場は、彼らが普段使用する中規模程度の訓練場とシステムを同じにしていたが、こちらの方がより近代化されており、その気になれば疑似空間力場調整によって、重力の低い環境や無重力環境での戦闘訓練も行えるようになっていているらしい。

本来なら同一平面上にベクトルの異なる重力が存在することは許可されていない。そのため、その調整はあくまで疑似重力であり本来のなら真性の重力を操るといふわけではないとのことだったが、エルンストにはその仕組みは理解できなかった。

エルンストは射撃場の様子をざっと見渡した。

先程上げた標的は、それぞれ500m、1000mと3000m

まで500m刻みに立てられている。その間には、トラックや乗用車、装甲車や歩兵、民間人などの移動標的^{ムーバ}がランダム^{ランダム}の速度で行き来する。

地球に住む軍人ならその移動表的は全て木板や鉄板に描かれたものが、レールで移動する程度のもになっただろうが、最新技術を応用したそれらは見た目本物の移動体と区別できないほどのクオリティーを有する。

それに打ち込めば、打ち込まれた箇所に応じて車なら壊れ、人間なら血流をまき散らして地に臥す。いわば、人間を殺す感覚を擬似的に体験できるようになっているのだ。

（だが、これは少しやりすぎだ）

それを初めて経験したエルンストは、実際に敵兵のターゲットに自弾が打ち込まれた時、血流はおろか体内の臓物までもがまき散らされた事を見て常々そう感じていた。

これでは、人間を殺す感覚を養うどころか、むしろ人間を殺すことになれてしまうのではないか。確かに、殺しを躊躇しない軍人は必要とされる。しかし、あからさまにそれらの感覚を麻痺させるものをつくってどうするのかわかるとも思える。

機械的に殺人を行う人間は、自分たちのようなものだけで十分だというのに。

少し物思いにふけてしまった。見ると、ターゲットの間を歩き来する往來の女性がどこことなく退屈そうに歩き回っているように見えた。

彼女が標的か、それとも撃ってはならない障害物なのかは個々では判断できない。彼女は民間人を装ったテロリストである可能性もあるのだ。それは、コントロールシステムによってランダムに決められ、それを確認するにはそれがテロリストのような動きをするか、実際に打ち込んでみる以外には方法はない。

エルンストは、腕輪に手を添え、少しだけ息を吸い込んで吐き出した。

「クリミナル・エア、ストライク・ビューワー、セットアップ」

静かに紡ぎ出されたその言葉に呼応して、光と共に彼の殺人器は息を吹き返した。

一週間もの間眠りについていた【クリミナル・エア】は久しく起き上がった感触にとまどったのか、状況把握のため自主的に【ストライク・ビューワー】と回線を繋ぎ、情報収集を開始した。

《状況把握終了。使用者エルンスト・カーネルを確認。現状にて待機》

【クリミナル・エア】から送られてくる音声にならないメッセージにエルンストはそれをゆっくりと撫でた。

（デバイスは良い。人間と違い、こいつ等は俺を裏切らない）

まるで彼は親友と会話を交わすかのように【クリミナル・エア】に現状報告をさせた。

《現状、遠距離精密狙撃状態。二四時間以上調整されていないため可及的速やかな対処を要求。その他各部に損傷無し》

「よし」

そう呟き、エルンストはゆっくりとそれを構え、銃床を肩に押しつけ、前床に二脚を^{バイポット}表出させると、射撃サポートのために設えられた台の上にそれを下ろした。

グリップを握りしめる右手と肩に押しつけられた銃床をサポートする左腕はその肘の部分を顎にしたに置き、同時に中空の右手を保持するべくそれを下から押し上げた。

そのすべてはまるで、【クリミナル・エア】が自分の身体の一部になる感覚だった。この状態をとった時強く思う、自分は人間ではなく【クリミナル・エア】の発射システムの一部なのだ、と。

（弾頭予測）

【ストライク・ビューワー】の高性能照準器はそれに呼応し、最初のターゲット。およそ500m離れたブルズアイ静標的をセンターに構え、【クリミナル・エア】からもたらされた情報と、その側に立てられた【コールド・アイズ】がリアルタイムで取得する周囲

の環境の情報とをリンクさせ瞬時に情報処理を終えた。

指示から0・1秒も経たないうちにその赤色の奇跡は、エルンストが覗き込むレティクルを上下に貫くように表示され、それは刻々と状況の変化を物語るように左右に揺らぐ。

人間の感覚では読み取れない微弱な風の揺らぎがあるようだ。500m程度であればその範囲は弾頭の予測できないばらつき範囲内に十分納まっているが、これが2000mを超えるとそれも無視できなくなるだろう。

コリオリの力も考慮に入れなければならない距離ではあるが、それはこの惑星の自転が変化しないかぎり大した揺らぎは確認できない。問題は惑星の歳差運動による揺らぎだが、それも大した誤差にはならない。

一番大きなものは、銃身内での弾頭の振動だとエルンストは考える。なにぶん弾頭を高速で打ち出すために銃身内にたまる空気はそれによって大きく圧縮されることとなる。

バネのような特質を有する空気は圧縮後元に戻ろうとして膨張し、その殆どはマズルより外へ放出されるのだが、その幾らかは弾頭を押し戻そうとする。

その僅かな力であっても弾頭は僅かに直進性を失い、速度ベクトルと方向ベクトルの間に僅かな隔たりが生じてしまうのだ。

そのため、弾頭は不規則な回転を与えられることとなり、それが着弾のばらつきへとつながる。そのばらつきばかりは高性能のデバイスであっても予測できない状況であり、撃った弾が必ず同じ所に着弾するというニュートンの運動の法則に反する結果をもたらすのだ。

だが、とエルンストは思う。

（それを包括できなくて何が狙撃手か^{スナイパー}）

狙撃手が撃って当てられるのは当たり前、それ以上の戦術的優位性がなければ一流の狙撃手を名乗る資格はない。

レティクルの中央、そして弾頭予測の光線の先が標的のセンター

と重なり合い、さつきまでその後ろをうろつろしていた民間人の男性がその裏側から姿を見せた所を見計らい、エルンストはトリガーを押し込んだ。

空気を切り裂く甲高い音よりも先行し、ターゲットのほぼ中央下より1・3mmの部分に僅か7mm程度の円点が穿たれた。

（予測修正、次弾装填）

その結果を受けて、【ストライク・ビューワー】はすぐさまレイトイクルを下部に0・2mm移動させ、弾頭予測アルゴリズムを修正した。【クリミナル・エア】は空になった薬室に予備の弾頭を手早く装填し、エルンストが構え直すよりも遙かに高速に全ての処理を終わらせ彼の行動終了を待った。

（この狙撃システムで最も性能的欠点を持つものは使用者である俺自身だ）

エルンストは前二者に比べ圧倒的に性能の劣る自らを呪った。自らの性能がその二者に劣らないほどのものだったら、ニコルを助けられたかも知れない。

考えることすら無駄である事をエルンストは考え、

《使用者の射撃への集中を求む》

という【ストライク・ビューワー】の警告に頬をゆるめた。

（分かってるよ）

そして間髪入れずに第二射をリリースした。

初弾命中から僅か1・1秒。初弾より0・6mmほど中央よりとなった円点を見て、エルンストはさらなる射撃を続けた。

一つのターゲットに対して平均6発。近距離から徐々に遠距離に行くにつれ学習を蓄積するデバイス達でも、3000mもの距離となるとそのばらつきは最大でも80mmにもなってしまう。

それでもそれがマントーゲットであれば何とか打ち落とすことは出来るだろう。しかし、それ以上ともなると、精密狙撃を心がけるのであれば避けるべき距離であった。

エルンストは連続発射による熱で陽炎を上げる銃身を下ろし、【

コールド・アイズ』を用いてそれを確認した。

先程から【クリミナル・エア】から、

《銃身加熱警告》

が出されている。

エルンストは、フレームをオープンさせその銃身を外にさらけ出すことでそれを冷却した。通常のデバイスが行う排気による冷却はこれにはしない方が良い。急激な冷却は予期せぬ銃身のゆがみに繋がり、一度でもそれをしてしまえばこれはとても使えるものではなくなってしまうからだ。

冷干鍛造によって製作された構造材なら多少のハードワークにも耐えられるが、エルンストの使う超精密銃身は非常にデリケートであるためむやみなハードワークを行うわけにはいかない。

銃身から立ち上る膨大な陽炎を見下ろして、エルンストはしばらくの休憩を決めた。銃身が冷却されれば次はクリーニングが待ち受けている。

バレルにライフリングが刻まれている時代とは違い、それにはそれほど精密作業は必要としないが気をつけて執り行わなければならないのは同じ事だ。

それによつてCCB（Clean and Cool Barrel：綺麗で十分冷えた銃身）は完成し、それを持つて彼は再び射撃の世界へと陥っていく。

それは陽光が沈むまで行われた。

その光景を少しの間眺めていたなのはとヴィータは驚愕するより他がなかった。

それは彼の射撃技能のみにあらず、デバイスの運用方法だった。「あいつ、やっぱり隠してやがった。何が戦闘用のデバイスを持っているだ。大嘘つきめ」

ヴィータは何より、彼が戦闘用のデバイスを隠し持っていたことに腹を立てていた。しかし、よく思い返せば彼は「コールド・アイズ」を見せ、これは戦闘用のデバイスではないと話しただけで他にデバイスを持っていないとかそれらは戦闘用のデバイスではないとは一言も言っていないことに気がついて、更に歯ぎしりをした。

「クリミナル・エアとストライク・ビューワーだったよね。それとコールド・アイズ。すごいね、全部で三つのデバイスを自在に操るなんて」

なのはその事実に驚きを隠せなかった。魔導師は一つのデバイスを使用するという何らかの固定概念が彼女にはあった。しかし、彼はそれをものの見事にあっさりと打ち砕いてくれたのだ。

ある意味痛快だなとなのは思い、自分にもそういう方向は考えられるかと思ひ至りそれ以上考えるのを止めることとした。

エルンストが行ったデバイスの同時並列使用は、デバイスの処理能力を主眼に置かれたキハイル式デバイスシステムであるからこそ可能であり、なのはやヴィータが使用している既存のデバイスシステムではとうてい使用者の処理が追いつかないことだった。

それになのは、自分自身の頼れるパートナー「レイジング・ハートEX」があればそれで十分だと考えていた。

しかし、せっかく保管庫から自分自身のデバイスを持ち出してきた二人だったが、これではすっかり出るタイミングを失ってしまった。

エルンストはあの調子では当分の間射撃場から立ち去りそうではないし、休憩の合間を見計らって声をかけても察しの良い彼のことだ、そのタイミングを影で見計らっていたことにすぐに気がつくだろう。

せっかく集中して訓練をしている彼を邪魔するのは忍びない。そう考えたのはヴィータの肩を叩き、静かにそこから立ち去ることとした。

第八話 彼の真意

結局2週間ほどしか滞在しなかった自室の荷物をまとめることはそれほど労力を要することではなかった。

荷物を引き払った前と後でそれほど様子を変化させなかった部屋を眺め、なのははここでの日の浅さを実感するばかりだった。

ヴィータはぬいぐるみや洋服などたった二週間でいろいろと持ち込んでいた様子で、それを手伝ったなのはも少しは自分の部屋を作るべきだったかなと思うほどだった。

エルンストは殆ど着の身着のままといった様子で、首と腕につけられたデバイス以外は服のポケットに入る程度の荷物しか持っていない様子だった。

着替えとかはどうするのだろうかと思うなのはに、エルンストは現地調達だと答え、それまで持っていた数少ない着替えはこの際に全て処分してしまったようだった。

もったいないことするなあ、それじゃあ逆に不便じゃないかな。と思ったところでは大きなあくびをついてしまった。

慌てて口を手で押さえるが、隣に座るヴィータは既に居眠りをしている様子でそれを見ていなかった。

「寝不足ですか？ 高町一尉」

車の助手席に座るエルンストはそんな彼女の様子をルームミラーで見ながらそう聞いた。

「あは、ちよつとね。昨日はちよつと夜更かしをしちゃって」

照れくさそうに苦笑いを浮かべるなのはに、エルンストは無感情にただ「そうですか」というだけだった。

昨日の夜は、突然の移転が決まったなのは達を送るため、それまで持っていた訓練生がお別れ会などを催してくれたのだった。

それは、単に施設の食堂を借り切った簡素なパーティーだったが、その料理長も少ない食材から見栄えの良い料理を数多く振る舞っ

てくれたこともあり大盛り上がりだった。

その日ばかりはベルディナも、

「羽目を外さない程度なら騒いでもかまわん」

とお墨付きを出し、その代わりに自分も混ぜるとそのパーティーに乗り込んでいた。

そういつていたベルディナだが、その中で一番羽目を外して騒いでいたのは彼だったような気がする。

そして、ベルディナが持ち出したワインを勧められる内に、なの

はもガラにもなく羽目を外してしまったということだ。
ヴィータはワインを少し口に含んだとたんに目を回して寝込んでしまった様子だったが、それを部屋へ運んだのは訓練生のカリスとクラントだった。

確かにあの二人は、センターアタッカーとしてヴィータに多くの教えを受けていた。ヴィータはとても厳しく二人を指導したが、その指導には深い思いやりを感じる事が出来たのだらう。なのとはヴィータが外向となった知らせを聞いて一番悲しんでいたのは、クラント、カリス、ノア、そしてエルトだったことは想像に難くない。本当に思いやりのある暖かい送別会だった。

おそらく、彼らはなのは達が外向から戻るまでに訓練を終えて実働部隊に所属することになるだらう。彼らと会うのはかなり先になるかも知れない。せめて、彼らの行く末の無事を祈り、なののは酔いのまま眠りこけた。

その中にあつてもエルンストは暖かな輪から一步外れ、ただ一人で黙々と食事と飲み物を口にしていただけだった。

時折現れる彼の指導を受けた訓練生、主にノアとエルトだったが、そんな彼らにもいつもの調子で愛想なく接するエルンスト見て、なのははどうしてそこまで孤立を選ぶのか不思議に思った。

そして、彼は消灯を過ぎても納まることのない喧噪を離れ、一人宿舎へと戻っていった。

何となく寂しい。もう少し心を開いてくれても良いと思う。

「ねえ、エルンスト君」

気がついた時にはなのははエルンストに声をかけていた。

「何でしょう」

いつもの調子だった。彼はルームミラーでなのはを一瞥するばかりで彼女と目を合わせようとしない。

「君は、私たちを信頼してくれないのかな」

そんなことを聞くつもりではなかった。だが、なのはの口は止まることを知らなかった。

エルンストは少しだけ逡巡し、そして口を開いた。

「信用はしています。しかし、信頼しているかと聞かれれば、そうでもないとした自分には答えを用意することは出来ません」

エルンストの言葉に躊躇はなかった。それでも多少の婉曲を織り交ぜたのは彼の思いやりだったのだろうか。

「信用はしているか……、それはあくまで私たちの技術、戦力を信用しているということだよ。本当の意味で信頼はされていないということかな」

信用と信頼の線引きは曖昧に思える。しかし、エルンストの答えからはなのは達はまだまだ頼れる存在ではないということが見え隠れしていた。

「そうなります、高町一尉」

信じられていないということは悲しいことだったが、少なくとも信用はされていると分かり、なのは少しだけ気が楽になった。

「分かった。ごめんね、こんな話をして」

「こちらこそ申し訳ありませんでした」

彼の淡泊な口調には申し訳なさを感じることは出来なかったが、それはまだ自分が彼の本来を知らないからなのかも知れないとなのはは思い直すこととした。

「いいよ。信頼されていないのは私たちの問題だし、いつか君の信頼を勝ち取ってみせるって思えるから。正直に話してくれてありがとう、エルンスト君」

信頼されていないのなら信頼を勝ち取ればいい、そして、エルンストに対しては口で何を語ろうとも意味はないということもそれまでの交流で分かっていた。ならば、行動で示せばいい。自分たちが信じて頼りに出来ると彼が思えるようになるまで精一杯行動で示せばそれで良い。

なのはは隣で平和そうに眠りこけるヴィータの頭を撫でながら柔らかな笑みを浮かべた。

それまで沈黙を保っていた運転手がそろそろ目的地へ到着するという知らせになのはは窓の内側からそれを見た。

特務機動中隊本部ビル。それは、かつての実験部隊機動六課と建物を同じにしたただセクション名と所属を僅かに変更しただけのものだった。

なのははわき上がってくる感情を抑えられず、不覚にも少し涙が流れそうになった。

（あそこで私はいろいろなものをなくし、そして大切な物を得ることができた。エルンスト君もそういうものが見つかるの良いな）

失い事の痛み、得ることの喜び。おそらく彼は痛みばかりを得てここにいるのだろう。彼が何か大切な物を得ることが出来ればその時は本当の意味でお互いに理解し合えるのかも知れない。

なのははこれから積み上げられていく日々を思い、その胸に希望を抱いた。

（大丈夫、何とかなる。今までもそうだったから、きっとこれからもそうなっていくよ）

彼らの乗る乗用車はそのまま速度を落とし、機動中隊ビルの裏手に設えられた職員用の駐車場へと入っていった。

第九話 再会

なのは達の到着を知った機動中隊の司令官、南雲白貴は彼らを司令室へ通すように命令した。

その隣で微笑む八神はやてを見て、南雲は、
「そんなに楽しみなのですか？」

と聞いた。

はやてはニコニコして、もちろんと答えた。

「当たり前やんか。なのはちゃんとヴィータと会うのは久しぶりなんやから、楽しみにきまっとるよ」

京都言葉みやこを思わせる柔らかな口調からは心からの喜びと、いてもたってもいられない嬉しさがわき上がってくるようで、南雲の頬も自然とゆるんでいった。

「僕はむしろ緊張していますよ。幾ら階級が下とはいえ、時空管理局のエース・オブ・エースで名高い高町一等空尉とお会いできるのですから」

南雲はそういつつ先程から落ち着かない様子で、何度もネクタイを直している。直せば直す度にネクタイが曲がつていく様子はやてにとっては見ていて退屈しないことだったが、一応彼に忠告しておくことにした。

「やっぱり、白貴君でも緊張することあるんやね。うちと初めてあった時はあんなに毅然としたのが嘘みたいや」

はやての言葉に南雲は苦笑を浮かべると、その時の自分の内情を正直に告白することとした。

「とんでもない、十分緊張していましたよ。ただ、それを表に出さないように努力しただけです。大変でした」

「そうやったんかー。大変やったんやなあ」

「ええ、今回もそれが出来るか。とにかく舌がもつれないよう注意しなければなりませんね」

「ほな、お気張りやす」

はやては扉を叩く音に返事をし、

「空いとるさかいに、入ってんか」

と行つて来客を歓迎した。

「失礼します、南雲三等陸佐並びに八神二等陸佐。高町なのは一等空尉以下三名、出向の事例を拝命し到着いたしました」

抑揚のある心地の良い声が司令室に響いた。その声に南雲は一気に緊張を高め、はやては久しい友の到着を心より喜んだ。

「ようこそ、高町なのは一等空尉、八神ヴィータ二等陸尉、そしてエルンスト・カーネル一等陸士。我々特務機動中隊はあなた方を歓迎いたします」

南雲の様子からは緊張を感じられなかった。しかし、実は彼はその内で渦巻く緊張と熾烈な戦いを繰り広げていることを知るはやては笑いを飲み込み、相変わらずニコニコしてそこに座っていた。

最初は直立不動を保っていたなのは、それでもはやてのその笑顔につられて次第にその頬には笑みが浮かび上がっていく。

「久しぶりやなあ、なのはちゃん。元気やったか？ また痩せたんとちゃう？」

はやてはおざなり程度に略式敬礼を交わすと、すぐになのはの手を握り最近の近状を報告し合った。

「はやて、あたしもいるぞ。無視すんな」

はやてがあまりにもなのはばかりに話しかけるので、ヴィータは業を煮やしてはやてにからみついた。

「ごめんな、ヴィータ。そやけど、ヴィータはこないだも会ったやん？ そやからなのはちゃんとな、ゆるしてな」

はやてはヴィータの頭を撫でながらそういつて微笑んだ。ヴィータははやての笑顔に弱かった。そしてその手で頭を撫でられると、どうしようもなく口がふさがってしまうのだ。

（女三人集まれば云々というのはこういう事かな）

南雲はそう思い苦笑いを浮かべると、同じく話しについて行けな

い仲間である所のエルンストを見つけ、視線のあった彼に対して肩をすくめた。

「君も、なかなか面倒な所に立たされたね。高町一尉とヴィータ二尉が相手では気が休まらないだろう？」

かくいう彼も、英雄に近い誉れを持つ八神はやての後輩として彼女と共にあることが多いため、そういった気苦労は茶飯事のことだった。南雲は何となく自分と同じ境遇の仲間を見つけた気がして、極気軽にそう話しかけた。

「自分はそうは思いません。自分にとって気を休めるということは即ち死を意味する事柄ですので、気が休まる休まらないは問題視しておりません」

南雲はその答えに驚きを隠せなかった。彼の予想ではエルンストはおそらく苦笑いか最低でも肩をすくめる程度には自分に同意してくれるものだと考えていた。

それが、どうだ。彼の答えは南雲の言葉を全く持つて否定するものではないか。

「ま、まあ君のいうことはもっともだ。今後もその気概を持つて任務に当たってくれると嬉しい」

故に彼が用意する答えは上官としてそれを推奨することしかなかった。

「了解です、南雲三等陸佐」

エルンストは直立不動を崩さずそのまま敬礼を彼に送った。

（変わった……というよりは、とらえどころのないといった方が良いか。底が知れない奴だな）

エルンストのプロフィールを熟読していた南雲は、実際エルンストを見るまでこの人物は多少人格に問題はありつつもごく平凡な陸士なのだろうと推察していた。

しかし、エルンストの気概、その愕然とも言える潔さにはその評価を改めなければならぬと直感した。

そして、何となくだが彼は思った。今回の人事異動は、高町なの

はと八神ヴィータばかりに目をとられがちだったが、本来の所彼という人物を巧妙にカムフラージュするための単なる布石なのではないかと。

（もしもそれが真実なら、そのことを八神二佐は知っているのだろうか）

南雲はいまだ雑談混じりの近状報告を続けるはやて、なのは、ヴィータをに目を向けそれを思った。

そんな折、部隊長室のドアが叩かれる音が部屋に響いた。

「入り給え」

今度は南雲がそれに答え、それに呼応して扉に設えられたモーターの駆動音が響き、その先からは一人の長身の女性が顔を見せた。

「ああ、シグナム。ええ所に来たな。こちら、高町一等空尉とヴィータ二等陸尉、それとエルンスト一等陸士や」

はやてはその来室者に笑顔を見せると、新たな隊員を一人ずつ紹介していった。

シグナムと呼ばれた長身の女性は、そのまま背筋を伸ばし油断のない視線で三人を見回すと、とても綺麗な姿勢で敬礼を送った。

「お久しぶりです、高町一等空尉、そしてヴィータ二等陸尉。君とは初めてになるかエルンスト一等陸士。あなたたちと任務を共に出来て嬉しく思います」

なのはとヴィータはそんなシグナムの相変わらずの堅苦しい口調に懐かしさを感じ、敬礼と共に握手を交わした。

「シグナムは今、武装A分隊アルファ・チームの隊長をもらってるんよ。せや、シグナム。早速やけどなのはちゃん達を案内してくれるか。後のことは頼むさかい、あんじょうしたって」

シグナムは自らの主の言葉に敬礼ではなく面を下げ答えた。

「了承いたしました、主はやて。では、高町と他。私に着いてくるいい」

エルンストは、彼女がはやてを”主”と呼ぶことに若干の疑問を抱きつつ、なのはとヴィータと共にその紅髪の騎士の後についてい

くこととした。

「本部施設の構造自体は、かつての機動六課と変わらない。しかし、その中でもかなり近代施設にアップデートされてはいるが」

シグナムは歩きながらその施設の各所を彼らに紹介しつつ、以前と変わらないところ、オミットされたところ、新たに作り替えられた所を順番に巡っていった。

ここが機動六課だった頃、確かにその多くの施設は最新鋭の設備システムが提供されていたが、その細部では一世代前の旧式システムや、他部隊のお下がりシステムなども多く見受けられた。特に医療施設がその最たる霊であり、その施設管理長であったシャマルもその事にいろいろ不満を言っていたほどだ。

しかし、実働部隊として正式予算が下された現在のこの施設は、そこにあるもののあらゆるものが最新鋭、もしくは準最新鋭のシステムに埋め尽くされ、そのどれを見ても訓練所で使用されていた二世代も三世代も古いシステム系統とは一線を画す。

エルンストはその機能美たるや正に感嘆の念を抱く以外に他がなく、その職員の多くが自分と同じ新型プラットフォームを搭載したキハイル式デバイスシステムを所持していることに好感を持ったほどだった。

エルンストの持つ【ストライク・ビューワー】に搭載されているコアシステム、ベースライン4と呼ばれるキハイル式デバイスシステムは、従来型のデバイス、なのはやヴィータが所持しているデバイスシステムと違い、その中心には複数のコアが並列接続されたものだ。

かつて、時空管理局の技術者で現在はアーマード・ウェポン・デバイス社のデバイス開発主任に抜擢された天才技士、キハイル・メーイスが開発したそのシステムは、従来のデバイスシステムと異なりその中央演算処理機能が大幅に向上しているため、既存のデバイスシステムに比べ、使用者（術者）に対する負担が大幅に軽減されている。

それまでも、近代ベルカ式カートリッジシステムなどデバイスに関する新機軸が開発されてきていたが、それはどれも既存のデバイスシステムに対する付属機能の一環である側面が強かった。

しかし、キハイルはそのデバイスシステムのコアに注目し、それまで彼が問題にしていた魔導師の個人差や才覚に左右される戦闘力を何とか解決したい一心で、より汎用的なシステムの開発に着手した。

それまで問題となっていたものは、魔術師の魔術行使の大部分は術者のリンカーコアの性能に依存していたことだった。つまり、術者のリンカーコアがより複雑かつ高速に大規模な魔術を運用出来るのならそれで問題はないのだが、それよりも劣る性能しか持ち合わせないリンカーコアではより高性能なリンカーコアを持つ魔術師に対しては何があっても勝利することは難しいという事であった。

故に、時空管理局は有能な人材をつねに欠いている状態であり、それは大きな問題でもあった。

キハイルはそれを解決させるため、従来ならリンカーコアに依存していた魔力制御運用のシステムの大部分をデバイスコアに依託する方法を思いついた。

そうすれば従来の魔術師に対する魔術行使にかかる負担も大幅に軽減でき、かつ高性能なリンカーコアを持たない魔導師であってもその魔力量さえ何とか出来れば十分に上位の魔術師に対抗できるというものだった。

その研究は長年の成果と、過酷な実証トライアルを勝ち抜き、近年になってようやく時空管理局の制式採用を勝ち取る結果となった。『兵器、武器とは。あらゆる人間が使用しても全く同じ機能を持たなくてはならず、そうではない武器システムは信頼性や汎用性その他に大きな問題を残すこととなる。故に私は、自身の開発したこのキハイル式デバイスシステムがその問題を解決する唯一の方法であると確信する。』

それは、キハイルが時空管理局の新兵器トライアルの冒頭で述べ

た演説だった。しかし、キハイルは自身のデバイスシステムにもまだ重要な課題が残されていることを知っていた。

それは、先にも触れたように使用者本人の魔力、デバイスとしての動力とも言える要素だった。しかし、彼は近々それも解決するだろうと予言している。

エルンストを始め、それを知る人間の多くは彼は現在、魔力供給を外部化するバッテリーのようなものを開発しているのだと予測した。

しかし、それは管理局の採用トライアルにまだ姿を見せていないことから、まだ開発途中の実験段階なのだろうと考えられる。

ともかく、この数年でデバイスに纏わる多くのことが大規模な変化を見せているのは確かだった。

なのははその話を最初に聞いた時、技術の躍進の凄まじさとキハイルに対するある一種の敬意を胸に抱いた。そして、同時に既にある過去になりつつあるあのときのこと、自身が撃墜され一時期生死の境をさまよったあの事件を思い出していた。

キハイルの言葉はもつともだとなのはも思う、彼女もまた魔術の無理な行使によって様々な障害を見に受けてきたものの一人だった。特に、先の聖王の揺りかご事件において彼女が使用した無理矢理な魔力運用はその後の彼女の身体に消えない傷を植え付けたのだ。

自分のような者達が今後現れないためにも、新しい世代の子達にはこのキハイル式デバイスシステムを早急に配備するべきだと思い、彼女自身教導隊内で率先して新システムの導入に奔走した。

しかし、彼女は自らのデバイス、【レイジング・ハート】に目を向けた。

なのはは確かに率先して新型システムの導入に力を注いだ。しかし、彼女の持つデバイスがその新型に取って代わることははたしてなかった。

『Master……』

そんな彼女を心配するように【レイジング・ハート】は淡く光を

ともした。

「うん、良いのレイジング・ハート。私はあなたと一緒にいたいから」

首につり下げられた紐の先端で輝く赤色の宝石を手に取り、なのははゆっくりと笑みを浮かべた。

現在においては旧式となってしまった【レイジング・ハート】は確かに、キハイル式に比べると魔術運用に負担がかかる。特に彼女のような大規模な魔術を集中運用する魔術師ではその負担も顕著に表れるものだ。

しかし、それでも、なのはは長年連れ添ってきたパートナーであるそのデバイスと別れを告げることなど出来なかった。

新型システムは従来のオプション改修とはわけが違う。デバイスのコアシステムそのものを交換する事につながるのだから、なのはの考えも理解できる。

技術部の話によれば、従来のシステムのOS即ち、人格プログラムの情報を新型システムに移し替えることは十分可能だと言うらしいが、それを行った同僚の話では、やはりそれまでのOSとはなにかどこか違うというのだ。

「高町一尉」

なのはは、後ろを歩くエルンストの声に気がつき意識を現実へと戻した。

「え、えつと、なに？」

なのはは完全に狼狽していきなり顔を後ろに向けるものだから、角を曲がってきた男とまともにぶつかってしまった。

「にゃ！ ご、ごめんなさい」

なのはの口から着いて出た幼い頃の口癖にエルンストは小首をかしげた。

「いえ、自分こそ失礼いたしました」

なのはより随分背が高い、エルンストより幾分か長身で細めのその男性はなのはが士官である事に気がつき、直立り頭を下げた。

「ああ、レイリア・フォート二等空士か。ちょうど良いな紹介しておこう」

その男、シグナムからレイリアと呼ばれた男は下げていた頭をあげ、その代わりに敬礼をなのはにむけた、

「レイリア・フォート二等空士です。本隊では武装B分隊ブラボー・チームの隊員を務めております」

「レイリア二等空士。こちらは高町なのは一等空尉と八神ヴィータ二等陸尉、そしてエルンスト・カーネル一等陸士だ。三人共戦技教導隊からの出向であるから何かと学ぶべき事も多いだろう」

シグナムの紹介にレイリアと三人は敬礼と握手を交わした。

レイリアはエルンストと握手を交わす際、何か探りを入れるように彼の目を覗き込んでいたがエルンストにはその理由が思い当たらなかった。

「そつえば、忘れるところでした」

その紹介が終わったところで、レイリアは少し慌ててシグナムに言葉を向けた。

「朱鷺守隊長ときのかみがシグナム隊長をお呼びでしたよ。何でも、訓練について話をしておきたいとか。あと、ついでにシグナム隊長の休日の予定も知っておきたいとおっしゃっておられました」

シグナムは朱鷺守の名前が出たところで、あからさまに困惑した表情を浮かべた。

「朱鷺守一等空尉か。訓練について話があるというのであれば足を向けないわけにはいかないが。どうも私はあの者は苦手だ」

シグナムは上官でありながら同じ隊長の任務にある彼を一定に評価していたが、その人となりにはどうも困惑するしか他がないというこころらしい。

朱鷺守棋理ときのかみ一等空尉。第二武装分隊の隊長を務める彼の名はエルンストは聞いたことはなかったが、歴戦の騎士の様相を見せるシグナムがそこまで苦手とする手合いであればおそらく一筋縄では行かないのだろつと予測し、警戒するべき人物リストに彼の名前を記載フラック

することとした。ちなみに、そのリストの筆頭にはベルディナ・アーク・ブルーネスのなが記されていることは言うまでもないことである。

何となく行きづらそうにしているシグナムだったが、レイリアの「お急ぎください、シグナム隊長」という言葉に後押しされ、「分かった、では、後はレイリア二士に任せることとする。訓練場や隊員の待機所、デバイスの保管庫などを案内しておけ。終わったら司令室に出頭のこと」

「了解、直ちに行動を開始します」
シグナムよりなのは達の案内を頼まれたレイリアはそう敬礼をして、隊長であるシグナムを見送った。

レイリアは上官が角を曲がったことを確認し、少しだけリラックスするとすぐになのはたちに目をやり、さっきまで張り詰めていた表情を緩めた。

「シグナム隊長を前にするとやはり緊張しますね。改めてよろしくお願いします高町一尉、ヴィータ二尉、そしてカーネル一士。ようこそ特務機動中隊へ」

レイリアは敬礼の代わりに彼ら一人ずつと握手を交わした。

三人はそれぞれ、エルンストも無愛想に「よろしく」と答え彼の握手に答えた。

「さて、案内を申し付かったわけですが、どこまでご覧になれましたか？ 訓練場やデバイス保管庫にはもういかれましたか？」

「それはもう一番に」

なのはは、シグナムの案内で一番最初に立ち寄った訓練所の様子を思い出していた。訓練所は見た目こそなのは達が使っていたところと変わっていないかったが、そのシステムはかなりバージョンアップされた様子で、簡単に聞かされた概要からかなり利便性が高くなっている様子だった。少なくとも陸士訓練所で使用していたものは雲泥の差だろう。

しかも印象的だったのは、興味深そうにそれを眺めるなの是对

してシグナムが、

「なんなら軽く模擬線でもしていくか」

「といって自身のデバイス【レヴァンティン】を取り出したことだった。」

なのはは魅力的な提案だと思いつつ、「シグナムも相変わらずだな」と肩をすくめるヴィータと、「やるなら早く終わらせてくれ」と言いたげに目を細めるエルンストの手前、丁重に断っていた。

シグナムは実に残念そうな顔で、しぶしぶと【レヴァンティン】を片付けていたが、あの様子なら近いうちにまたお誘いがありそうだとなのはは予感した。

ともあれ、施設のほとんどを見終わったといわれたレイリアは少し困った様子を見せた。急なことだったが、案内を仰せつかったからにはきつちりとそれを全うしたい、そう思っているのだろう。

しばらく、レイリアは考え込み、それならばと提案をした。

「だったら、寮にできたカフェにでも行きましょう。たしか、あそこは。中隊が設立されたときに作られたと聞いていますから」

確かに、なのはとヴィータはそんなところにカフェがあるなど知らなかった。そして、興味もあった。

「いいな。少し休憩がてら一杯やりたかったところだ」

ヴィータは大賛成のようだったが、エルンストは正直そんなことはどうでもよかつたらしく、特に何の意見も反論もしない。

「だったら決まりですね。早速行きましょう」

レイリアはそういつて彼女達を案内しようとした。

「フォート一士。休憩もいいが、お前は自分の仕事をしなくてもいいのか？」

エルンストの物言いはもったもなことだった。先ほどは彼の上司、朱鷺守から伝言を仰せつかったというだけで、それまで何かしらの業務をしていたはずだった。

シグナムから頼まれた手前といっても、それでいいものか。

しかし、エルンストの危惧に対してレイリアは平然な顔をして、

「大丈夫だよ、エルンスト一士。今の僕の仕事はなにせ、君達を案内することだからね。直属ではないといっても上官の命令には逆らえないさ」

にっこりと笑ってウィンクをした。

「お前は、なかなかいい性格をしているようだ」

レイリアのその様子にニコルの様子を思い出し、エルンストはわずかながら破顔して、少しだけほほを緩めた。

「そうだろう、君も見習うといい」

「遠慮しておく」

なのはとヴィータはそんな二人のやり取りをみて、少し、いや、かなり驚いていた。

「エルンスト君って、あんなふうに笑えるんだ」

「ああ、そうみたいだな」

いつの間にか肩を並べて二人の前に行くエルンストとレイリアをみて、二人はそう囁き合った。

将来的にはいい相棒になれるかもしれない。二人のその様子からなのはとヴィータはそんなことを思っていた。

第十話 執務艦長

時空の海はまるでなにも景色のない、重力さえも存在しない空のようだ。更に言えば宇宙空間のような光や粒子の嵐さえも存在しない。正に空虚と言ってもいい、そんな世界だった。

平行世界、異世界の間に広がる宇宙よりも広大な時空間の海はただ、静寂を保つばかりでなんの面白みもない。実際、数週間の航海といっても戦闘など起こる方が珍しいという状況では、航海士にとって最大の敵となるものは日常の平穩に付随する倦怠感だった。

故に、時空航行艦の乗組員の内、それなりの地位を持つ、正確には艦内に自室を持つ乗組員にはある程度の私物の持ち込みが許可されている。

時空管理局本局勤めの執務艦長、フェイト・Ｔ・ハラウンも当初は艦に私物を持ち込むことはモラルに反するのではないかと思っていたが、実際ここで勤務を続ける内にこれがなければ長期間の航海任務などとうてい行えないなと思いつくようになった。

地上の航海士なら、それよりは状況的にましだったかも知れない。確かにないもない海の平原は時空間の海と大差ないような二思えるが、その実海にはたくさんの神秘が隠され、船乗りにはその神秘に触れる機会が用意されているのだから。洋上停泊であれば、許可さえ下りれば海水浴や日光浴を楽しめばいいし、場合によれば釣りをたしなむことも出来る。

水平線より上る太陽の光がその逆側の水平線へと沈む様子は、正に見る者を飽きさせないドラマとしてそこにあるだろう。

退屈こそ人間の最大にして最強の敵である。どこかでそんなことがかかれた本も読んだことがある。

それは、地上の船乗りが書き記した言葉だったとフェイトは記憶しているが、むしろ自分たちにこそそれは当てはまるだろう。

フェイトはここに来て何度も何度も読み返した兄、クロノ・ハラ

オウンの手紙から顔を上げると、机の上の端末から自分呼び出す音が響いている事に気がつき、それを仕舞い、それと向き合って回線を開いた。

「艦長、そろそろ艦橋にお戻りください。そろそろ到着になります」
フェイトの補佐をする彼女の後輩、シャーリー執務官が艦橋の様子を背景にしモニターに映し出された。

フェイトはそのモニターの隅にある時刻表示に目を向け、そろそろ時間かと思う。

「分かったわ。すぐに行きます。ありがとう」
フェイトはそれだけ告げると、モニターの電源を落とし、背中を覆い尽くす長い金髪を流しながら立ち上がった。

そして、彼女はベッドの上に置いておいた執務官の制服のジャケットをそつと羽織り、その枕元にあるフォトスタンドを手にして柔らかない笑みを浮かべた。

そこに映し出されているのは暖かな笑みを浮かべる自分の姿と、その隣で弾けんばかりの優しい笑顔を振りまく愛しい彼女、そして彼女たちの腕に抱かれた愛らしい娘の姿だった。

「行ってきます、なのは、ヴィヴィオ」

念話でも届かない距離にいる大切な二人を思いながら、フェイトは写真に写る二人にそれぞれキスを送るとそれを元に戻し、部屋を後にした。

部屋を後にし、艦橋に戻るまでの間、フェイトは先程読み返していた手紙の内容を思い返していた。

『久しぶりに手紙を送ることになるが、元気か？ 僕の方は相変わらずだ。君はそろそろ執務艦長の仕事に慣れた頃合いだと思うが、そういう時こそ一番体調に気をつけなければならないと母さんがいつていた。君はそういうところはしっかりとしているから、僕は心配していないけどね。それにしても、通常時の航海任務なんて退屈なものだろう。君はまじめだからいろいろ考えるところはあると思うけど、暇つぶしの道具はしっかりと揃えた方が良く。この際何か

趣味を初めて見てはどうだろうか。僕も執務艦長の時代にいろいろと趣味が増えたものだ。まあ、長続きはしなかったけどね。なんだか書きたいことがいっぱいありすぎて上手くまとまらないな。とにかく、たまの休日ぐらい、なのはやヴィヴィオとばかり一緒にないで、たまには家に帰ってこい。フェイトの顔が見れないっていう母さんの愚痴を聞かされるこっちのみにもなつて欲しいな。それに、僕の子供達も君の会いたがっている様子だ。少しだけ考えて貰える嬉しい。とりあえず今回はこんなところで。もしも返事を書くなら母さんに書いてやってくれ。それじゃ、僕の大切な妹フェイトへ。クロノ・ハラウンより。追伸、なのはとヴィータがどうやら例の機動中隊に就任したらしい。またやっかいことが起こるような予感がするから、君の方も気をつけた方が良さ』

フェイトはその文面から兄の不器用ながらも彼女を心配する様子がありありと浮かんできて、うつすらと笑みを浮かべた。

クロノは時空管理局本局の出世頭として順調にキャリアを積んでいる様子だった。執務提督官として多くの事件を影ながら解決に導き、仲間達を温かく支援する彼は今となつては民放番組にもよく顔を出すようになった。

そんな多忙を極める兄が、その合間を縫ってわざわざ紙に書かれた(多分、これは彼女の母親であるリンディ・ハラウンの差し金だ)とフェイトは推測した。手紙を書いてくれたのだから、今度の休日は久しぶりに親元に帰省してもいいと考えるようになった。

よく思い出すと、なのはもヴィヴィオもここしばらくの間、リンディやクロ、と義姉のエイミィとその子供達と会っていなかった。(なのはとヴィヴィオも誘って、帰るのもいいな。予定が合えばだけ)

フェイトは次の休日が何時になるか、頭の中で目算しながら艦橋にたどり着いた。

「あ、艦長。ようこそ」

艦橋では艦長席の側に立つシャーリーがフェイトを迎え入れた。

「後どれぐらいで着く？」

フェイトはその席に座り、彼女にお茶を差し出した下士官の男に一言例を言ってそれに口をつける。

「もうまもなくです、既に肉眼で確認できるほどの距離ですので」
フェイトは正面にでかかとそびえるモニターに目を移し、そのセンターに映し出された奇妙な形をした構造体が徐々に大きくなつていくことを確認した。

時空航行艦、時空管理局本局警備部所属、L級巡洋警備艦 ホークアイ は2週間の航海任務を終え、本局へと戻ってきた。

フェイトは自分の艦がドックに接舷され停泊準備が整ったことを確認し、就労人員以外の一时下艦を許可した。

アースラ型L級巡洋警備艦の後継艦として新造された、ラーバナ型L級巡洋警備艦は前型に比べると幾分かコンパクトな様相を示していた。

実際、アースラもその内部の様子に比べ外観は小さいイメージを抱いていたのだが、ラーバナ型はその更に上に行く小ささだとフェイトは感じていた。

フェイトはすでに、航海日誌を元にして作成した報告書を前任執務官であるシャーリーと共に司令部に提出し終えていた。

シャーリーはどうやら友人との待ち合わせがあったらしく、報告書を提出し終えた後すぐに別れ、今はおそらく本局の上部に位置するカフェでお茶などを飲んでいる頃だろう。

フェイトも次の出立まで暫く時間があるため、久しぶりに本局の友達と会おうかと考えていたが、呼び出そうとした友人の誰もが現在作戦任務中で出払っているらしく、仕方なく自分の艦がドックの技術者達によってメンテナンスを受けている様子を見学に来たのである。

先程、ラーバナ型はアースラ型に比べ幾分小さいと言ったが、それは即ち戦力が劣るのかと言われればそういうわけではなかった。

むしろ、アースラ型には一門しか搭載されていなかった超重力砲アルカンシエルが合計二門に追加されている所を見ると、この間は決戦兵器としての運用を主眼に開発されたものだと言うことがよく分かる。

更に言えば、基本武装も新型へと置き換わり、その総合火力は従来の1・4倍をたたき出すほどだ。それでいて必要な人員、乗組員の総数も前型より10%ほど低減され、少ない人員で動かせる艦はそのまま本局戦力の向上にも貢献しうる。

現在、ベースライン2を最新として徐々にアースラ型と世代交代をしつつあるが、それが全域に行き渡るまでは最低でもあと3年は時間が必要だと言われている。

試作の段階からラーバナ型とは付き合ってきたフェイトにしてみれば、これは初めて与えられた艦であるため、アースラ型が徐々にその姿を消して行っているということにはあまり過敏にはならなかった。

ただ一つ、幼い頃にお世話になった、母が指揮を執っていた艦アースラが解体された時にはさすがにあふれ出る涙を止めることは出来なかったが、それも既に昔の話となった。

完全自動化された船体ドックには物資の補給に奔走する前任下士官以外には殆ど人の姿が見えない。まるで節の多い枝のような様相をする多自由度多用途マニピュレートシステムが行き交うドックはどこか簡素な箱庭のように見え、フェイトは少しだけ肩を振るわせた。

「テストロッサ・ハラOWN先輩、ですか？」

だから、フェイトは背後から近づく懐かしい声に少し驚いて振り向いた。

「やっぱりそうでしたか。お久しぶりです。私のことは覚えていらっしゃると思いますか？」

その丁寧な物腰、とうてい年下とは思えないほどの落ち着いた口調に、その知性を醸し出す縁なしのメガネ、そしてこざっぱりとま

とめられたブラウンの髪。それは、それこそ久しぶりに出会うフェイトの後輩の男、アグリゲット・シェイカーだった。

フェイトは驚きつつも、懐かしい顔ぶれに破顔し、

「久しぶり、アグリゲット。元気そう」

「先輩は少しお疲れのように見えますね」

フェイトとアグリゲットはそうして久方ぶりの再会を祝いあった。

「そうかな、自分ではそうでもないと思うけど」

「得てしてそういうことは、自分では分からないものです。これから航海ですか？」

「いいえ、今戻ってきた所」

フェイトはそういつて自分の艦を見下ろす。

その透明な高強度樹脂の窓の外には先程まで慌ただしく動いていたロボットアームの姿が消えていた。

『安全点検終了。スタッフは最終確認の後撤収せよ』

ドックに整備責任者と思われるもののアナウンスが入り、ホークアイの整備が終了したことを知らせた。

「なるほど。点検中でしたか。なら、今はお暇と言うことですか？」

アグリゲットもその様子を知り、新造艦 ホークアイ のその優美な船体を眺めた。船体前部に突き出された二門のアルカンシエルの発射口を包み込むように曲線美にあふれる船体がそれを支えている。

最終点検の一環としてエンジンにも火が入れられ、アイドリング状態となったそれは固定柵から船体が飛び出さない程度にノズルを開いた。

そこから見えるものは地上の航空機のような赤い炎ではなく、人の目では移すことの出来ない特殊な微粒子が放出されている。いや、微粒子という表現にも語弊がある。

そもそも時空間の海ではむき出しの通常物質は存在できないとされていた。それでも時空航行船がそこに存在できるのには、多次元空間上に三次元、時間を含めば四次元のディメンションを船体周囲

に固定させる事が出来るからに他ならない。

その技術は、残念ながらフェイトにとっては複雑すぎて理解できなかったが、多くの船乗り、特別に勉強をしている技術者達を除くと、殆どのものが理解していないだろう。

船の周囲に固定化させた四次元空間内で幾らブースターを吹かして、その反動を得たとしても移動できるのはその四次元空間内に限定されてしまう。確かに、敵と接触し、その空間を共有することで戦闘をする場合はそういったものも必要となるが、多次元空間上を移動するには、多次元空間で存在できる物質を放出するしか方法が見つからなかったらしい。

その概念は、素粒子内に存在する多次元管、一般には超弦物質（超ひも理論によって導き出される概念）を励起させその内にある超次元をむき出しにすることで多次元においても存在できるようにした概念物質を利用しているのだ。

超弦物質を励起させ、それを縮退する事でその状態を対象化、安定化させ、それを波動として放出し超次元空間へ投げ出すことで船体を含む4次元空間は反力を得る。この超弦励起縮退波動航法、この発見者、エリオット・ワグナーの名前にちなんでワグナー航法と呼ばれる航法により人類は無限に広がる時空間の海へと旅立つことが出来たのだ。

フェイトは作動音を奏でる船体のノズルに暫く目をやり、その点検が終了し船体全部が一時休眠に入ったところを見計らい、口を開いた。

「アグリゲットは、今なにを？」

彼女は少し前まで自分の補佐官をしていた彼の現在を知りたくなつた。

「ええ、今は陸にいます。特務機動中隊と言えばおわかりでしょうか？」

フェイトはその名前を聞き、「ああ」と頷いた。

「はやてがお手伝いした部隊ね」

機動六課解散後、部隊長の職務から離れた彼女は確か、新部隊構想の実現化を補佐する仕事を始めたと言っていた。フェイトは聞かされていた。はやてならこれからもずっと優秀な指揮官としてやっていけるのにとフェイトは思ったが、はやては機動六課での経験から自分の未熟さを思い知り、暫く離れることにしたと言っているらしい。

「はい。その副司令などを務めています」

「副司令か。君なら上手くしているだろうね」

フェイトは、彼を補佐官にしていた頃を思い出していた。寡黙だが誠実、無口だが行動力は確か。例えどんなに過酷で無茶な要求でも、まるでどこぞに吹く春の風とばかりに涼しい顔をして出て行き、気がつくといつの間にかそのすべてを実現して帰ってくる。

その間に何があったのか、それが語られることはなかった。

フェイトは、そんな彼を心強く思いながらもその奥の見えない彼をどこか恐ろしく感じた時もあった。

「陸は初めてですから、毎日あたふたとしていますよ。久しぶりにここに帰ってきて帰ってホッとしているような塩梅です」

寡黙だが、人当たりの良いその人格は変わっていないようだ。フェイトは安心すると、自分の通信機がなっていることに気がついた。「テストロッサ・ハラウンです。ああ、シャーリー。うん、分かった。すぐ行く」

アグリゲットにはその会話の内容を聞き取れなかったが、おそらく現在の副官であるものが何らかの準備が整ったという知らせなのだろう。

「仕事ですか？」

自分も幾つか仕事を抱えてここにいる手前、あまり長い間彼女と話している訳にもいかない。それは機動中隊の仕事はもちろん、それ以外のものも。

アグリゲットは手持ちのファイルを強く抱えた。

「うん、そろそろ次の任務の辞令を受け取りに行かないと」

「そうですね、私も本局の人事部と技術部に用事がありますから、

「ここで失礼します」

アグリゲットはかつての習慣に従い、敬礼をせずに一礼し廊下を歩いていく。

「身体には気をつけてね」

フェイトは去っていく彼の背にそれだけを言い残すと、現在時刻を確認し、少し急がなくてはいけないと思い足早にドックを後にした。

第十一話 特務機動中隊

特務機動中隊の面々は、さすが特殊部隊に抜擢されさらにはここで受けてきた特殊訓練の成果もあり、その練度は相当なものだとエルンストは感じていた。それでもどうしても越えられない壁というものには存在するのだと実感していた。

「後方、7時の方向に敵の出現を確認。距離、34。総数6接近、相対距離50……オープン・エンゲージ」

エルンストは一等小高いビルの上立ち、そのフィールドを俯瞰するように眺め回していた。オレンジの光点の総数は大小合わせでその数が既に30を超えていたが、追加配備されるターゲットが現れる瞬間から一方的な速度でそれが減少していく様を彼はつぶさに観測していた。

彼は【クリミナル・エア】を短銃身の連射型カービン銃のスタイルで脇に抱え、本人はあくまでチームメイトをサポートする観測士と情報士に徹するのみだった。

チームメイトは自身を除けば僅か2名。一個分隊として最小構成とも言える小規模戦闘部隊であるはずのこのチームは、先程まで戦場を支配していたチームと比べ圧倒的な戦力を誇っていた。

「D2に警告、敵6時方向より接近。距離20、仰角15、相対速度32。小型機と確認、総数3」
デルタ

その言葉と共にD2（ヴィータ）の光点は急速反転の後上昇し、その目標を空から迎撃した。赤色のスカートの裾が靡き、その手に持たれた巨槌【グライフ・アイゼン】が振りきられ、その先に浮遊する三つの鉄球を恐ろしい勢いで打ち付けた。

十分な速度と重量、そして僅かに与えられた追尾機能を持つてその鉄球は美しい弧を描き敵をなぎ払い、打ち砕き、押しつぶす。

それだけ大きなモーションを必要とするその攻撃においても彼女の動きにはまったく無駄がなく、正に敵の光点は瞬く間に消去され

てしまった。

「D1へ、進路変更を要求する。その先に敵の包囲網が作成されつつある。そのまま10時方向へ120進み、それより9時方向へ反転せよ。なお、現在、敵レーダー照射を受けている。乱数回避運動と共に低空飛行を推奨する」

D1（なのは）の了解という声に呼応して、D1は不規則な軌道を描きつつその高度を上下させながらも徐々にその硬度を下げ、エルンストが警告した敵の包囲網から距離をとりつつあった。

「D1からD3へ。先程3時方向、距離およそ80に敵の機影が肉眼で確認できた。情報を求む」

D2の監視に戻ろうとしたエルンストに彼女の声が響いた。

「了解しばし待たれよ。確認した、それは敵の包囲網の一部であると推測できる、驚異度は低い。そのまま飛行しつつ周辺を警戒せよ」

D1とD2、つまりなのはとヴィータにはこの戦場の情報を自前で取得することが出来ない。それは、即ち殆ど目隠しで戦闘を行っていることと同等のことなのだが、彼女らの後方には何よりも信用のおける鷹の目があることに二人は安心して飛び続けられるのだ。

「D2よりD3へ。そっちに敵が行ったぞ、注意しろ」

D2の荒々しい声がエルンストの脳裏に響いた。念話は鼓膜を振動させる会話ではなく、あくまで魔術によって自らの意思を相手に届ける者であるため、端から見れば彼らは戦闘開始からなにも一切口を動かすことなく、ただ黙々と飛び回り敵を蹴散らしているように見えるだろう。

しかし、その声にならない声は状況が変化すると共に忙しく、激しく戦場を行き来する。

「了解したD2。確認した。D1からの援護を要請する。D1可能か？」

敵との交戦中でまったく身体に余裕のないD2では援護は無理だと考えたエルンストは、急遽D1へ返答を求めた。

「こちらD1、現在敵12体とエンゲージ中。ごめんだけど、無理」

D1なのはの口調が少し日常が混じっているように感じられた。さすがの彼女であってもガジェット12体の波状攻撃を受ければ多少の苦戦は強いられると言うことか。彼女が本来の戦法をとれたのなら、その程度の数など障害にもならないはずだが、この訓練を受ける前に彼女のデバイスには様々な制限が加えられていたためそれも致し方のないことだった。

見るとD2も先程出現した9体のガジェットと交戦中のように手が離せない様子だった。

「D3了解。こちらで対処する。D2へ。更に敵の増援がそちらに向かいつつある。1時方向、距離210、速度40、総数7。対処不能であれば、3時方向のD1との合流を推奨する」

D2ヴィータは、現在自分が相手をしているガジェットの数と今自分に向かいつつある敵の数に驚いた。

「マジかよ！ CP（コマンド・ポスト：司令部）も容赦ねえな……、カートリッジロード！」

おそらく今のが最後のカートリッジだな。とエルンストは思うと自分自身にも接近しつつあるガジェットを意識に入れた。

11時方向、距離80、速度84、総数1。一体程度なら何とかなるか。

しかし、ここで自分が撃墜されれば残りの二人は事実上目を失うこととなる。おそらくあの二人のことだから、それでも何とか善戦するだろう。しかし、それでも攻撃の精細は欠くことになるかも知れない。二人の技能は信賴しているが、包囲され大規模飽和攻撃を加えられればさすがに撃墜は免れないはずだ。

戦闘開始から既に30分が経過していた。この訓練は、自分たちがCPの設定した敵の規定撃墜数を超えるか、40分以上持ちこたえる、もしくは撃墜されるまで続くだろう。

（随分と期待されたものだ）

視界の端で、再び増援を確認したエルンストはその数が5であることを確認した。先程のパターンから、CPは戦場に常に30〜4

0程のガジェットを常に配備させるようにシステムを設定しているように思える。

（まだ規定数には達していないと言うことか）

今出現したガジェットは、どうやら自分の方向へと向かいつつあるガジェットと合流するらしく、その速度をかなり早めている。

（俺一人ではさすがに6体同時に相手をするのは無理だ）

エルンストは、それを見てその場を撤収することを決めた。

エルンストは意識を集中し、周囲の環境の気配を探った。そして、その環境の雰囲気のパターンを読み取ると今度はその意識を内面へと移していき、自らの気配を環境へと溶け込ませる。

ひよつとすれば、CPのモニターには現在自分の光点が映っていないのではないか。エルンストはそう感じると、その気配を身に纏ったままビルの上へと移り、隣のビルへと跳躍し、何度かそれを繰り返すことで別のビル。先程のビルとは少しばかり低めのものの屋上へと身を移した。

締めたことにガジェットはその行動を把握し切れていないようだ。本来彼がいるはずの場所になにもないとさとしたガジェットはその場の周囲を索敵するようにその場に立ち止まってしまった。

エルンストにとってそれだけの隙があれば十分で、跳躍する前に仕掛けてきた罠を発動させる。

爆発音が鳴り響き、戦場にしばらくの間灰色の瓦礫と粉塵の雨が降り注ぐ。

それには相手の索敵機を混乱させるチャフのようなものも仕込んであったので、敵はさぞいい感じに混乱していることだろう。

見ると、その援護を受け、先程まで少々劣勢だったD1、D2の両名も今の一瞬で敵を撃破し尽くしてしまった。

戦場には目立った敵の光点はない。そして、エルンストがいまだに活動続ける最後の一体を距離700離れたところで、自分のライフルを使って一撃で仕留めた。

「状況終了。D分隊、帰投せよ」

エルンストは時計を見た、その表示を見る限り戦闘開始からまだ37分ほどしか経っていない。つまり、彼らは持ち時間が過ぎるまでにC Pが設定した規定数をクリアしたと言うことだ。

「こちらD1了解」

「D2も了解だ」

「D3、了解」

エルンストは状況終了と言われてもまだ油断なく周囲を警戒しつつ待機場へと進んでいった。

その途中、彼と同じように付近を哨戒するD1とD2、なのはとヴィータと合流すると、エルンストはなのはの支援を受け、空中を飛行しつつ周囲を監視した。

「やったね、完璧だよ」

なのはは心なしが先程の戦果を喜んでいる様子だった。

「あたしとなのはのタッグだぜ？ 負けるはずねえよ」

ヴィータはまだエルンストが気に入らないのか、そのタッグの中にD3を含まずに言うが、この戦闘の勝利について最大の貢献者は他でもないエルンストだと言うことは理解していた。

つまり、ただの可愛いやつかみである。

「お二人が完璧な行動をとっていただいたおかげです」

エルンストの声には謙遜は含まれていなかった。それどころかなのはは少しだけ彼の口調に自嘲を感じ、あれっと思って下を飛ぶエルンストの表情を覗き込んだ。

なのはの見立てでは彼の表情はまったく変わらないようにも見えたが、少しだけ不満な、どこか納得のいつていない様子も感じられたのだ。

「ねえ、エルンスト君。さっきの戦闘で何か不具合でもあった？」
教導官を生業とするのはにとつてそれは第一に憂慮する事であり、自分としてはかなり良かった結果を不満に思う彼の意見を聞いておきたかった。

「いいえ、結果的には何の問題もありません。問題に思う、という

よりは不満に思っているのは自分自身のことです。最後は上手く立ち回れなかった。それが口惜しい」

なのはには彼の立ち回りはまったく問題のないように思えた。むしろ、あれは支援者であるエルンストを護衛仕切れなかった自分たちに問題があるのだと考えていたからだ。それでいて彼は思わぬトラップを仕掛け、ただの単体で6体ものガジェットを仕留めることに成功したのだ。これは、情報士としてはたぐいまれな快拳ではないかと思う。

そして、同時に気がついていて。彼は今彼本来の戦い方をしていない。ここに来る前の少しの間、なのははエルンストの本当の訓練を見ていた。あの見事としか言いようのない狙撃技術。もしも彼があの戦い方をしていればあのガジェットももつと的確に速やかに排除できたかも知れないのだ。

なのはには彼がなぜ、その技術を封印しているのかが分からなかった。それに、何故か問いただせなかった。
(上官としては多分、失格なんだろうな。だけど、これだけは不用意に聞いちゃいけない気もするし)

すこしやきもきし始めたなのははそれを発散させるべく少しだけ飛行速度を上げた。

「周辺に敵影無し、安全を確認」

エルンストは静かにそう告げた。

「了解。このまま真っ直ぐ飛んで帰ろう」

「だな、あいつ等も待ち遠しくしてることだしな」

ヴィータは待機所から身を乗り出して彼らの帰還を待つ者達を見て少し得意げな笑みを浮かべた。

これは、三人の訓練と言うよりは、訓練を受けている若手に対するお手本という雰囲気の方が高いとなのは感じていた。だから、CP、A分隊隊長朱鷺守棋理はわざと過酷な状況で戦わせたのだろう。

そうでなければ、単なる嫌がらせか新人虐めの一環か。どちらに

せよ、自分たちには悪くない結果だとなのはは思った。

「さすが管理局のエース・オブ・エースに紅衣の騎士。よく、あの状況で200体ものガジェットを殲滅できましたね。しかも、40分もしないうちに」

朱鷺守棋理はデバイスシステムの一部である黒眼鏡を外しながら感嘆の声を上げた。彼のその身を包んでいるバリアジャケットらしい衣服は、黒いロングコートに黒のシャツポ、それに黒眼鏡と着たらどこの禁酒法時代のギャングだと言いたくなる様相だった。

なのはは最初に彼の紹介にあずかった時、どこか怖そうな人だなと思ったが、暫くその人柄を見ている内にどこかユーモラスで親しみの持てる人物だと評価を改めていた。

エルンストは彼を、軽そうな男だ、だが強い、と評価していた。実際この戦闘訓練では、彼はデバイスとバリアジャケットをオープンにしているものの、戦闘にはもっぱら指示とその後の処理を行うだけで参加はしていなかった。

彼の持つデバイス、【ナイトホーク】と警戒されたそのナイフ型デバイスを見てエルンストは、相手にするには最もやりにくい手合いだと直感した。

その武器からおそらく彼は超近距離による高速度高機動戦闘を主体にしたバトルスタイルをとるはずだ。本来、遠距離狙撃を生業とするエルンストが、棋理のバトルフィールドに捉えられた場合なすすべもなく切り崩されるだろうと予想した。

対策を立てるにしても一度この相手の戦闘を実際に見てみなければならぬ。それが最初で最後の手合いとならないことを祈り、エルンストは彼の評価に耳を傾けた。

「あの状況下の戦闘としては正にお手本とすべきなほど洗練されていた。お前等も今の戦闘データをよく吟味し自分に応用の出来る部分はどんどん応用して技術を盗め。特にこの二人の戦闘を見られる機会なんてそんなにないわけだからな」

それはエルンスト達に対する評価と言うより、若手に対する助言

だった。

やはり、訓練と言うよりは手本を期待しされていたのだとなのはは自分の予想的中を知り、同時にあの状況でエルンストの支援がなかったらどうなっていただろう、と密かに戦々恐々としていた。「では、少し長くなったが今日の訓練は終了だ。各自通常業務に戻れ。敬礼はいい。解散」

棋理のその言葉に真剣に耳を傾けていた4人の若手は、「ありがとうございました」と言つてすぐさまデバイスの保管庫へと駆け足で向かっていった。

その去り際、レイリアと名乗った隊員がちらつとエルンストの方を見たような気がしたが、それを確かめるまもなく彼は駆け去っていった。

「ふう、さてと」

棋理は呟くと、自身のデバイスをオフにしてその二本のナイフに黒いコート、黒いシャツポ、黒眼鏡をオイルライターの形をした待機状態に戻した。

だが、それは単なる見た目だけではなく本当にライターの機能まで付加させてある様子で、彼はすぐさま懐から紙煙草を取り出すとなのは達の見ている前でそれを吹かし始めた。

機動中隊の外周は別に禁煙になっているわけではないが、ここまではあからさまに煙草を吸う人間も珍しい。

「悪いね。これがないとどうも気分が調子が戻らなくて。一種の中毒だなこれは」

彼はそれだけ口にするにとりあえず一本吸い終わるまでなにも話さず、吸い終わったそれを携帯灰皿に捨てると改めて三人に向き直った。

「失礼。ご苦勞だったな、お三方。結構疲れただろう？」

一応彼は階級の上では一等空尉であり、この中で最も階級の上であるのと同じ身分であるため彼はまるで同僚と喋るような口ぶりですら話を切り出した。

いきなり煙草を吸い始めた彼にきょとんとして見つめていたなのは、そんな彼の気安さに安心を覚えた。

「さすがに200体は。もう少し手加減して貰えると助かったのだけど」

「そーかー？ あたしは余裕だったぜ」

「確か、ヴィータ二尉は200体中撃墜数75体、対して高町一尉は118体。そして俺は7体。なるほど、確かにヴィータ二尉は高町一尉より多少余裕があったと思われます」

エルンストは「ストライク・ビューワー」に記録された戦績を口ドしそれを忠実に正しく口にした。

「なんだとー！！ エルンスト、テメエ。喧嘩売ってんだったらかってやるぜ？ ああん？」

ヤクザのちんぴらかと思うほど、見事な絡みを見せつけるヴィータの様子にあくまでも平然と、「事実を述べたまでです」と口にするエルンスト。その二人のじゃれ合いのような絡み合いに、終に棋理が吹き出し腹を抱えて笑い出した。

見るとなのはも腹を抱えたりはしないが、クスクスと笑みを浮かべている。

「おい、お前、エルンストだったか。単なる堅物かと思ってたが、気に入ったぜ」

棋理はよじれそうになる腹を痛そうに押さえ、エルンストの背中をばんばんと叩いた。

「こら！ 朱鷺守！ そんなに笑うんじゃねえ。なのはも」

小さい身体でぶんぶんと腕を振り回す赤い少女は、その姿に違わず顔を真っ赤にしてなのはをばかばかと叩いていた。

「痛い、痛いよヴィータちゃん。ごめんなさい、もう笑わないから」
なのははそれでも笑いながら、ヴィータの頭を何度も何度もなでつけてあやした。

（一体、何の集団なんだこれは）

事の発端であるはずのエルンストが置いてけぼりを喰らってしま

うほど、彼らは滑稽に笑いこけた。

棋理はとりあえず三人と雑談がしたかった様子で、その目的が果たされた以上、三人も同様通常勤務に戻る必要があった。

そしてその解散の際に、棋理は言い忘れていたことを思い出した。「そうだった。高町なのは一等空尉、八神ヴィータ二等陸尉、並びにエルンスト・カーネル一等陸士。特務機動中隊武装A分隊隊長として命令する。本日19:00（ひときゅうまるまる）に本部棟食堂に集合を命じる。その時間きっかり、三名共に集合のこと以上、質問は？」

「ありません。任務了解、高町なのは一等空尉以下、武装D分隊三名は本日19:00に本部棟食堂へ集合いたします」

なのはは敬礼を持ってその命令を受諾し、なのは以下、ヴィータとエルンストもそれに習って敬礼を送った。

「よろしい。では、解散とする。通常勤務は既に部隊長からの説明の通り、今更細かく指導することもないだろう。不明な点は逐次周りのものに聞くこと、以上だ」

棋理は敬礼をしてその場から立ち去った。

棋理の姿が通路の向こう側に小さくなっていったところで、ヴィータは肩の力を抜いた。

「けどよ、こうやって誰かの下に着くってのも久しぶりだよな」

「そうだね。だけど、なんだか仕事に張りがあつていいな」

三人は連れ添って歩き出し、まずはデバイスの管理庫へ向かうこととした。

「そういえば、エルンスト君の勤務は何が当たってたっけ？」

なのはは自分の勤務内容を確認するのに忙しく、彼の勤務についての説明を余りよく聞いていなかった。

「自分はデバイスを初めとした周辺機器の整備保守の補佐を当てられています」

なのははそれを聞いて、「ああ、そうだったね」と答えた。

「デバイスの整備保守って、確か専門技師者ねえと出来ねえんじや

なかったか？」

確かにヴィータの言うとおり、デバイスは精密な構造物であるためその安全性と信頼性を保全するためには専門の資格を有する技術者が必要だ。簡単なセッティングなら訓練校を卒業した魔導師であればある程度は出来るが、それ以上にもなると無理があるように思える。

しかし、エルンストは平然中尾をして、

「問題ありません、デバイス整備士の資格は既に取得済です。もつとも、等級は第三級でそれほど高いわけではありませんが」

デバイスは整備士資格第三級。それは十分な資格ではないかと残る二人は思うが、それは口にしないこととした。

といつてもエルンストが言ったことには一定の信憑性もあることは確かだ。一般的に有益な、一般社会において就職に有利な肩書きとしてのその等級はだいたい第二級以上とされている。第三級はひとまず基本とある程度の応用が出来ると言った程度の資格で、マチュアのデバイスは技師なら戯れ程度に取れると言った程度のものというのが一般認識だ。

それでも、アマチュアレベル程度にデバイスをいじることの出来るのなら、通常勤務にデバイスを初めとした周辺機器の整備保守の補佐に回されるのも納得が出来る。

もしもこれで第二級や第一級を持っていれば、そのままデバイス専門技師になれと勧められるだろうから、エルンストにとっては第三級というものは実に扱いやすい肩書きというイメージもある。

「では、俺はここで失礼します」

保管庫にたどり着いたエルンストは、その隣の部屋、技術室とかかれた部屋を指さしたのはとヴィータと別れた。

「うん、しつかりね」

「へますんじゃねえぞ」

保管庫にデバイスを預け、デスクワークを任された二人は業務へと急いだ。

「それにしても今度はデバイス整備か。あいつ、何でも出来るんだな」

グイータはコンパスの小さい足を懸命にふるって前を行くのはに着いていく。

「確かに、あの様子だとヘリの操縦とか、連絡士、トラップ解除とか。本当に何でも出来そうな様子だよな」

グイータはなのはが冗談を言っていると感じ、鼻を鳴らして笑い飛ばした。

「おいおい、それじゃまるで……、特殊部隊員じゃねえ、か？」

なのはは押し黙った。その可能性は否定できない。それが何で今ここにいて、彼があのプロフィールを持っているのか。その説明がつかない。

二人がエルンストの正体を知るのにはまだ時間が必要だった。そして、エルンストさえも知らない彼に纏わる事情を知るのにはさらなる時間が必要だった。

それは知らなくても良いことだったのか、知るべき事だったのか。少なくとも二人は知りたいと思っただけ、彼の口からそれが話される事を望んでいた。

はたしてそれが正しいことだったのか。二人にとって余分なやつかいごとを引き込むだけのことだったのか。その答えが出ることはない。

はたして業務終了を告げる18:00まで二人は黙々と作業を続けることとなった。

第十二話 隙間

目が覚めた。そして思ったのは、また違う天井だと言うことだけだった。

エルンストは、なれてしまった感触に特に感慨も浮かばず、ベッドから抜け出した。

（軍服のまま眠るのは癖になってしまったな）

いつも着ている制服の上着を脱ぎ、ソックスを外した形で眠るのは急な任務に即応するためだった。しかも、彼はそれまで行ってきた任務の特性上、同じ場所で眠る機会というものが極めて少なかった。

（18年間変わらないか）

ソファの上にぞんざいに投げ出された上着を身につけ、不器用な手つきでネクタイを締めながら、彼は既に色あせつつあるかつてのことを思い出していた。

4年前、彼が14歳の時時空管理局の魔導師となり、再び闇へと落ちていった時よりも昔、彼は今では場所すら思い出せない裏通りに住まう子供だった。

所謂ストリートチルドレンと呼ばれるその難民は、彼が生きていた国では珍しい者ではなかった。物心つく頃には既にその光景は彼にとって日常であり、それ以外の世界があることなど知りもしなかったあの頃。

あの頃に比べれば、今という時間がどれほど恵まれていることが飢えることもなく、病気や大人の影におびえることもない。すみかを終われ、仲間が犯され銃殺されるそんな光景を見ることもない。必要以上に何かを求めなければなにも失うこともない。

エルンストは、机に置いた彼の唯一の持ち物、彼が気づいた時には持たされていた一つの宝石を手に取り、それを部隊章と共にポケットにしまい込んだ。

小さな赤い宝石。殆ど真球を保ち、光の加減によつては透明にも不透明にも見える。これが所謂魔導師のデバイスだと知ったのは、ごく最近のことだった。

既に機能を失い、何の反応も示さないそれは、修復しようと思えば修復も可能だった。しかし、エルンストはそれを拒んだ。その理由は分からなかった。

ひよつとすれば、そのデバイスは死んだ（かどうかは分からないが）両親のものだったのかも知れない。ひよつとすれば、両親の情報がそれに込められているかも知れない。しかし、エルンストはそれを知ることには恐れを感じた。

（それに、今頃知ったところでどうなるわけでもない）

エルンストは仕上げに腕に多目的通信機をはめると、ふと窓の外を見た。

窓の外に誰かがいる。

カーテンを押し広げ、僅かに高くなったその場所から下を眺めると、なのはが小さな子供と一人の男と一緒にいるところが見えた。

「高町一尉の家族か？ それにしては、似ていないな」

彼女をママと呼ぶその少女は、小麦色の髪を両サイドで僅かにくくり、その瞳は両の目で色が違う。

その瞳の色、髪の色からしてなのはのものともその二人を見て微笑む男のものとも異なる。

何か事情があるのだろうとエルンストは黙ってそれを見ていた。

「それじゃ、ヴィヴィオをよろしくねユーノ君」

なのははそういうと、ヴィヴィオと呼ばれた少女とユーノという男と別れ、二人はその先に止められた車に乗り込んだ。

その車が見えなくなるまで見守るなのはの背中には、どこか哀愁というか、寂しさのようなものが漂っているようにエルンストには見えた。

エルンストは、そのまま窓から離れ部屋を出た。

宿舎を抜け、本舎に抜ける渡り廊下を歩いていけると、側の角から

なのはが姿を見せた。

「あ、エルンスト君。おはよう、早いね」

「高町一尉も。今日は午前の訓練もないでしょうに」

エルンストはその理由をおよそ分かっていながらわざとそういった。

今日は昨日の事があり、午前の訓練、朝食前に行われる小さな訓練、が休みになったのだ。

昨日の夜。その日の訓練の最後に棋理が告げた19:00の任務に彼が、なのはとヴィータと共に向かった食堂で彼らの歓迎のパーティーが催された。

久しい二人、なのはとヴィータとの再開の喜び、エルンストの歓迎のため豪勢ではなくとも暖かなパーティーだった。

「ちよつとね。人が訪ねてきたから」

「なるほど」

最低限嘘はつかない彼女の答えに、エルンストは彼女が嘘が苦手だと言うことを思い出した。

「高町一尉の娘さですか？ それと彼は夫の方でしょうか」

エルンストの問いになのはは驚愕して彼を見た。

「申し訳ありません、上から見ていました」

なのはは「そう……」と言って、先程エルンストの口にした言葉に慌てた。

「え、えつとね、ヴィヴィオが娘だったのは間違いないんだけど。

血はつながってないけど、私のことママって呼んでくれるし、ただユーノ君は、その、お、夫って言うのとはちがうくて」

エルンストは「そうですか」といって、

「結婚はまだだったのですね。交際中ですか？」

エルンストの考えでは、未婚といえ自分の娘を預ける相手がただの友人では済むはずがないとなっていた。

「こ、交際中って。そりゃあ、一緒にお買い物とか食事とは行くけど、そこまでは……」

顔を一気に真っ赤にするのはあくまで否定的な立場をとるが、エルンストは少しだけ表情をかげらせて、呟いた。

「何事も次得られる保証はありません。気がつけば手から滑り落ち、永遠に戻ってくることはなくなる。後悔しても遅く、取り戻すことはできない」

「エルンスト君？」

「あなたは俺のようになるべきではない。ただそれだけのことです」
「エルンスト君は、あるの？ 取り戻したくても取り戻せないものが」

「そうですね、一番近いものを言えば。昨日の夕食ですか。あれは良いものでした」

「え？」

「では、先に行きます」

エルンストはそう言い残すと昨日残していた作業の続きを行うべく、デバイス保管庫横の作業室へと向かっていった。

「もう、エルンスト君ほ油断ならないなあ」

多分、まだ彼は自分たちを信頼はしていないのだろう。それでも彼はその胸の内のほんの僅かを開いてくれたような気がする。なのははまだ熱い頬を撫でながら、喜びと共に足が軽くなるように思えた。

その日はとても平穏な一日になると思っていた。寝不足の疲れが目立つ分隊員を眺めて、朱鷺守棋理は午後の訓練を早めに切り上げ、そのまま自由待機として自身も休憩に入っていた。

「お疲れ様です、朱鷺守一尉」

寮の一角に儲けられたカフェで珈琲を堪能していた棋理の元に、同じく珈琲を手にしたレイリアが挨拶を交えて席を共にした。

「よう、レイリア。お前もここか」

棋理は呼んでいた新聞から目を上げ、レイリアを歓迎した。

「ええ。途中でヴィータ二尉と会いまして、お茶でもどうかと誘ってみたらOKが出ましてね」

レイリアの視線の指す方向には、まだ何を飲むか考えあぐねているヴィータの姿があった。その容貌からすればまだまだ子供である彼女は、棋理が舌を巻くほどの戦闘力と実績を持つ。

闇の書事件、ヴォルケンリッターという事情を知る彼には彼女が多くの時をそうして戦いに身を投じること生きてきたと言うことを知っていた。

故に、棋理は立場上階級の低い彼女に対しても一定の敬意を表しているのだ。

「なんだ、朱鷺守も一緒かよ」

結局ヴィータはいつも飲んでいるホットミルクにした様子で、暖かな湯気の上がるそれを両手で抱えるように席に着いた。

「ま、この際だ。我慢してくれ」

棋理はそういうと呼んでいた新聞をたたみ机に置いた。少しの間放っておいた珈琲は若干ぬるくなっていたが、その香ばしさはまだ抜けていなかった。

「何か、面白い記事はありましたか？」

猫舌なのだろうか、レイリアは珈琲の熱さに少し眉をしかめながらするようにそれをゆっくりと口にする。

「別に。最近、株価が下落方向だとか、国の借金が増える一方だとか、周辺諸国とのいざこざがそろそろ表面化しそうだとか。変わり映えはしねえな」

こういう新聞は、どちらかというと暗い話題ばかりを記事にしたがる傾向がある。嫌な話題なんてものはそれこそ嫌でも目につくわけだから、こう言うところではむしろ愉快的話題に主眼を置いて欲しいものだ。棋理は考えるが、他人の成功話なんてつらつらと書かれても面白いどころかだんだん腹が立つてくるだけかと思ひ直した。「時空世界もいろいろ面倒になってきてんだな。まあ、あたし等に

お呼びがかからないだけましか」

ヴィータは相変わらずのつまらなさそうな雰囲気です。足をブラブラとさせていた。

「実際、楽しい話題なんてぱっと思いつきませんしね」

正直なところ、レイリアも最近の状況に倦怠感を感じていたところだった。いや、彼だけではない。機動中隊や管理局全体にその雰囲気は広がりつつある現状にレイリアは少しだけ危機感を感じている。

「そろそろここいらででかい事件が起こりそうな気がする。あんたもそうは思わないか？ ヴィータ二尉」

棋理はヴィータに水を向けるが、ヴィータは鼻を鳴らして、「だったら、むしろ好都合じゃねえか。どうも最近身体がなまってしかたがねえ。おっきな事件が起こるってんなら堂々相手をしてやるよ」

やる気十分、どんと来いと言わんばかりに口をしめらせた。さすがに歴戦の勇士は言うことが違うなとレイリアは思い、

「いや、実際起こってくれど困るわけですけどね。僕達みたいな人間はむしろ暇な方が良いでしょう」

「ま、そうだな。お前も言うようになった」

棋理は、普段はお気楽に過ごしているレイリアのその言葉に頷いた。

ヴィータは、悠長なこといつてんぜ、とその話題に興味を示さず、先程カフェの入り口に姿を見せたシグナムに手を振った。

「ヴィータ、ここにいたのか」

シグナムは少し身体を動かしていたのか、その額には僅かながら汗を浮かべていた。

「シグナムは、自主訓練か？」

ヴィータは隣の席に彼女を薦めた。

「うむ、皇暦陸曹長と少し打ち合っていた。なかなか悪くない仕合だった」

シグナムは日本茶を注文すると、しみじみと先程までの剣戟を思い返しゆっくりと頷く。

「そうか、B分隊の副長^{うち}が世話になったな。ところで、どうだ？ あいつの戦力は」

棋理は、B分隊の副分隊長である彼の様子を思い、それをシグナムに訪ねた。同じ近接戦闘を生業とする棋理と彼だったが、相手を翻弄しその隙を突いて攻撃を加える棋理とは違い、彼は実に真っ直ぐと相手と向き合い戦う。

本来なら、彼を指導する立場にあるのは棋理だったがその相違によりシグナムに任せている状況なのだ。

皇曆御剣。たたき上げの陸士である彼は、機動中隊の武装分隊の中では最年長ではあるが、その経験に裏打ちされた思考力と何よりたぐいまれな柔軟性、そして幼少より続ける剣術の腕は中隊でも一目置かれる存在だ。

同じく剣術を志すシグナムとは何かと気が合う様子で、このようにお互いの暇を見つけては剣の仕合を行っているという様子だった。「素晴らしく良くなっている。もう後数週間もしないうちに、私も一本取とられてしまうだろう」

それでもまだ、彼はシグナムから一本を取った事はない様子だが、彼女の言葉から推察するとその技は更に磨きがかけられていると言っことだろう。

「そいつは楽しみだな」

棋理はそういうと、冷めてしまった珈琲を一気に飲み干した。

「なあ、レイリア。そういうえだが、お前、AWD（アーマード・ウェポン・デバイス社）に報告書は上げたのか？」

棋理はレイリアが中隊とは別に何か任務を持っていることを思い出した。

「ええ、昨日の通常業務中に。既に送信済です」

棋理はその答えに「なるほど」と答え、近くを通り過ぎた給仕に珈琲の代わりにアレンジティーを注文した。

「新型の具合はどうだ？ 何でも新たなカートリッジシステムだと聞いていたが」

シグナムもその話には興味を持ったのか、私物の湯飲みを片手に聞いた。

「そうですね。今の所は一長一短というところですね」

棋理は「詳しく話せ」といつて先を促した。

レイリアは少し考え、どこから何処までなら話してもいいかと考えると、ポツポツと語り始めた。

「そうですね、リンカーコアへの不可は極小。魔力の消費も最低限。それでいて従来と同じでいどの魔術運用が可能となった。それは開発コンセプトを完璧に満たしているのですが。まだまだ蓄積された魔力量が少ないせいか、ベル力のカートリッジを併用している辺り規模が大きくなって扱いづらく、携行できる量も限られるつてところですね」

レイリアが時空管理局とは別に担当している仕事。それは、AWDが新開発したデバイスシステムの実地試験だった。

AWD、アーマード・ウェポン・デバイス社の名を聞けば、おそらく多くのものがキハイル式デバイスシステムを思い出すだろう。彼の仕事はその会社が更に新開発したカートリッジシステム、キハイル式カートリッジシステムの試験だ。

キハイル式カートリッジシステム。それは、キハイル式デバイスシステムの完成のためには絶対に必要となるものであり、キハイル・メースの理想を実現する夢のシステムとされている。

それは、リンカーコアを必要とせずデバイスに魔力を装填させる画期的システムであり、キハイル・メースの言葉を借りれば、『術者の負担を軽減しつつ、武器システムとしての信頼性と安定性を保証する』システムであるらしい。

レイリアの提出した報告書は、そのまま管理局の上層部を通じてAWD社に送られるだろう。レイリアは自分の意見が次世代のデバイスシステムに反映されることを嬉しく思いつつも、どこか重いプ

レッシャーを感じてもいる。

「なんだお前達、こんな所に揃って何かの会議か？」

見ると、南雲がテイクアウトの珈琲を片手に側を通り過ぎようとしていた。

「おや、部隊長」

敬礼をしようとする皆を、「いい」といって手で遮る。

「いえ、今は自由待機ですので何となく集まってしまったという塩梅です」

シグナム。

「そうか」

「そういえば、部隊長も休憩で？」

棋理。

「いや、これから仕事だ。陸評（陸士評議会）と本局の合同会議に出席しろとの達しがあつてね。八神二佐が急遽出られなくなったとこのことでその代理だ」

「はやてが？ 何の用事だ？」

ヴィータ。

「ガルメデス共和国の軍幹部と会合があるとのことらしい。詳しいことは僕にも分からんよ」

「ガルメデスですか。最近やつかいごとを抱えていると噂されていますね」

レイリア。

「そうだな。相次ぐ不況とテロの活発化。政治も力をなくし、軍部が力を持ちつつあるとのことらしい」

「いずれクーデターが起こるかも知れませんか」

「そのための会合なのだろう。邪推はしたくないがな」

「では、私はこれで失礼するよ。今日はアグリゲットがいる。中隊の指令は彼に任せているから報告はあいつにしてくれ」

「へえ、副部隊長が。部隊長が不在で、副部隊長がいるとなると珍しいな」

棋理

「僕もそう思うよ、朱鷺守分隊長。では」

「お疲れ様です。南雲部隊長」

最後ばかりは敬礼を交わし、南雲はカフェを後にした。

「さて、俺たちはせつかくの暇なひとときを堪能するか。飲み物の追加がいる奴は？」

棋理がそういったところで、機動中隊全域にアラームが響き渡った。

給仕を呼ぼうとして手を挙げた棋理はその姿のまま固まり、続くアナウンスに耳を向けた。

『告げる、こちら副部隊長アグリゲット・シェイカー。現在、ミッド・チルダ地上にて非常警戒態勢が発令された。戦闘分隊各隊は大至急戦闘準備を。陸士部隊より応援要請だ。直ちに輸送機へ向かえ。繰り返す、現在——』

非常警戒態勢、応援要請。その二つの言葉に反応し、そこにいた全員が通信機を開くことなく立ち上がり、急いでカフェを後にする。「支払いはこれで頼む」

席から立ち上がった棋理は怒鳴ると、財布代わりのウォレットカードをレジスター向かって、まるでカードマジックのように放り投げた。

レジスターを任されていた店員は手慣れた手つきで数メートルの距離を飛来するカードを受け取ると、手早くそれを機械に通し勘定を済ませた。

「ご利用ありがとうございます。またのご来店を！！それと御武運を祈ります」

走り去ろうとする棋理に向かって、渡された時と同じようにそれを投げ返すと、その店員は見事な直立で敬礼を投げかけた。

「ありがとうよー！！」

走りながらそれを空中で受け取り、ポケットにしまい込んだ棋理はデバイス保管庫に疾走する部下達を追いかけた。
（レイリアはああいったが、やっぱり俺はこの感触が一番いいな）
棋理はこみ上げてくる喜びにも似た爽快感を内に秘め、レイリアの後ろを走った。

保管庫より自分のデバイスを受け取り、広い屋上のヘリポートにたどり着いた棋理達を、なのはとエルンストは既にそれに乗り込んで待機中だった。

保管庫横の作業室で業務中だったエルンストはもちろんのことだが、どうしてなのはがこんなに早く到着できているのか疑問だった。ヴィータはヘリに乗り込む前に聞いてみた。

「自主訓練でデバイスを持ち出してたからね」

と答えるなのはにヴィータは納得した様子で頷くが、

「自主練ならあたしも呼べよ」

と一言言っただけに乗り込んだ。

「おそろいですね。では、発進します」

機動中隊に配備された二つの輸送機の片方、なのは、ヴィータ、エルンストが乗り込んだ小型のヘリはヴィータが乗り込みシートベルトを締めたことを見て、そのまま命令を待たずに飛び立った。

徐々に小さくなるヘリポートを見下ろすと、A分隊とB分隊を運ぶ大型輸送機はまだ地上待機を続けている。

「どうやら、エリオン二士とアリシア二士がいま遠くに行っているようです」

D分隊は他の分隊とは任務を異にする状況が多らしく、彼らは別のヘリで輸送されることとなるのだが、今回ばかりは同じ輸送機でも良かったのではないか。エルンストはそう思ったが、副部隊長にも何か思惑があるのだろうと考え今回は黙っておくこととした。

『D分隊、発進したようだ。A分隊とB分隊も聞いて欲しい。これより任務の概要を説明する』

彼らが乗り込むヘリの中央にアグリゲットを移したモニターが投影された。

『今より二時間前、ミッドチルダ住宅街のビルの一室に反政府同盟を名乗る武装テロ集団が押し入った。当時はそこにいたのは主婦一人だけだったが、連中はそれを人質にとり籠城。これだけのことから本来なら公安が警察武装隊が解決するはずのことだが、彼らは通常では考えられない装備を持っていたらしい』

エルンストを始め質問する人間はいない。アグリゲットは続けた。『その詳細ははまだ情報が入っていない。どういうわけか公安も警察武装隊もそれを寄越そうとはしない。おそらく、管轄権に関するプライドのようなものがあると推測できるが、愚かなことだ。ともあれ、彼らは強力な武器、軍用クラスのデバイスで武装し、さらには広域監視装置による全周警戒を実施中だ。公安の通信を傍受したところによると、連中はそこより半径2.7kmの範囲内の全ての情報を逐一取得している様子ようで、公安狙撃隊や警察狙撃手も近づけない状態とある。』

2.7km。確かに、通常の警察狙撃手では荷が重いなとエルンストは感じた。ならば、現在はその範囲外から監視をしているだけか。

『現在、公安のネゴシエーターが交渉を続行中だが、平行線のようにだ』

テロリストなど即射殺してしまえばいい、そう考えるエルンストだが、舞台は街のど真ん中、特に人の目が多い住宅街と来ているところそれも難しいかと考え直す。ある意味敵も然る者だ。それを見越してそこに決めたというわけか。

エルンストは「ストライク・ビューワー」の機能呼び起こし、情報収集を開始した。

『よって、諸君等の任務は主に公安と警察武装隊のアシストという

こととなる。攻撃許可はまだ出されていない。詳しい作戦内容は先に現地入りした第三四陸士武装大隊の白河三等陸佐へと依託されることとなる。これ以降は彼の命令に従え。以上、質問は？」

攻撃許可は無しか。ならば、俺たちの出る幕はないな。エルンストは投入されてもなお主立った行動のできないこの任務をじれったく思った。悠長なことばかりを言うと感じた。

基本的に彼はそれまで、任務を与えられた時からそのターゲットの殺人許可が自動的に下される事が当たり前だったため、この作戦はストレスのたまるものになるだろうと予感した。

『ああ、言い忘れていた。エルンスト・カーネル一等陸士』

突然自分の名前が呼ばれ、エルンストは返事を返した。

『君は本体とは別に、公安より協力要請が来ている。私が優秀な観測士^{ボッター}がいると漏らしてしまったためだ。よって、君は三四小隊とは合流せずそのままヘリに残り別命を待て。以上、行動開始』

通信機の間こうから聞こえるA分隊とB分隊の声に会わせ、D分隊の面々も「了解」と敬礼を返し、通信は終了した。

「公安も人手不足なんだね」

なのははシートに腰を下ろしながら【レイジング・ハート】を起動させ、作戦前の微調整に入っていた。

「だらうな、何処でも同じだろう」

グイータは攻撃命令が出されていない事を聞いてから殆どアグリゲットの言葉を聞いていなかった様子で、シートにどっかりと腰を下ろしてあくびをしていた。

「それにしても、南雲部隊長が不在の時に任務が入るところやって別部隊の指揮にはいるってことか。少し前とは違うんだね」

「そうだなー、前はどんなときもはやてが前に出てきてたからなあ」それから二人は前の舞台ならどうだったかとか、これから行く部隊の白河三等陸佐とはどういう人物か、立てこもったテロ集団の目的は何かなど雑談を交わしていた。

エルンストはその話題には入らず、【ストライク・ビューワー】

が拾ってきたデータから現在の状況を洗い直す。

（半径2・7kmの範囲内は敵の監視下にある。だが、プレスヘリが飛び回り連中の姿は大写しか）

そのプレスヘリの情報もないかと検索し、彼は現在実況生中継で映し出された住宅のベランダの状況を拾い出した。

その映像には、二人の男が一般市民と思われる女性を囲んでそれに手持ちの武器を突きつける様子が映し出されていた。ネゴシエーターの姿はない。おそらく、別室でもう一人と交渉中なのだろう。情報によるとテロリストは三人。どれもが軍用級の攻撃型デバイスを所持しており、今より一時間半前に向かいのビルに潜んでいた武装隊の一人が攻撃を受けているらしい。

攻撃を受けた隊員は重傷だったらしいが命の危険性はなかったらしい。しかし、彼はかなり嚴重な力モフラージュを施していたらしく、本来なら潜伏を本業とするテロ対策部隊の構成員のようだった。そんな彼があっけなく発見され、あまつさえ反撃さえも許さないほどの攻撃を受けた。

確かにこれでは、公安や武装警察では荷が重い事だとエルンストは感じた。

しかし、これでは例え自分たちが投入されたところで何らかの有効な手段を講じることが出来るのか。相手は人質を取っている。それを何とかしないかぎり、解決の手だてはないとエルンストは結論づけた。

ヘリは、高いビルの陰に隠れるように巡航し、大部隊の指揮車両の上空に停滞した。

「それじゃ、行ってくるね」

「そつちもしつかりな」

タッチダウン

着陸もままならないままなのはとヴィータはそう告げるとデバイスをセットアップし、ヘリのキャノピーを押し開き、そのまま自力着陸を敢行する様子だった。

「お二人も」

エルンストはそういつて敬礼を送り、二人の姿は陸上へと消えていった。

二人を下ろしたヘリは、先程は言った命令に従い、街を大きく迂回しその反対側のビル群へと移動した。

そのビルの頂上。エルンストはそこに下りて監視を開始せよと命令を受けている。それはアグリゲットではなく、公安の現場を指揮する捜査官の一人からだった。

エルンストは、シートベルトを外し【コールド・アイズ】をセツティングしそのままヘリから地上に降りた。

飛行適正の低いエルンストであっても一〇メートル足らずの高さを自力着陸する程度のことなら問題なく行える。

「それじゃ、エルンスト一士。がんばれよ」

ヘリはそう最後のメッセージを残し、天高く上っていきビルの樹海を器用に駆け抜けていき、どこかへ消えていった。

「がんばると言っても、俺は監視だけしかやらないがな」

エルンストはそう呟くと、念のため【クリミナル・エア】をカービン銃のモードで起動し、それを脇にやると出現したバリアジャケットを周囲の環境の色彩に合わせ、【コールド・アイズ】を抱え込み、その場に伏せた。

【ストライク・ビューワー】は貪欲に周辺の空間を飛び回る情報をかき集め、黙々とそれを咀嚼し、そこから生まれ出た結果をエルンストに伝え続ける。

そんな中、エルンストを呼び出す声に彼は気がつき、耳を澄ませた。

「よう、ご苦労だな。公安に強力お疲れ様、カーネル一等陸士」
それは忘れることの出来ない声だった。

紛れもない、ベルディナ・アーク・ブルーネスが彼の回線に割り込みをかけてきたのだった。

第十三話 クリミナル・エア 前

朱鷺守達 A 分隊と B 分隊が現場に到着したのは、なのは達が下りたつて 10 分程経過した後だった。

「ようやくお出ましか。遅かったな朱鷺守」

ヴィータは【グラフ・アイゼン】を肩に背負いながらそんな彼らをにらみつけた。

無難にタッチダウンした輸送機から、朱鷺守棋理を筆頭に A 部隊の面々とシグナムをリーダーとした B 部隊の要員が顔を見せた。

「済まん、ヴィータ副隊長に高町隊長。双子のリーファを回収するの到手間取った」

そういう棋理の後ろには、少し頬をぬらしている双子、エリオンとリーファが居心地が悪そうに顔を見せている。

「まったく、自由待機にもかかわらず街に遊びに行くなど、気がゆるんでいる証拠だ」

怒りと呆れをない交ぜにした表情を浮かべるシグナムは、溜息をつきつつ二人を見下ろした。

「すみません」

「ごめんなさい」

輸送機の中でこっぴどく叱られたのだろうか、双子のリーファは姉弟ともに瞳に涙を携えていた。

普段は気が強く、何かと突っかかってくるような様子の姉アリシアも今では、理知的で冷静な弟エリオンの影にひっそりと隠れてしまっている。

その様子を気の毒に思いながらも、なのはは腰に片手を当て残ったほうの手で上を指差しながら、説教をした。

「いい、ふたりとも。もう散々いわれたかもしれないけど、私たちは人の命を預かる大切なお仕事をしてるんだよ。そんな人間が、こんな風じゃいけないことはわかってるよね」

二人はまるで母親にしかられた子供のようにしゅんとなって下を向いた。その瞳やしぐさは、双子らしくまったくよく似ている。

「今度からはこんなこと、みんなを困らせるような勝手な行動をしないって約束できる？」

なのはは、膝を折り二人に視線を合わせてじつと覗き込んだ。

「はい、約束します。なのはさん」

その言葉を聴き、なのははまたにつこりと笑うと二人の頭をなでた。

「さすが高町一尉。子供の扱いをよく心得ている」

はその様子を感じして眺めた。なにぶん家族を持たない彼は、ただ二人を罵倒することしかできなかったが、二人に反省を促しそして最後には優しく許すという彼女のやり方に母の様子を見た。

「話は一段楽したか？」

双子のリーファが普段の調子を取り戻したところで、彼らの後ろから一人の若い女性が姿を現した。

軍服をしっかりと身に着け、その階級章が示すものは彼が三等陸佐であることを表している。

これが、アグリゲット副部隊長が言っていた白河三等陸佐なのだろうと当たりをつけ、棋理以下機動中隊の全員は彼に敬礼を贈った。「君たちにとつては突然の話で困惑しているだろうが。これより君たち特務機動中隊の指揮は私が取ることとなった。私は白河楓三等陸佐だ、よろしく願います」

中隊面々の敬礼を受け、彼もゆっくりと敬礼を返した。

「よろしく願います、白河三等陸佐」

全員声をそろえ、白河が敬礼をといたところを見計らい彼らも額から腕を下ろした。

「と、いつでも私も何かとやるが多くてな。君たちの指揮を直接行つわけにもいかんだ。私の補佐を君たちにつけよう。直接的な指示は彼女からつけてくれほしい」

彼女はそういうと、後から付いてきた一人の女性を呼び出し紹介

をした。

「ティアナ・ランスター執務官だ。彼女は有能だ、おそらく君たちへの指示も問題なく執り行ってくれるだろう」

突然顔を合わせた懐かしい顔ぶれにティアナは驚いて目をぱちくりしながら、白河に対し敬礼をし、

「お任せください」

と言った。白河は、よし、といってティアナに手持ちの書類の束を渡した。

「では、後は任せる」

去っていく彼女に対して面々はもう一度敬礼を送り、ティアナはなのはの姿を見て破顔した。

「お久しぶりです、なのはさん。なんだか、変なところで会いましてね」

最後にあつたのが何時の頃だったか。機動六課を卒業した時よりも幾分大人びたティアナを見て、なのははかつての部下の成長を嬉しく思った。

「そうね。私もびっくりしたよティアナ。いえ、今はティアナ執務官殿とお呼びした方が良いですか？」

部下といってもそれは数年前のこと、今では立場を逆転させた彼女に対して同等の言葉遣いは拙いかと思い、なのはは言い直した。

「いいえ、前みたいにティアナって呼んでください。なのはさん。そっちのほうがしつくりきます」

ティアナがあこがれる魔導師の一人であるなのはに執務官と呼ばれた上に敬語で話されては照れるばかりで仕事に身が入らなくなっ
てしまいそうだと彼女は感じ、なのははに対してあくまで以前どおり
に接してほしいと頼んだ。

「ティアナがそれでいいなら私もそうするよ。実は、私もなんだか
変な感じがしちゃった」

穏やかな談笑をする二人に、朱鷺守は少しだけ居心地の悪そうな
ため息を付ついた。

「おふた方、積もる話はあるだろうが、それはこれが終わったあとにでもしてくれないかね」

いい加減放置しておけば、そのうち愛の語らいまでしてしまいそうだと二人を見て思った朱鷺守だったが、二人はそれにあわてて、エヘンと咳払いをして表情を正した。

「失礼しました。改めて自己紹介します。私はティアナ・ランスタ―執務官です。早速ですが、任務をお伝えします。特務機動中隊の方々は現在閉鎖中となっている区域に潜入し、その情報収集を行ってもらいたいとのことです」

ティアナはそういうとさらに詳細を彼らに告げた。

現在、閉鎖されている区域には武装集団による広域制圧が敷かれており、内部での活動は事実上不可能となっている。

彼らの宣言では、その領域内で魔術を検知した場合、無警告で攻撃を行い人質の命も保障しないとのことだった。

しかし、公安の調べによるとデバイスを顕現化させずにその領域で活動しても何の反応もないことから、彼らは魔術による情報収集のみを行っているということが判明している。

つまり、中隊に与えられた任務は一切の魔術を使用することなくその領域内を動き回り、犯人達の潜伏する周囲を捜査しろ、ということだった。

「なるほど、攻撃許可が出されない理由はそれがあつたのですね」
レイリアがそういつてうなづいた。

「だけど、あんなだけの広さを調べられるものっていったい何なの？」
先ほどまで泣きべそをかいていたアリシアはもう調子を取り戻したのか、いつもの口調でティアナを問い詰めた。

「それは、まだ明らかになっていませんが。情報部によると、広域型情報収集デバイスか、ロストロギア級違法物が使用されている可能性も否定できないとのことですよ」

ロストロギア。それは現在のミッドチルダが抱えている厄介ことの多くを占めるものだった。

かつて、この時空世界において並列するいくつかの文明がその発展しすぎた技術によって滅び去っていった。その際、進みすぎた技術によって構成された遺産が今でも世界には残されている。

古代遺失物と呼ばれるそれは、時空管理局内でもその対策を専門とする部署が大きな力を持っているということからその危険性は明らかだ。

実際、過去に起きた『時の庭園事件』や『闇の書事件』、『聖王のゆりかご事件』においてもその最たる原因はロストロギアにあるといっても過言ではない。時にはこの時空世界のありようを根底から覆すほどの力を持つもの。それが現在認識されているロストロギアの概要だった。

「厄介なことになった」

シグナムの重いつぶやきはそこにいる全員に暗い影を落とす。この中にいてロストロギアのためにその人生を狂わされたというものもけっして少なくはないのだ。

「まあ、ともあれ。俺達にとってはぬるい仕事だな」

その影を鼻息で吹き飛ばす勢いで、朱鷺守は言い放った。

「しかし、ロストロギアですよ？」

今となつてはアリシアの後ろでたたずむ双子のリーファの弟、エリオンはその理知的な表情を崩さずに朱鷺守に目を向けた。

「だからどうした？ 相手がロストロギアだろうが、次元災害だろうが。俺達のやることには変わりはないだろうが。それとも、怖気づいたか？ 栄えある機動中隊の隊員が、高々武装テロリストごときチンピラどもに」

朱鷺守はまるで挑発するような不敵な笑みでエリオンを見下ろした。

「エリイを馬鹿にしないで。怖気づくなんてあるわけないじゃないそうでしょ」

その視線からエリオンをかばうようにアリシアが朱鷺守の前に立ちふさがった。

「そうだね、アリス。僕達は、そのために練習を重ねてきたんだから」

「そうよ、あたしとエリイなら何だってできるわ」

アリシアはエリオンの手を硬く握り締めた。その手が震えていることにエリオンは気がついていたが、それを強く握り返すことで彼女に答えた。

（ロストログアなんか僕達は負けない）

エリオンはそう思い、その思いはアリシアにも伝わった。

（そうよ、もうパパとママみたいなことはさせないし起こさせない）
双子のリーファもまた、ロストログアに関連する時空犯罪で両親を失った者の中の二人だった。

そんな二人の様子に、中隊の面々も励まされた。小さな双子がこんなにも懸命になって理不尽と戦おうとしている、それなら自分達が立ち上がらなくてどうする。

シグナムはそんな二人の頭に手を置き、

「よくほえた。それこそ騎士の気概だ」

といって全員に目を向けた。

「お前達、準備は万端か？」

全員沈黙と首領をもつてそれに答えた。

「だったらいくぜ。いいか、絶対に魔術は使うな。デバイスのセツトアップも禁止する」

朱鷺守はそれを総括するように伝え、彼らを率いるように颯爽とビルの群れの中へと足を進めた。

その後を、シグナム、なのは、ヴィータ、双子のリーファが続きしんがりをレイリアが勤めた。

「だけど、エルンストのやつ大丈夫かしら。無茶してないといいけど」

アリシアはエリオンの手をまだ握りながら、遠いビル郡の空を見上げそう呟いた。

「心配かい？」

レイリアは後ろからアリシアに声をかけた。

「ば、馬鹿！ 違うわよ。何であたしがあいつなんかの心配をしなきゃなんないのよ！」

アリシアはエリオンの手を解いて、両腕を振り回すように抗議した。

「おっと、それは失礼。後であいつにもそういつておくよ」

面白い遊び道具を見つけたといわんばかりの笑みを浮かべるレイリアに、アリシアはさらに顔を真っ赤にした。

「だめに決まってるでしょ。何も言っちゃだめ」

すっかり狼狽してしまったアリシアを見て、普段は割りと冷静に激昂する姉がこんな風に自分を見失うことを珍しく感じたエリオンは、

「アリス、エルンストのことが気になるの？」

と静かに問いかけた。

その問いかけにアリシアはピタッと動きを止め、もじもじと背後で手をもむと、

「そ、そうよ。悪い？」

と可愛らしく口を尖らせた。

「ううん。悪くないよ。とてもいいことだと思う。だけど……、エルンストはやめておいたほうがいい」

「なんで!？」

「多分、あいつは。人間というものをそういう目では見ないと思うから」

「……………」

「ごめん。これは僕の言うことじゃなかったね」

アリシアはそのまま押し黙り、エリオンの前を足早に歩いた。

レイリアはそんなアリシアの様子を見て、エリオンの肩に手を置いた。

「今のはよくないな。真実であっても口にしないほうがいいこともある。後で謝っておくんだぞ」

「はい」

エリオンはそう短く答え、アリシアの背中をさびしそうに見ながら彼女の後を追った。

少し距離の離れたレイリアはその様子を見て、少しだけ肩を落とした。

「やれやれ。人間というのは面倒なものだね。いつそのこと、すべてがエルンストや僕みたいだったら感情的な衝突や憤りなんて起らないのに。だけど、それじゃああまりにも面白みはないか」

そして、彼も空を見上げ、一言だけ呟いた。

「ねえ、エルンスト。やっぱり、僕と君とでは見てるものが違うのかな。すんでいるところは同じのはずなのにね」

第十四話 クリミナル・エア 後

十数分前、アリシアとレイリアが見つめた空の向こう。

先ほどから代わり映えのしない状況を俯瞰し、エルンストは公安も警察も無能な連中ばかりかとため息をついた。

『お前の考えもわからなくないが、連中もあれで精一杯何とかしているつもりなんだろうよ』

そんな彼の意識に再びベルディナの声が割り込んでくる。

『あんた、まだいたのか。どうやら教導武官正というのも暇な役職なんだな』

エルンストはすでにベルディナに対して敬語を使っていなかった。『まあ、そうだな。ここところは一日の睡眠時間が30分程度になるぐらいには暇だな』

念話の向こう側でベルディナが笑っていることが手に取るようにわかった。

『で？ 暇人であるあんたがいったい俺に何のようだ？ あいにく俺は、ビルの上で寝そべってられるぐらいには忙しいんだがな』

エルンストのその皮肉交じりの言葉にベルディナは少しだけ口をつぐんだ。

（このまま消えてくれると助かるが）

エルンストはそう願うが、彼の気配が消える様子はない。どうせまた、やりたくもない厄介ごとを押し付けようとしているのだろうとエルンストは予想し、はたしてそれは現実となった。

『なあ、エルンスト。お前は、さっき、公安も警察も無能な連中だと思ったな』

『……………』

エルンストは答えるつもりはなかった。そんなことを明け透けに口にしない程度のモラルは彼にもあったし、何よりベルディナの言葉に肯定を返すのも癪だったからだ。

『だったら、お前ならどうする？』

それは挑戦なのだろうか、いや、単なる挑発なのかもしれない。そういうことで彼はエルンストを更なる深みへといざなおうとしている。彼にはそう思えた。

『それは、俺が考えることではない』

そう、彼の仕事は自ら考えることなく必要とされたことを一首違わず遂行することだ。余計なことは考えず、ただこの身を部品として考えることで彼はあらゆるミッションを執り行ってきた。

彼はそれを取り崩そうとする。

『安心しろ。これは秘匿暗号回線だ。たとえ傍受されても暗号解析には一宇宙時間並にかかる。だから、お前に聞いている。お前ならどうする？』

なぜ彼はそんなことを言うのだろうか。エルンストの技能を知るベルディナなら、エルンストがどのような答えを返すかなどすでにわかりきっていることだろうに。

『……長遠距離による一撃必殺。相手の支配領域が半径2700mなら、それを超える3000mの距離からの精密狙撃。それ以外に方法はない』

そう、それは無駄とも思える監視を行っている彼が気を抜けば考えていたことだった。

『なるほど。だが、3000mもの距離になるとそれを正確に気づかれずに行くことは不可能に近いな。それはどうする？』

エルンストは歯を食いしばり、犯人達の前に、おそらく後方の指令車両のなかでにやけ笑いを浮かべているベルディナを撃ち殺したくなった。

『3000m先のマントーゲット。それも限られた空間で動きが制限されている静体標的。俺なら、何とかなる』

言ってしまったエルンストは気がついた。その答えを出してほしかったのはベルディナだったのではない。ベルディナに言わされたのは単なる免罪にすぎない。

（これを言うことで、俺はその先の言葉を期待していたということだ）

高鳴る鼓動。冷えていく感情。エルンストはベルディナの言葉を待った。

『やりたいか？』

しかし、ベルディナは最後の最後まで必要とする答えを出そうとしない。最後の最後までエルンストの意思を搾り出そうとした。

『やらせてもらえるのなら』

ベルディナが薄笑いを浮かべる様子がエルンストにはわかった。

通信機からは沈黙の音しか聞こえないが、確かに彼はその先で笑っていた。それは、【ストライク・ビューワー】が拾い集めた情報なのか、エルンストの妄想なのか。

すでに意識の深い部分をそれと共有している彼にはその判断がつかなかった。

エルンストは【ストライク・ビューワー】とのリンクを少しだけ緩め、言葉を待った。

『必要なものをすべて言え。ものでも情報でも。狙撃に必要なものならすぐに用意しよう。優秀な観測士もすでに待機させてある』

ベルディナは許可を下した。

『何も知らない。ただ、あの周囲の状況を。これでもかというほどの詳細な情報がほしい。それだけだ』

『了解した。現在、現場周辺に君の同僚が潜伏中だ。連中は上の命令でその周囲のできる限りの詳細な情報を入手せよとの命令を受けそれを実行中だ。ちょうどいい、それをお前にやろう』

なるほど。特務機動中隊にこの件への介入が要請された時点でこれは既に予定済みだったというわけか。

今考えるとおかしい話だった。いくら人手の足りない公安であってもその人員補充を陸士部隊に頼るはずはないのだ。

ベルディナが何らかの裏工作をし、公安にそうさせるように手配をしたのであれば話は別だが。

エルンストは次第に笑いがこみ上げるのがわかった。なんとも言うこともない、しばらく本来の任務から離されて不満だったが、結局のところ便利に利用されるということは変わらないということだ。（ならば、この身は最大限利用される消耗品であろう。そうすることで、解決するものがあるなら。俺はそうあろう）

エルンストは、【コールド・アイズ】を傍らに置き、【ストライク・ビューワー】を搭載したライフル、【クリミナル・エア】を取り寄せ、それを狙撃銃へと変貌させる。

ようやく息を吹き返したと言わんばかりに【クリミナル・エア】はひととき大きな鼓動を発すると彼に忠実にその手へと滑り込んだ。【ストライク・キャンセラー】が暴食した情報は既にこの戦場ひとつを飲み込むほどに肥大化し、そこへさらに新たな情報が舞い込んでくる。

機動中隊がかき集めた情報だった。おそらく、彼らには自分達が集めた情報は公安や警察、陸士部隊に提供され、事件解決の手がかりにされることと思いい込まれているだろう。

しかし、その情報はエルンストへと送られ。彼はそれを用いて誰の目にも留まることなくすべてを解決させようとしている。

これもひとつのチーム戦か、とエルンストは皮肉に笑い、【ストライク・ビューワー】を覗き込んだ。

（風は安定しているが、ビル of 樹海によってそれぞれの位置で風向きと風速が微妙に違う。弾道予測）

エルンストは、【ストライク・ビューワー】にそう命じ、それは忠実にその命令を実行した。

さすがに情報量が多すぎるのか。その解析には普段の倍以上の0.5秒の時間を有した。

エルンストはまるで蛇の通り道のように曲がりくねり時に上下する軌跡を見て改めてターゲットとの距離の遠さを思い知った。

エルンストはその軌跡をたどり、視界をズームし、そこよりおよそ3120mの距離を隔てたビルへと視線を移した。

情報部の情報^{タレコミ}はあのと看とは違ひ正確のようだ。そこに映るものは、武器を片手に周囲を無駄なく警戒する男の姿とその脇に抱えられ、助けを求める悲鳴を上げる被害者の女性だった。

エルンストはできることなら目を閉じておいてほしいと思った。これから彼女が経験することは、おそらく傷になる。下手をすれば一生そのトラウマに悩まされることとなるかもしれない。

エルンストは心のうちでそれを詫び、残りの二人の男の姿を追った。

すぐに見つかった。

一人は部屋の中ほどでいすに腰掛け何かヤクのようなものをやっている。おそらく、ドラッグだとエルンストは思った。そして、最後の一人は入り口近くで通信機のようなものを耳に当て、手を振り回しながらしきりに怒鳴り声を上げているような様子だった。

ここからではその会話の内容までは聞こえないが、おそらく交渉が上手くいかないことに対する怒りなのだろう。

エルンストは、三人の位置を測ると、狙撃プランを立てた。まずは、人質のそばの男。そして、ドラッグをやっている男。最後に唯一武器を所持していなさそうに見える交渉の男。

エルンストは目を細め、スコープからのぞく方ではない側の目を閉じた。

視界は制限され、彼の目にはまるですぐそばに犯人達がいるような感覚に襲われる。

【ストライクビューワー】が描く軌跡は、さすがに射撃場で行ったものより動きが激しく感じた。それでも、今まで【コールド・アイズ】のみで行っていたものに対してその情報密度の違いから、不規則なゆれというものを感じられなかった。

後は、銃身自体の不規則性だが、特務機動中隊に就任している間、その中隊に贈られてくる最新のデバイスシステムから彼は【クリミナル・エア】のバージョンアップを行っていた。

誰もいない、誰も見ていないところでひそかにそれを実射してみ

たが、銃身から来る不規則性は以前のものに比べて5パーセントほど軽減されていたような感じを受けた。

『狙撃準備完了』

【クリミナル・エア】を構え、3分。彼はすべての手順をクリアし、その手の内にすべての命を包み込んだ。

『いつでも撃て』

ベルディナの声が、ニコルの声に重なる。

エルンストは呼吸を止め、鼓動を沈め、心音から来る振動を抑制し、脳内物質をコントロールし、ただ引き金を引き絞った。

発射された弾頭の軌跡が、【ストライク・ビューワー】が描き出した軌跡を見事にたどり、それは恐ろしい速度を持って目の前に浮かぶ男の眉間へと吸い込まれていった。

「エクスプロード」

その言葉には何の意味もなかったが、その男はその声に反応するかのように体を四散させ、中に蓄えられていたものをすべて外へとさらけ出した。

一瞬で気絶するそばの女性。

ドラッグを取り落とし、状況を確認できなくともその武器で女を狙う男。エルンストは予定通りそれを狙い、再び引き金を引いた。着弾。眉間より少し下にそれた弾頭は、それでも男のすべてを吹き飛ばすには十分なエネルギーを持っていた。

あと一人。

エルンストは通信機を投げ出し、床に伏せる男を狙い少し待った。よく見ると、その男だけは武器を取り上げようとせずただ震えて床にうずくまるだけだった。

男の両手が次第に天井へと挙げられる。

『敵、戦意喪失を確認。状況終了。直ちに武装隊の突入を』

エルンストはまだ意識のそばにいるベルディナの感覚に対してそう短く告げると、とめていた息を吹き返し、抑制していた心臓を開放した。

脳内物質がそれに呼応する形で一気に分泌され、彼は言い知れない恐れと戸惑い、そして圧倒的な快感を感じその場に伸びきった。

『犯人の捕縛に成功。よくやったな。見事だ』

ベルディナの通信は遮断された。あつさりしたものだ。

こつちが息を切らしていることもかまわず彼はさっさとどこかへ行ってしまった。

遠くでヘリが一機飛び上がり、陸上本部へと向かっていくのが見えた。おそらく、あれに乗っているのだろう。

一瞬狙撃してやろうかと思ったが、緊張が切れて神経にノイズが走るこの体ではこれ以上の射撃は不可能だと感じやめた。

やはり、3000mは遠い。エルンストはそう実感し、ゆっくりと立ち上がった。

そんな彼の通信機にひときわ高いノイズが入り、そこから何者かの声が響き渡った。

『だから、俺は反対してたんだ、畜生。レイザとホムを殺しやがって。これをつかったら絶対上手くいくって話じゃなかったのかよ』

それは、つかまった犯人の声だった。レイザとホム。そうかそれが自分が殺した相手の名前か、とエルンストは思うと、放りだしてあった通信機を手に取るとその電源を切ろうと手を伸ばした。

『ロストログアなんてしらねえ、入手場所なんてしらねえ。俺は渡されただけだ、3、4日前にリカルド・マックフォートってやつから渡されただけんだ！』

通信機はノイズとともに遮断された。

エルンストは、ノイズしか残らないそれを握り締めしばし呆然としてそれを見つめていた。

「リカルド・マックフォートだと？ 馬鹿な、あいつは俺が、俺達が消したはずだ」

（いったい何がどうなっている）

遠くから聞こえる迎えのヘリの音を遠くに聞き、エルンストは何か大きなことが渦巻いていることを感じていた。

役割を終え、自主的に腕輪に戻った【クリミナル・エア】が己のコンディションを診断するべく不規則な明滅を繰り返していた。

第十四話 クリミナル・エア 後（後書き）

これで一段落です。アニメで言えばクール終了とったところですか。

出来ることなら、その慣例に従い十三話で区切りたかったのですが、力量不足でした。

次こそは二十六話で区切れるようがんばりたいと思います。

第十五話 届かぬ想い

帰投するヘリの中で、再びモニターに顔を見せた機動中隊の副部隊長、アグリゲット・シェイカーは、今回の作戦の報告を行っていた。

「公安の狙撃部隊が事態の收拾を行い、結果的に立て籠もり犯二名の命を犠牲にすることで本件は収束した。諸君等にとってはいささか納得のいかないところもあっただろうが、君たちの収集した情報は問題なく本件の解決に貢献したと言える。よくやったと言っておく。連中の所持していたロストログアは既に古代遺物管理部に送られ現在解析中だ。生き残った立て籠もり犯の一人も現在問題なく司法裁判所へと送られている。まあ、おそらく終身刑は確実だろう。報告は以上、全員直ちに帰投せよ。隊長達は本日中に報告書を提出のこと」

報告書と聞いて朱鷺守が嫌な顔を浮かべたのではないかとエルンストは予想したが、情報収集はやめておいた。

（それにしても、公安が解決したか。情報の偽造か、いや、隠匿と言うべきだな）

しかし、公安はけっして嘘は言っていないとエルンストは知っていた。あの二人、レイザとホムと言った二人を殺した時エルンストは確かに（名目上とはいえ）公安の所属であったし、機動中隊が収集した現場付近の情報がなければ彼の狙撃は失敗していた可能性も否定できないのだ。

機動中隊に復帰したエルンストに同乗しているのはとヴィータは、彼が何をしていたのかを聞き出そうとしていた。

「ただビルの上に這い蹲って、無駄な情報を収集していただけです。気がついたら事件が解決してむしろ困惑しているところですよ」彼はそういつて話をはぐらかせた。公安は嘘を言っていないが、エルンストは明らかな嘘をついていた。

もしも、なのはとヴィータがエルンストの射撃スキルを知らないままだったのなら、それであっさりと騙されていたことだろうが、彼女たちは彼の嘘を何となく見破っていた。

怪訝な様子でエルンストを見る二人の視線に、エルンストはこの二人はおそらく知っているのだとほぼ確信に近い形で感じていた。

しかし、エルンストは思う。別に隠しているわけではないと。

ただ、機動中隊の性質上、自分のようなワンマンオペレーションに特化したスキルはむしろ余計だと感じているだけに過ぎない。事実、これまで中隊で行ってきた模擬戦においても、同乗する二人の陰に隠れて何度か長距離における狙撃を行ったこともあるのだ。

そして、これはエルンストが独自に考えていることなのだが、機動中隊には情報に特化した人員が少なすぎる。確かに戦闘能力やデバース、魔術運用に長けるものは数多く、その全員が通常の陸士部隊に比べればその練度がずば抜けている事も認められる。

しかし、それだけではダメなのだ。戦場を支配するものは情報であり、情報を支配するものは戦場を支配する。故に、幾ら強力な戦闘力を持つ部隊であってもその情報を適切に統括できる人間がいなければただ勢いのあるだけの部隊に成り下がってしまう危険をはらむ。

エルンストは、自らその情報戦の全てを受け持つことで部隊戦力の向上に貢献しようとしたのだが、それが返って同じチームに所属する二人に疑惑を抱かせているという結果につながってしまったている。

アグリゲットの通信が終了しても、作戦の成功を祝うことなくヘリの中は重苦しい沈黙が支配する。なのはとヴィータの前方のシートに腰を下ろすエルンストは自身の背中中二人の視線が集中している事を自覚していた。

しかし、どうすることも出来ない。ベルディナ・アーク・ブルーンズが解析に宇宙時間もかかるような高強度の暗号通信を使用したからには、あの作戦はトップシークレットに属する事なのだろう。

残念ながら、エルンストにはそれを明かすだけの権限はなかった。

「犯人を仕留めたのって、いったい誰なんだろうね」

なのはがポツンと漏らした言葉にエルンストは何の反応も返さなかった。

「さあな、たぶん腕のいい狙撃手だったんだろうよ。それこそ、3000m以上ねらえる奴がな」

それに答えるヴィータはなのはに目を向けず、鋭い視線をエルンストの背中に浴びせかけた。

「ねえ、エルンスト君。君は知らないかな？ 監視していた時に何か見えなかった？」

高町一尉にしては意地の悪い質問をする。エルンストはそう考え、問いかけられたからには何か答えなければならなかった。

「俺にはなにも。いきなり犯人がはじけ飛んだのが見えただけで、それ以外には特に目に付くものはありませんでした」

嘘をつくことにエルンストは何の抵抗も良心の呵責も感じなかった。おそらくなのはもヴィータも、自分がこう答えるだろうと予測は付いていただろうし、自分はただその期待にこたえるだけだと割り切るばかりだ。

しかし、彼は自覚していないが彼の脳裏に響くなにやらノイズのようなものが嘘を重ねる度に酷くなっていく。

向こうの輸送機はどんな様子なのだろうか。エルンストは少しだけ気になった。

朱鷺守はおそらく、ふてくされて煙草を吹かしているか、レイリアかシグナムかを捕まえて愚痴を垂らしていることだろう。

エリオンはおそらく、アリシアを押さえるのに手一杯になっているに違いない。

それはそれで賑やかなことだろうと思い、のぞき窓から見える前方を飛翔する輸送機にエルンストは目をやった。

沈黙に沈む輸送ヘリの中で、最後に唯一操縦士が特務機動中隊本部に到着を告げる。

エルンストは、着陸し開かれたキャノピーから身を躍らせ、段差タッチダウンになっているタラップを下るなのはとヴィータに手を貸した。

タイトなスカートを動きづらそうにしていたなのははその手を取り、無言のまま彼とすれ違う。

そして、そのすれ違いざま、小声でエルンストに一言だけ告げた。
「エルンスト・カーネル一等陸士。本日、業務終了後、私の私室に出頭しなさい。そろそろ、話をしてもらいます」

有無を言わさない低い声で吐き出されたその言葉に、エルンストはいよいよ覚悟を決めるべきかと考え、

「了解」

と答えた。

なのはとヴィータはそのままエルンストを振り返ることなく、ヘリのローターの回転で巻き上がる風に髪を押さえつつ屋上のヘリポートから姿を消した。

その後、機動中隊の面々は自由待機を解除され、それぞれ作戦に関する報告書の提出を命じられた。

エルンストは、どうやって書面をでっち上げるかを考えあぐねた結果、当たり障りのない表現を羅列しただけのものをアグリゲットに提出した。

アグリゲットはそれを軽く目を通し、

「まあ、いいだろう」

といってそれを受け取り、部隊長代理のサインをそれに記した上で提出された記録素子データ・ディスクを分厚いファイルに挟み込んだ。

かなり校正を喰らうだろうと覚悟していたエルンストはかなり拍子抜けした様子でそれを見守ったが、アグリゲットは平然とした表情で彼の退出を許可した。

「あ、エルンスト。あんたもう終わり？」

とりあえず、荷物を引き払おうとして事務室に戻った彼をまだコンソールの前で文面と向き合っていたアリシアが迎えた。

「ああ」

エルンストは簡潔に答えると、それまで作業をしていたコンソールから自身のデータ・ディスクを抜き取り、それを内ポケットにしまった。

「いいわね、あんたは。結局やってたの監視だけなんでしょ？ あたし等は魔法も使えなくて大変だったってのに」

アリシアはそう憎まれ口を叩くと、緊張が切れた様子であくびがてら身体を伸ばした。

「そうだな、楽な仕事だった」

アリシアがそういうのはもっともな話だとして、エルンストは特に腹も立てずにそういうが、アリシアにはそれが不満だったようだ。「いーわねー、あんたは！ いつも、いつも、いつも後ろからあたし等を眺めてるだけで。たまには前線に出る人間のくろうつて奴を知ったらどうなの？ あんたはいつも無愛想で、あたしらの気持ちなんてなにも理解できないでしょうね。まったく、何であんたみたいな奴がここに呼ばれたのかしら。教導隊から出向？ 馬鹿みたい、教導隊出身だからってエリート気取りってわけ？ 正直反吐が出るわ」

アリシアは止められなかった。言いたくもないことが次々と口からあふれ出して収拾が付かなくなる。

事務室にはアリシアとエルンストの二人しかいないという状況がそれを加速させるばかりだった。

「ああ、お前の言うとおりだな。正直、俺もヘドが出る……高町一尉に呼ばれているのでな、俺は先に失礼する」

エルンストはそんな彼女の罵倒もまったく意に介する様子を見せず、そのまま入り口へと向かい姿を消した。

ドアの閉まる音が響き、エルンストの姿が完全になくなった。

ただ一人残されたアリシアは、そのままコンソールに突っ伏して、

何かが弾けるように泣き出した。

「アリス……」

いつの間にか双子の弟、エリオンが彼女の背後に立っていた。

「来ないで、エリイ。お願いだから」

アリシアはそんなエリオンさえも拒絶してしまうが、エリオンはそれを無視して、ただ優しく彼女の背中をなでつける。

「ごめんね、アリス。アリスが、そんなにあいつを想ってたなんて気がつかなかった。だから、ごめんね、あのときあんな事を言って」

エリオンはあの事件の後、アリシアと話すタイミングを取り逃していた。報告書作成の時も例によってエリオンはアリシアの側で作業をしていたが、結局二人はなにも話さず、先に作成が終わったエリオンはいたたまれなくなりすぐに部屋を後にしたのだった。

いつもなら、不器用なアリシアはエリオンの助けを借りて報告書を作っていたのだが、その日ばかりはその助力を得られずこんな時間までかかってしまった。

それでも、最後の最後にエルンストと二人きりになれる事が出来たのだが、アリシアはそのチャンスをフイにってしまった。

「う……う……う……、うわああああー……ん」

アリシアは、エリオンの胸に抱かれ、何年かぶりになる慟哭を上げた。

業務終了後、自分の部屋へ出頭せよ。そうだったのは結局無言で、報告書を仕上げると他の隊員の見守る中無言で立ち去っていた。

そして、エルンストは一度自室に引き上げ、出頭準備を整えてからなのはの私室の前に立っていた。

少しだけ緊張する。エルンストは、一度だけ息を吸い、吐き出すとインターフォンを一度だけならした。

「入って」

簡素なその声は、いい知れない決意を醸しだし、エルンストはいよいよ覚悟を胸の内に収め扉を開いた。

「エルンスト・カーネル一等陸士、到着いたしました」

普段なら敬礼はいいと言って笑顔を浮かべる彼女も、この時ばかりを冷たい瞳で彼を見つめるだけだった。

「ご苦勞様。いきなり呼び出してごめん。ヴィータちゃんもすぐ来るから少しだけ待って」

なのははそれだけ告げると、チェアを回して彼に背中を向けた。

「は！」

エルンストはそのまま安めの姿勢で立ち、もう一人の来客を待った。

暫くも待たないうちにヴィータが姿を見せ、ベッドの側の椅子に腰を下ろし、足と腕を組んでエルンストをにらみつけた。

「さて、カーネル一士。ここに呼ばれた理由はもう分かってるよね」
なのははヴィータを一瞥だけしてから立ち上がり、鋭い目線でエルンストをにらみつけた。

「いいえ」

エルンストは、今し方なのはが部屋の監視を溶いたことに気がついていて。つまりここで話されることは口外無用、なのはとヴィータはエルンストが何を言ってもそれを絶対に他人に漏らしたりはしないと、暗に確約していた。

その二人は信用できる。しかし、エルンストの腹は決まっていた。
「あたし達は、お前が単なる観測士スポッターじゃねえことを知ってる。おそらく、超一流の狙撃手スナイパーだってこともな。そして、あたし等はあの事件はお前が解決したと推測した。それに関しては」

ヴィータも黙ってはいなかった。それまで、彼女たちが胸に秘めついにここまで至るまで打ち明けられなかったことを口に出している。
「……………何も言うことはありません……………」

それでもエルンストは話すわけにはいかなかった。おそらく、話

してしまえば二人を巻き込むこととなる。いや、既に巻き込まれているのであろうと推測できるが、それでもその最低限を守りたかった。

おそらく、それはエゴなのだろう。しかし、彼女たちの腕が自分のように血に汚れる姿を彼はどうしても見たくはなかった。

「ふざけん……」

ヴィータは激昂して、側の机を叩きそうになった。

「ふざけないで!!!」

しかし、それはなのはの叫びに打ち消され、ヴィータも鉄槌を喰らったかのようにそれに目を向けた。

「あなたはそれでいいかもしれない！　だけど、私たちは、それを見ているしかできない私たちはどうしてそれに納得しろっていうの！？　私はあなたを仲間だっと思ってる。みんなはどういうか分からないけど、あなたが後ろにいてくれると私はとても自由に戦えるけど、あなたは私たちを信頼してくれない、仲間だと思ってくれない。これ以上、私はどうすればいいって言ふのよあ」

涙混じりに叫ぶ彼女はおそらく、今までその努力によって多くの信頼と友情を得ることが出来たのだろう。そして、自分のその行動は間違っていないかったと。

エルンストもそれは確かに尊いことだと理解していた。

「俺を仲間だと思っただけのことには感謝しています。しかし、もうこれ以上俺には関わらない方がいい。俺があなた方に運び込むものは破滅のみ。それを背負うのは消耗品である俺だけで十分だ」

エルンストはかたくなだった。全てを背負う覚悟はとくに出来ている。だから、これ以上自分を揺さぶることは止めて欲しい。

「あたし等は！　お前だけに背負わせたくないんだよ！　あたしもお前のことは……まあ、認めたくねえけど、頼りにしてるし仲間だっと思ってる。だから、お前だけで背負うなんて止める」

「そうだよ、エルンスト君。自分が消耗品だなんて言うのなんて止

めて。そうやっていたずらに消費される命なんてあつていいわけない！」

ヴィータとなのはは冷静さを欠いているようにエルンストは思えた。だからこそ響く。決意したはずのことが揺らぎそうになる。

だから、エルンストは。最後まで貫き通すこととした。辛い、彼を持つても辛い演技をしなくてはならなかった。

「あなた方は本当にそう思っておられるのですか？」

エルンストのそのもの言いに、二人は「えっ？」と言って面を上げた。

エルンストの表情には、何の感情も浮かべられていない、まるで氷の能面をかぶせたかのような表情が浮かべられており、二人は背筋を振るわせた。

「この世界にいたずらに消費される命などあつてはならない。しかし、俺は殺した。この年になるまでの18年間で、俺は既に60名を超える命を奪った。そうして、守られるものがあつた」

エルンストは二人の表情を順番に眺めた。その表情に浮かべられたものは何だったのだろうか。

恐れ、怒り、異形を見るような表情。それらが交ぜになつて、なのはとヴィータはただ口を嚙むしかなかった。

「必要なですよ。俺たちのように部品として最大限有効活用される人間が、俺はその一つでしかない。多くある部品の中の一つではない。あなた方がのびのびと空を駆けめぐっている間にそういうモノは多く消費されていつている。数週間前に死んだ俺の相棒のように。だが、それはただそれだけのことなんだ。そして、俺もいつかはその中の一人になる。ただ、それだけのことなんだ」

なのはとヴィータは何も言えなかった。多く散つていった命。自分たちは自分が思うものの多くは守ることが出来てきたと思う。親友、仲間、愛する人、家族。失ったものも多かった、それでもその多くは取り返せたと思う。

しかし、エルンストは。自分たちよりも遙かに年下である彼は、

どうしようもないところで多くのものを奪い去られてきていた。そして、いつか自分自身もその中の一つとなることを受け入れている。「どうして、どうして君は……」

なのはの頬に一筋の雫が下りた。

「そうあることを、自分で決めたからです。そうあることで果たされることがある。それならば自分の命にも価値がある。そう思えたからです」

エルンストは答えた。自分の命は失われることで価値があると。そして、それを自分で決めた。

二人はなにも答えられなくなった。無理だ、失うことを当たり前として生きてきた彼に、彼女たちが何を言ってもその決意を揺るがすことが出来ないと確信してしまった。

話は終わった。

沈黙が支配するままの部屋を見回し、エルンストはそのまま何も言わず、ただ一度だけ敬礼を二人に送り部屋を後にした。

しかし、エルンストは感じていた。

あれだけのことを言う気になったということは、自分では自覚していない部分である二人を相当に信頼しているということだなと。

それは、不思議と悪い気がしなかった。

第十六話 ベルディナ・アーク・ブルーネス

そして、終わりの日はやってきた。

あれ以来、全てと遺恨を残したエルンストは、そのままただながされるままに状況を見守っていた。

おそらく、近いうちにベルディナ・アーク・ブルーネスから何らかのアクションがあるだろうと予想し、次に飛ばされる場所はどこかを想像する毎日だった。

しかし、彼の元にやってきたのは時空管理局情報部第三課、主に時空管理局内の情報セキュリティと違反犯罪者の摘発を行うセクションの人間だった。

とまどいと反発の起こる中、全員の目の前でエルンストが告げられた罪状は、独断専行、作戦無視、報告義務違反といったものだった。

（国家反逆罪に問われないだけましか）

と淡泊な感想を思い浮かべる彼は、それに反発するアリシアやなのは、ヴィータをなだめすかし、

「とつとと連れて行ってくれ。こいつ等が暴れると怖いぞ」

といって大人しく縛に付いた。

おそらく、これはベルディナ・アーク・ブルーネスの差し金ではないかと密かに思ったエルンストは、事態が思わぬ方向、ベルディナ・アーク・ブルーネスでも想像仕切れなかった方向へと向かいつつあるのではないかと推測した。

時空管理局司法裁判所の地下施設の最深部。特A級の犯罪者を幽閉するための最深度地下施設へと護送されたエルンストは、その施設の厳重さを見て、

（これでは俺でも抜け出すのは難しいか）

と思い至った。

後から聞かされた話だが、犯罪者を出した特務機動中隊はその後、無期の活動停止処分を受け、殆ど組織解体に近い状態にまで追いやられたと言っらしい。

牢獄で出される粗末な食事を口にしつつ。こんなモノならいっそのこと点滴か何かを注入される方がましだと思っほだに彼は落ち着いていた。

奴は必ず来る、エルンストはそう確信していた。

そして、その日は彼が幽閉されて4日目に訪れた。

特にやることもなく、裁判のための準備も行われることもなく、エルンストはゆったりとした心持ちで粗末なベッドに横になって過ごしていた。

「よう、なかなか優雅な生活じゃねえか」

目を閉じていた彼はそれに気がついていたが、あえて先方が話しかけるのを待っていた。

「思ったより早かったな。やっぱり、あんた暇なんだろう？」

エルンストは目を開かず、そのまま横になって彼を迎えた。

「日もすがらグータラと寝てるだけの奴よりは忙しいさ。といっても、俺もお前と同じようなモンだがな」

「で？ 結局あんたは俺に何がさせたかったんだ？ 結局、リカルド・マックフォートってのはあんただったんだろう？ わざわざ影武者を立てるなんてあんたも念が入ってるな」

エルンストはこの四日間、自分が殺したりリカルド・マックフォートに関して考えていた。そして、至った答えが、リカルド・マックフォートを偽装して裏から全てを操っっていたのが彼だといっ考察だった。

いや、リカルド・マックフォートは本来彼の呼び名なのかも知れないといっ考えもあり、彼はあえてそう呼んだ。

そして、今回。それが拙い方向で明るみに出て、それに荷担した罪でエルンストは逮捕。先程ベルディナが言ったように彼もそいっう経緯で逮捕されそうになっただろう。

何よりも、これで事件は解決か。彼がここに来たと言うことは、彼もいい加減諦めたと言うことだろう。

「お前はでかい間違いを犯してるな。俺がリカルド・マックフォートだって、あいつは死んだ。お前達が殺したんだろうが」

ベルデイナは椅子のない床に腰を下ろすと、そのまま懷を探り煙草を取り出し火をつけた。

「だが、俺たちが殺した相手がリカルド本人だったという証拠はあるのか？　そして、お前がリカルドではないという証拠は？」

「ない。だが、確実に言えるのはリカルドもまた巻き込まれた人間の中の一人だってことだ。まあ、巻き込んだのは紛れもない俺自身なんだがな。それに奴の悪行は明かで、死ぬだけの理由もあった」

「それを信じると？　いい加減聞かせてくれてもいいのではないか？　あんたの目的は何だ？　俺たちを、高町一尉やヴィータ二尉を巻き込んだ理由は何だ？」

エルンストはサービスだと言って放り込まれた葉巻を受け取り、彼から火をもらってそれを吹かし始めた。

「理由か……話すと長くなるな」

「ということは、話してくれる気はあるというわけだな。条件は？」
「話が早くて助かる。ともあれ、俺も今は時間のない身分で、操れる手駒も殆ど奪われてしまった。武装隊を首になっち待ったからな」

「そりゃ、ご愁傷様。で、条件は？」

「俺と一緒に来い。この件を画策しやがったクソ野郎をやりに行く。お前の力が必要だ」

「断れば？」

「このまま一生ここから出られない」
「なるほど、ならば悩んでる暇もないか」

エルンストはバニラの風味を醸し出す煙を天井に吹きかけ、それまでのことを思いやった。死んだニコル、信用をくれたなのは、自分を仲間だと言ったヴィータ、憎まれ口を叩くアリシア、それを守ろうとするエリオン、何かと気をかけるレイリアと朱鷺守。その他

諸々。

「……行こう……俺をここから出してくれ」

それらにせめての義理を果たすには全ての災厄をこの手で打ち抜くことだと思い至り、エルンストはそれほど時間をかけずそれを決めた。

そして彼は踏み出した。暗黒に満ちる世界から、真実の陰りを見せる影の世界へ。

彼は、ようやくその一步を踏み出すことが出来た。

第十七話 大空の乙女

エルンストはベルディナから行き先を聞いていなかったが、とにかくミッドチルダを抜け出す予定のようだった。

「それにしても、裁判所の最深度地下から何の障害もなく抜け出せたのは驚きだった。あんた何かしたのか？」

ミッドチルダ都市部の環状線に座りながら、エルンストは目の前で車窓を移りゆく景色に目をはせるベルディナにそう聞いた。

「別に。ちよつと警備の奴らを眠らせて、監視装置にちよつとした細工をしただけだ。たぶん、準備さえすればおまえでもできる程度のことだぜ」

さすがに電車内でたばこを吸うわけにはいかないらしく、彼はさつきから懷に手を忍ばせながらいらした様子で、足をこつこつと鳴らした。

これからどこに向かおうというのか。環状線はただミッドチルダの都市内をぐるぐる循環するだけで、降りさえしなければ永延と同じところを回り続けるだけだ。

もう、三週ほどはしただろうか。いい加減同じ風景ばかりを見続けるのには飽きてきた。

「そろそろか」

ベルディナはそうつぶやくと、窓の外から車内へと視線を動かした。

「尾行は三人ほど。入れ替わりで乗車しているようですが、練度は低そうですね」

エルンストはすでに彼らをつけ回す人間の存在に気がついていて、公安か、警察か。それとも、秘匿組織に捜査官か。

ベルディナは、気づかれずにその三人に目を配った。

「公安だな。捜査課の連中だ。こんな休みの日にご苦労なことだ」
ベルディナがそういったところで、懷に忍ばせていた携帯端末が

静かにふるえた。

「俺だ。……ようやくか。そっちの準備はどうだ？　OK？　よし優秀だ。すぐに向かう」

ベルディナは通信を切り、立ち上がり車両の出入り口に足を向けた。

次の駅で降りるのだろうか。

次の駅は、ミッド空港前。外に逃れる準備ができたのか。

エルンストはそう考え、彼を追った。

（しかし、こいつはなんてふてぶてしいやつなんだ）

彼の後ろについて、改札を降り、そのまま空港への連絡通路を行くエルンストは、ベルディナの態度を見て呆れにも似た感想を持った。

後ろをつける捜査官たちも、エルンストたちが彼らに気がついているということをつすうす感じてはいるのだろう。それにもかかわらず、お前達など端から気にもかけていないなどといわんばかりのベルディナの行動は彼らをいらだたせるのには十分なほどだった。（ありや怒ってるな。捕まったら大変だ）

【クリミナル・エア】も【ストライク・ビューワー】も、【ワールド・アイズ】さえも持っていないエルンストだったが、後ろをいく彼らの憤りは肌で感じる事ができた。

「おい、こっちだ」

ついつい後ろを振り向いてしまいそうになるエルンストにベルディナは、人の流れとは別の方向を指さして彼を導いた。

「そっちには何もなければずだが？」

エルンストは、エアポートのエキスチェンジへの道からどんどん外れている。

「こっちでいいんだよ」

ベルディナはじれたそうに彼を手招きし、人の流れを横断するように強引に足を進めた。

「だが、こっちには……事務所関係の施設しかないはずだが。直談

判でもするつもりか？」

もしくは、事務員の誰かを人質にとって運航便をハイジャック。などとも考えているのではないだろうか。馬鹿な、とエルンストは思うが、ベルディナならそれも有り得ると思ってしまった。

「アホ、さつさとこい」

ベルディナはあくまで黙秘を続けるつもりのようにらしい。

目的地も告げない、その手段も告げない。ただいう言葉は付いてこいの一言だけ。そもそも彼は面倒くさがり屋なのだろうか。

ベルディナは、そのまま裏路地のように人のいない通路を曲がり、狭い廊下のような場所をただ突っ切った。

ひよつとしたら、施設から外れてしまっているのではないか。

先ほどから右に曲がっては左に曲がり、正面の扉を開いてはまっすぐ進む。まるで迷路のような区画をいくうちに、さすがのエルンストであつても現在地をロストしてしまいそうになる。

「ここだ」

ベルディナは最後にたどり着いた小さなドアの前に立ち、そのドアの横にしつらえられたコンソールから何らかの暗証番号を入力しそのロックを外した。

扉が開き、その中に入った二人を迎えたのは、整備服を着た一人の男だった。

「お久しぶりですベルディナ大導師」

整備服と同じ青系統の帽子を脱いで一礼し、その青年はベルディナと久々の再会を祝していた。

「こちらは？」

二人が徐々に雑談をし始めようとする雰囲気を感じ、エルンストはその青年が誰なのかを聞いた。

「こいつは、カーティス・ボーマン。なりはこんだが優秀な戦闘機乗りで、それでいくつかが表彰を受けたこともある。その分、運転は荒っぽいところがあるが、そのほかは全くパーフェクトだ」

ベルディナがそういつてほめるのは珍しいのではないかと思い、

それほど彼が優秀なパイロットなのだと悟ると、エルンストも自己紹介しておくこととした。

「俺は、エルンスト・カーネル、元時空管理局勤めの狙撃手だ。今は、逃亡の身だが、ベルディナ・アーク・ブルーネスからは何かと迷惑をかけられている。よろしく願います」

それを聞いたカーティスは、豪快に笑った。それを見ると、どうやら彼もベルディナから迷惑を被っているものの一人であることが推測できる。

ベルディナは不満そうな表情を浮かべているが、その意見には反論できない様子を見せていた。

カーティスはひとしきり腹を抱えると、二人をそのさらに奥へと案内した。

薄暗く、光の照明もほとんど見えない空間。ここは格納庫なのだろうか。彼らの周りには油くさい部品の大小が雑多に積み上げられており、その多くが錆や埃をかぶっているような状態だった。

廃棄施設か。エルンストが見上げた巨大な輸送機が、真つ二つに切断されたまま放棄されたものをみて、彼はそう思った。

「あれはしっかりとカムフラージュして奥にしまわれています。少し埃まみれですが、最新の状態に保たれており、時空航行はもちろん単独離脱も可能ですよ」

カーティスの情報にベルディナは頷くが、

「それは、テストをすませたということか？」

「いいえ、さすがにそこまでは。ただシステムの自己診断では一つも問題箇所は見つからなかったのです」

「ともあれ、ぶつつけ本番か。少しリスクだな」

「同意します」

エルンストは二人の会話を半ばほどしか聞いていなかった。

しかし、ともあれ、二人がこのミッドチルダから脱出しどこか別の時空世界に移動するつもりだということは理解できた。

（だとすれば、ガルメデス共和国か。）

エルンストはそう予測して少しだけため息をついた。ガルメデス共和国。昨今よく話題に上る、時空世界においてはもっともやっかいな国だ。

頻発するクーデターで政情は荒れ、国土は荒廃し多くの難民とストリートチルドレン、そして薬中毒患者を多く生産する国。^{ジャンキー}

確かに自分たちのような逃亡者が身を寄せる場所としては、そこ以上に適した場所はないだろう。

「おい、エルンスト。こっちだ」

カーティスの声に気がつき、エルンストはそこに目を向けた。

「……見慣れない船だ」

と、エルンストはつぶやいた。

「そうだろう。俺たちの最新鋭より一つ古いだけの小型高性能輸送機だぜ」

カーティスは、少しすすけたその船体を見上げ、まるで自分のことのように誇らしく鼻をこすった。

「高速時空間連絡船、輸送船 テンオ。なるほど、こいつなら脱出可能だ」

ベルディナはそういうが、エルンストは気がついていて。この船は、時空管理局のどの部門も正式採用しているものではないと。ならば、どここのものか。

ミッドチルダでは見たことがない。少なくともエルンストはこれが実際に運用されているところを見たことがない。

それほどに異質な感じがそれにはあった。

「では、お乗りください。すぐに発進します」

カーティスはそう告げ、ベルディナはすでにそのタラップを開き、中に入り込むとしていた。

「しかし、どうやって外へ？ それに飛行管制の許可は取っているのか？」

ベルディナはそんなエルンストの優等生ぶりに鼻を鳴らすと、
「お前なあ。こんな馬鹿みたいに怪しい船で、しかも逃亡中の身の

上の二人を乗せた船が、どうやったら正規の飛行ルートで飛び立てるってんだ」

いや、それぐらいエルンストでもわかっていた。ただ、最後の確認がしたかったのだ。

自分は、今まで守ってきたもの、これから守ろうとしたものすべて、ミッドチルダのすべてを敵に回すことになるのか、と。

そして、ベルディナの答えはそれを肯定した。

「結局、俺は世界の敵になるほかに選択肢はないか」

エルンストはそれをつぶやき、輸送船へと乗り込んだ。

「シートベルトをしっかりと締めていすにへばりついておいてくださいよお二方、かなり荒っぽくいきますよ」

それまで沈黙を保っていたその機体は、カーティスがコクピットに乗り込み数分もたたないうちに息を吹き返した。

「さあ、いきますよお嬢様。^{テンオ} 本日も優雅に力強いダンスをいたしましょう」

カーティスは、まるで恋人の肩を抱えるような手つきで操縦桿を握りしめ、そのトリガーを押し込んだ。

とたんに響き渡る轟音とともに、テンオは何の遠慮もすることなくアフターバーナーに火を入れた。

「前方ハッチ、強制排除を確認。火災発生の様様だが、先行に似異常なし。フライトアプローチ開始!!!」

地上に横たわる大空の女王は、その足を地面にこすりつけローラーのきしみをあげて日の本へと進んでいく。

狭い廃棄場を抜け、広い滑走路を目の前にし、彼女は喜びの声を上げるようにそのしまわれた翼を大いに開いた。

「ああ、今日もご機嫌だな、お嬢様。^{マイ・スイート} それじゃ、よろしくお願いしますよ」

カーティスがスロットルレバーを四分の一引き、彼女は世界へと飛び出した。

「ベルディナ大導師。滑走路にフライトアプローチにある航空機を

確認しました。無視します」

エルンストは、窓の外にそれを見た。大型旅客機が、これから行こうとする滑走路へと入ろうとしているところだった。

「了解だ。場合によっては威嚇射撃を許可する。威嚇だけだ、先方には一発も当てるなよ」

「威嚇の必要ありませんよ。連中、度肝抜かれてます。このまま加速します。舌をかまないようお気をつけください」

カーティスは、進路がクリアになり、操縦コンソールのインジケーターがオールグリーンを示すことを確認すると、遠慮なくスロットルを全開まで引ききった。

通常空間航行のための化学反応式アフターバーナーがさらに火を吹き上げ、彼女はその住処である大空へと向かいまっしぐらに突き進む。

そして、カーティスはその滑走路の切れ目を見極め、エレベーターレバーを引き込み、そしてテンオは大空へと付きあがっていった。「ベルディナ大導師。どうやら、この空域は閉鎖を食らっているようです。前方12000に大規模航空隊を確認。ミッドチルダ武装航空隊第四大隊。どうやら、要撃の鉄槌が^{ストライク・フォートレス}お出ましのようです」

ベルディナは、自分の席にそのデータの描かれた地図を引き寄せた。

「航空魔導師240名による大規模戦隊か。相手にしてられんな。カーティス。奴らとのエンゲージ700手前で離脱を敢行せよ」

「手前700ですか。下手をすれば、連中のいくらかも巻き込むかもしれませんよ」

「かまわん。やれ」

「了解」

エルンストは何も質問せず、ただ状況を見守る。この状況においては自分が何を言おうとも意味はないだろう。

大空へと飛び上がり、地上の足かせから解放された大空の乙女は^{テンオ・ローウィス}さらなる加速をつけ、その武装集団のまっただ中へ向かって突き進

む。

カーティスは、その速度を調整しつつ、敵の行動を見守った。

このまま加速を続ければ、連中の700手前で離脱することができる。しかし、連中が全力を持つてこちらに向かってくるのであれば、多少の被弾は覚悟しなければならない。

しかし、彼らはおおよそカーティスの思惑通り、本体はその場に停滞し、その両翼を60ずつの光点が自分たちを包み込むように展開し始める。

それはまるで、宙を飛ぶ羽虫を捕まえる虫取り編みのように感じられ、テノオ・ローウイス大空の乙女もなめられたものだど、カーティスは不敵な笑みを浮かべた。

エンゲージまで残り約5000。カーティスは通信回線を開き、ベルディナへ、

「離脱まで残り10秒強。耐衝撃、耐閃光防御」

そういうと、二人の席の上から、遮光グラスがつり下がってきた。エルンストはそれをかけると、その視界の一切が遮断され全く世界が黒に閉ざされてしまう。

「残り、5秒。シートに捕まっておいてください」

「お前の方は大丈夫か？」

ベルディナの危惧にカーティスは全く平然とした声で、

「全く問題ありません。すべて完璧です」

おそらく、彼は今笑っているのだろう。まるで、公園や丘山を駆けめぐる子供のように、彼は狂喜きわいているのだろう。

エルンストはそれをどこか心強く思った。

「残り3秒、2秒、1秒……ストライク・デイメンション……アフターバーナー・オフ……通常空間動力停止。
ワグナー超弦励起縮退波動航法準備」

テノオが、その身にキラキラと光る粒子をまといその航法の出力炎を閉ざした。

「……グッバイ！ ワールド！！（あばよ、世界よ！！）」

テノオ・ローウイス閃光とともに、大空の乙女はその世界から時空間の海へと飛び立

っていった。

後に残されたのは、膨大なエネルギーの奔流に身をとられる要撃の鉄槌だけだった。

第十八話 アークソルジャー

時空間の連なりはまるで枝を伸ばす葡萄^{クラスター}の房のごとく、その行方も知らずただ貪欲に己の支配域を拡張していく。

どこまで続くのだろうか。この世界は、そして、どこへ向かおうとしているのだろうかそのもの達は。

時空紀元前750

0年 ソフィア・ブルーネス記す

エルンスト・カーネルはゆっくりと意識を呼び起こした。

強い閃光が、遮光グラス越しでもまばゆく輝きその瞬間に襲いかかったえもいえないほどの不快感に彼は意識を奪われていた。

「よう、起きたか」

隣に座るベルディナはすでに遮光グラスを外し、シートベルトさえも外し、飲み物を片手にずいぶんリラックスしている様子だった。
「状況は？」

オートメーション・モード

すでに自動航行状態に移行しているのか、パイロットであるはずのカーティスも彼とともに飲物を口にしていた。

「先ほど、時空管理局本局船の脇を抜けた。十分ほど前までそのL級巡洋警備艦 ホークアイ の追尾を受けていたが、連中の管轄圏内を越えたためその追尾も今はない」

「そろそろ、どこに向かっているか教えてもらおうぞ」

エルンストは、凝り固まった肩や首をもみほぐしながら、ベルディナをにらんだ。

「ああ、そうだな。そろそろ頃居合いか」

ベルディナはそういうと、カップをそばのテーブルにおろし、一息ついた。

「俺たちが向かっている場所は、時空連合首都ミッド・クラスターだ」

エルンストはしばらく考察し、彼の言った言葉が自分の脳内情報端末のどこにも記載されていないことを確認し、一つずつ確認することとした。

「聞きたいことは多くあるが、まずは、その時空連合とは何かを聞かせてくれ。時空管理局に似たような組織とは類推できるが。今までそんな名前は聞いたことはない」

ベルディナは、面倒くさそうに首をかしげると、

「そうだな。この世界は隣接する多くの世界、パラレルワールドやそれに付随しない独立した時空間の連結によって成り立つと言っているとは知っているな？」

「ああ、それを取りまとめる組織が時空管理局だということも知っている」

「ならば、こうは考えたことはないか？ 宇宙よりも広い時空間の海に時空管理局のような、広い時空世界を統合する組織がほかにもあるのではないか、と」

エルンストは少し考え、首を振った。

「確かにその可能性は否定できない。しかし、俺が聞いたところによると、それが存在したとしても広い宇宙空間で他星系文明人同士が出会うほどの確率しかないと言われている。たとえ、それが本当でも信じられるものではないな」

「それが、存在するわけだ」

ベルディナは、エルンストの優等生的な物言いを否定するようにそう口にした。

「実際、俺やカーティスはそこ出身の人間と言っこととなる」

「あなたたちが？」

エルンストは怪訝な視線を二人に投げかけた。そんなことを言っても信じられるものではない。

「まあ、そのあたりのことはある意味どうでもいい話だ。ともかくいけばわかると言っておこう」

ベルディナはそういって、シートに背中を預け、たばこを片手に

本を読み始めた。

今となつては珍しいどころか、文化財といつても過言ではないほど廃れてしまった紙媒体のすすけた書物をだ。

しかし、時空連合にミッド・クラスターか。もしもそれが本当ならば、これは大変なことだとエルンストは感じていた。つまり、地上に住まう人間が遙か星の彼方からやってきたという異星人を目の前にしてただうろたえることと同じだということだが、自分はそのまで感情が揺さぶられる様子はなかった。

感動が薄いからなのか、単に信じていないだけなのか。

少しだけ、彼はこれから向かう場所が楽しみになつてきていた。

そして、しばらく休んでいたところ、コクピットから耳慣れないアラームが聞こえてきて、カーティスは急いでそこへ向かった。

「なんだ？」

ベルディナは、通信機越しにその様子を確かめようとした。

「どうやら、出迎えのようです」

カーティスは、リーダー越しにテンオの目前に迫る巨大な質量対を確認した。

「どこのものだ」

「確認中です……、時空連合軍第七時空艦隊所属。これは、レアト基砲艦隊所属の新型巡洋艦 アークソルジャー のようです」

「レアトの旗艦か」

「回線つながりました。こちらを誘導することです。……お氣遣いに感謝する、アークソルジャー。できれば、燃料の補給も行いたいのだが。接舷の許可はいただけるか。感謝する。直ちに接舷する」

カーティスは次第にあらわになつていくアークソルジャーの巨体に飲み込まれるようにテンオを導いた。

エルンストは、てつきり燃料補給は巡航補給によるものだと思つていたが、カーティスはそのままテンオをアークソルジャー

の船体へと納め、自船のエンジンを停止させた。

「降りるぞ。艦長に挨拶しに行く」

ベルディナはそういつてエルンストの膝を蹴ると、彼に降船の準備をさせた。

準備、といつても着の身着のままデバイスすら持ち出す機会もなかった彼は、財布すら持っていなかった。

無賃乗船か。と己の状況を皮肉ると、せめて皺の入った服をのばして降船を決めた。

艦外の風景からも推察できたが、この艦はアースラやラーバナとは違う構想で作られた艦のようだった。

時空管理局の時空航行艦はどちらかというと単独任務を主観にし、マルチロールた多用途艦であり、管理局の船は基本的にそれを基準にして開発されている。

しかし、この艦。巡洋艦 アークソルジャー はむしろ航行能力と打撃力を主観に入れられたもののように感じられる。おそらく、これらは大規模な艦隊を形成することでその用途が発揮され、単艦の能力よりもその艦隊運用方法に重きを置かれているようだ。

彼らの言う艦隊というものがどれほどの規模となるのかは正直見当が付かないが、この艦が本来所属している艦隊は、第七と言われている。

ともすれば、軍の規模は時空管理局を遙かにしのぐのではないかとエルンストは感じた。

降船時に手渡された自動翻訳機は、多少の表現の差異に問題があらながらも、その周りにかかっている異文化の文字でさえ理解できるようになるという優れものだった。

エルンストはベルディナが立ち止まった部屋の上に『艦長室』とかがかかっていることが理解でき、少し驚いた。

「ベルディナ・アーク・ブルーネス以下、異世界の客人。入ります」

二、三回ドアをノックし、彼はその中へと足を入れた。

「ようこそ、ベルディナ・アーク・ブルーネス。客人もようこそ、

アークソルジャーへ。あなたたちを歓迎します」

そこにたつ女性を見て、ベルディナは、「なるほどな」といつて唇の端を持ち上げた。

「やっぱりお前だったか、本山美由紀戦佐。俺の協力者で、こんな馬鹿でかい艦を転がしてこれるのなど、よく考えればお前しかいなかったな」

ベルディナのその言葉に美由紀と呼ばれた時空連合の戦佐（二佐に相当）は破顔して、久しく出会う友人に笑顔を向けた。

「ええ。知らせを受けたときは正直驚きましたが。何とかこの新型艦の航行試験スケジュールを組むことができましたよ。さすがにいつまでもこのままではいられません、今回の件に関しては協力できると思います」

「ウィリアム・レガートの差し金か。やつは相変わらずのようだな」

「ベルディナ大導師に協力できることを喜んで言いました。俺もいきいたいところだが……という伝言をもらっておりです」

「ふん、お前の旦那もなかなかやんちゃだからな。手綱取りが大変だろう」

「全くです。あの人ももう少し落ち着いて行動してほしいものですよ」

ベルディナと美由紀をこのまま話をさせていてはいつまでたっても話が進まない。そう考えた彼女のそばの副官らしき男は、美由紀の座るチェアの背もたれに手を置き、先を促した。

「ごめんなさい、サライト副長」

美由紀はあわてて、姿勢を正し、そのそばに置かれた書類を手にとってベルディナに手渡した。

「このたびの辞令書を預かってきました。ベルディナ・アーク・ブルーネス特務捜査官。貴官には今回、時空管理局がらみの事件に関する権限を与える、とのことですよ」

ベルディナはその書類に軽く目を通し、それに問題なしとするとそれを懐にしまい、

「了解しました」

とだけ伝えた。その特務捜査官というものには敬礼の習慣はないらしい。

「ところで、ベルディナ大導師が保護されたというあちら側の魔導師の方達をこちらで保護しています。いま、こちらにお呼びしましたので……」

という美由紀の言葉を遮るように、艦長室の扉がノックされた。

「どうぞ、お入りください」

おそらく、先ほど言った客人達のお出ましのようだと思い、美由紀は彼らの入室を許可した。

「失礼いたします、本山艦長。レイリア・フォート特務捜査官入ります」

それはエルンストが聞き慣れた声だった。

彼が驚いて振り向くと、見慣れない衣服に身を包んだ彼が敬礼をしながら部屋へと入ってきていた。

そして、その背後にはさらに見慣れた彼らがいることに、エルンストはある一種の安心感を覚えた。

「よう、レイリア。上手くやれたみたいだな」

ベルディナは部下の成功を知り、不敵な笑みを送った。

「ええ、ベルディナ大導師。一切問題なく、すべて順調に対処できました」

「それもこれも、すべての視線をエルンストに向けさせることでだ。正直な、俺はあんたを殴ってやりたいよ」

眉間に皺を寄せ、ベルディナをにらみつける朱鷺守はその手に自身のデバイスであるナイフを持って、今にも彼に飛びかかるように様子だった。

「結局、全員を巻き込むこととなったか」

エルンストは、自分自身の演技が全く無駄になってしまったことを嘆くと同時に、再び彼らと出会えたことをうれしく思った。

「エルンスト君のことは、聞かせてもらったよ。ごめんね、私、ず

いぶん勝手なことばかり言って」

高町なのははとても悲しそうな表情を浮かべエルンストの目を見た。

「だが、これであたしらもようやくお前と同じところに立てたって訳だ。一つだけいつとくが、あたしの足をひっぱんじゃねえぞ」

相変わらず胸の前で腕を組んでにらみをきかせるヴィータだった。そしてその背後には、エリオンの後ろに姿を隠すアリシア、双子のリーファの姿もあった。

「シグナムと御剣はミッド・チルダで俺たちを逃がす手助けをしてくれた。逃亡中だがまだ生きている」

朱鷺守の言葉に、この場にいない二人にエルンストは無事を祈った。

「さてと、とにかく今後のことを考えるべきだ。艦長、できれば食堂かどこかの会議室を使わせてもらいたいのだが。許可はいただけるか？」

ベルディナはそういつて美由紀を見ると、美由紀は「もちろん」と言つて、食堂を使用することを進めた。

よく考えれば、エルンストとベルディナは朝から何も口にしていなかった。食事にそれほど魅力を感じていないエルンストも空腹には耐えきれない様子でベルディナを見ていた。

「よし、なら食堂だな。レイリア、案内しろ」

おそらく、先に乗艦していたレイリアならその位置がわかるだろうと当てをつけ、ベルディナはそう命じた。

「了解です、ベルディナ大導師」

レイリアは頷いて、彼らを先導するように艦の廊下に足を進めた。

第十九話 束の間

ひとまず、現状の把握からだといってベルディナは、今まで裏で何か起こってきたか。エルンストをはじめとして、この件に巻き込まれたもの達がどのような思惑で運用されていたのかを少し詳しく話をする事とした。

この件はエルンストにリカルド・マックフォートの殺害許可が出されたときにもう始まっていたこと。

そして、情報部のたれ込みにならない航空戦隊が彼を殺害したエルンスト達を消そうとしたこと。それによってエルンストの元相棒が死亡したが、エルンストは何とか生きて帰還したこと。

そして、現在。裏でリカルド・マックフォートの名をかたり暗躍しているものがあると言うこと。

食事を片手にベルディナはそう語った。

アークソルジャーの食堂で出された食事はどうやら士官待遇のものだったらしく、ミッド・チルダの陸士隊や機動中隊で口にしたものよりも幾分か美味だった。それは、ミッド・クラスターで食されている料理という物珍しさからだったのか、ともあれ、異空の世界であってもその基本的な食文化には違いはないと感じ、エルンストは少しだけ安心した。

「とまあ、かいつまんで説明するとこんな感じだ」

いったい何杯目のお代わりになるのか。山盛りのライスに分厚い肉のステーキをほおびりながらベルディナは時々話を料理にそらせながら一通りの話を終えた。

「結局、1から10まで私たちは利用されていたと言うことですか」
さすがのなのもそれを聞かされてはおもしろくない様子で、浮かべられた笑顔の上にぶつとい青筋を浮かべているようだった。

（あれは、怒っているな。まさに激怒だ）

エルンストは、すでにすんだ食事を前にしてそんななのはの様子

を評した。

その様子からは、今にも首にかけられた【レイジング・ハート】を起動させ、大規模砲撃を彼に浴びせそうな勢いだったが、狭い艦内でそれをすればどういいう結果となるかはさすがの彼女でも理解できていたようだ。

「まあ、そうだな。なかなか扱いやすい手駒だったよ」

肉の最後のかけらをライスとともに胃に流し込むと、ベルディナは給仕を呼びつけ、さらに追加を要求した。

エルンストは手駒と言われても何も感じなかった。事実、彼はそれを自覚して今まで過ごしていたし、消耗品である自分に多少の誇りも感じていた。

しかし、あっさりと肯定してしまった彼のその態度をおもしろく思わないものは多く、レイリアとエルンスト以外の全員が、ベルディナに鋭い視線を浴びせかけている。

これがこんな状況でなければ、一瞬で彼は全員から殺されているだろう。

「どーでもいいけどさ。今からあたしらは何をすればいいわけ？ あそこから助けられたってことはまだ利用価値があるってことでしょ」

意外にも冷静にそういったのは、いつもなら真っ先に暴れ出しそうなアリシアだった。いや、彼女もまたそっぴいながらこめかみをピクピクさせているところを見れば、必死になって自分の激情を押さえ込んでいるのだろう。

「俺もそれを聞きたい。もしも、この先さらなる戦いが待ち受けているのなら、むしろ使ってもらいたいところだ」

朱鷺守もそれには賛成の様子で、伊達眼鏡越しにベルディナを見た。

「いいだろう。説明する……が、一つだけ確認しておきたい。降りるなら今のうちだ。ここから先についてはあらゆる意味で命の保証はできん、そして、たとえ生き残ったとしても下手をすれば社会的

な立場などすべてを失うことになる。それがいやならここで降りろ。これが最後のチャンスだ」

ベルディナはそういうとそこにいるもの達全員に目を配った。それがベルディナが用意した最初で最後の慈悲なのだろうかとエルンストは思った。

しかし、エルンストはこうも思った、

「ここまで巻き込んでおいて、今更降りると言うのはないな」と。

つい口に出してしまった言葉だったが、その言葉になのは、ヴィータを始め全員が力強く頷いた。

「それでいいのだな？」

ベルディナの最終確認に、ヴィータが、
「話を進めてくれ。いい加減、待ったをかけられるのはうんざりだ」と口にした。

ベルディナは、よかろうと頷いて、ようやく終わった食事を給仕に下げさせ、食後のデザートともに紅茶を注文した。

「今まで後手に回っていたすべてを取り戻す。そのためにはなんとしても連中をおびき寄せる必要がある。よって、君たちにはこれよりA32971世界、地球に潜伏してもらう」

A32971世界、地球。その言葉を聞いたレイリアの表情に明らか陰が落ちた。

「私たち、というと、ベルディナー佐は同行しないと言うことですか？」

なのはの問いにベルディナは、そうだ、と答えた。

「俺は、ミッド・クラスターでやるべきことがある。レイリア・フォート特務捜査官。現場の指揮と俺との連絡役はお前に一任する」

レイリアは、「了解」と答えた。

「それにしても、地球か。もう、ずいぶん帰ってないな」

行く場所、地球の出身であるのはは久しくあつてない家族や親友の顔を思い出し、そつとほえんだ。

「今回はあつてる暇なんてねえかもしれねえぞ」

ヴィータはそういうが、やはり自分の主であり親友のはやての故郷である地球を思うとうれしくなるようだ。

「本山美由紀艦長とはすでに話が付いている。到着は一週間後。各人、万全の状態にしておけ。以上、質問は？」

ベルディナの問いかけにエルンストは一つだけ確認しておくこととした。

「俺は今、武器を持っていない。それに関しては何か支給されるのか？」

そう、今彼のデバイスの三つはミッド・チルダにあるはずだった。デバイスがなければ彼には戦う手段はない。

ならば、自分は戦力外なのかと思っていると、エリオンが口を出した。

「エルンストのデバイスはちゃんと持ち出しておきました。今は、アリスが持っています」

「そうか、ならば後で渡してくれ」

ほかに質問が出ない様子だったので、ベルディナは解散を命じた。「ああ、それと。本山艦長からの好意で、ここの戦闘シミュレーターを自由に使ってもよいとのことだ。ミッド・チルダのものとは幾分勝手は違つたろうが、かなり高性能のものが搭載されているはずだ。各自それを念頭に置いておくこと」

最後にベルディナはそういうと、飲み終わった紅茶を置き、すぐに食堂を出ようとした。

「ブルーネス一佐。少しよろしいですか？」

立ち去ろうとするベルディナをなのは止めた。

「何だ？」

「一佐がここを出立するまでに、一度私と模擬戦をしてほしいのですが」

ベルディナは少しだけ考えた。果たしてそれだけの時間的余裕があるのか。しかし、エース・オブ・エースである彼女の能力にはべ

ルディナも興味があった。

「いいだろう。明日の昼食後三〇分だけなら時間が空く」

「ありがとうございます、一佐」

「俺も楽しみにしているよ、それと、俺のことは一佐と呼ぶな。もう、俺は時空管理局の人間ではないのだからな」

「わかりました、ベルディナさん」

なのはの目から出される好奇心とわずかに混じる敵愾を感じ、ベルディナも少しその戦いを楽しみに思っていた。

「高町一尉とベルディナ大導師の一騎打ちか。これは、見逃せないカードだね」

レイリアが愉快そうに言うところ、彼もそれを観戦するつもりなのだろう。

「そうだな。確かに興味がある」

かくいうエルンストもそのつもりだった。周りを見て、頷くものばかりのところ、おそらくここにいる全員がそれを観戦するつもりなのだろう。軽いお祭り騒ぎになりそうだなとエルンストは予想した。

「どっちが勝つと思う？」

「現状の情報からすると、おそらく高町一尉だろう。しかし、ベルディナに関する情報が不足しすぎている。彼の戦闘力が判然としな以上、文字通りやってみないことにはわからんだろうな」

「それは、僕も同じ意見だ。だけど、部下としてはベルディナ大導師に勝ってもらいたいね」

「その気持ちはわからなくもない。しかし、単体としての戦闘力というものはそれほど重要なものかと俺には思う」

レイリアと少々雑談を始めたエルンストだったが、誰かが自分の裾を引いていることに気がつき、話を一度中断させた。

「ねえ、エルンスト。これ……」

彼が、そこを見ると、少し顔を赤くしたアリシアが彼の裾をひいて何かを差し出しているところだった。

「これは、俺のデバイスか」

腕輪になったもの、そして赤い宝石状のもの。それは彼がミッドチルダに忘れていたものだった。

「壊れてないと思うけど、ちゃんと調べておいて」

アリシアはそういつつもまだ面を上げようとしない。

「ああ、わかった。ありがとう、アリシア二士。おかげで助かった。これで俺も戦える」

ありがとう、というエルンストの言葉に、アリシアはおろかレイリアにエリオン、朱鷺守さえも驚いた様子で彼を見た。

「なんだ？」

周りの視線を一気に集め、エルンストは驚きを隠しながらそれらを見回した。

「ああ、いや。君の口からその言葉が出るなんて珍しいと思ってね、他意はないよ」

なにやら微妙な笑みを浮かべるレイリアだったが、実際エルンストも自分の口からこれほど素直な言葉が出たことを少しかり奇妙に思ってもいた。

遠くでなのはとヴィータがほほえましい視線をエルンストに送っていることを無視すると、再びアリシアに向かい、

「まあ、ともかく助かった。このことの礼は戦場^{いくさば}で返す。必ずだ」

エルンストのその力強い言葉は、アリシアの耳にはどのように聞こえたのだろうか。

後のエリオン曰く、「夕日をバックにして孤立無援の戦いを繰り広げる自分のピンチに颯爽と現れて敵を一網打尽にするエルンストという、痛い風景」だったらしい。

アリシアはさらに顔を真っ赤にし、何を思ったのか全力で食堂を離脱していった。

「ほう、見事な離脱だ。あれが戦場でも見られればいいな」

そんなアリシアの脱兎ぶりをみて朱鷺守は邪悪な笑みを浮かべた。
「ねえ、エルンスト君？」

「何でしょう、高町一尉」

「これから訓練をしようって話になってたんだけど、アリシアを連れ戻してきてくれないかな」

「俺がですか？」

「そうよ、急ぎなさい」

なのはの有無を言わさない言葉に、エルンストはため息をつく、双子のリーファの弟を一瞥しそのまま食堂を出た。

「若者はいいな。そう思わないか？ 高町一尉」

朱鷺守はそんな彼を見送り、まるでオヤジのようなことを口にした。

「私はまだまだ若いつもりですけど？ 朱鷺守一尉？」

らしくない挑戦的なまなざしを浮かべるなのはに、朱鷺守は「これは失礼」と言っておどけて見せた。

状況は最悪で、放置しておけば悪化の一步をたどるばかりだ。しかし、彼らはその中にあっても不思議な希望を持っていた。それはおそらく何の根拠もない希望に違いないだろう。

だが、それがあらゆる状況を打破するための強力な原動力になることを知っていた。

しかし、レイリアは彼らとともに笑いあいながら一人陰鬱な感情をもてあましていた。

第二十話 白と黒の行く末

それからしばらくの間、彼らは戦闘訓練をして過ごした。

巡洋艦アークソルジャーに搭載された訓練設備は、その規模こそ小さいものだったが、時空管理局が採用しているどのシミュレーターと比べても全く遜色のないように感じられた。

狭い艦内といっても、その規模は二〇〇メートルを超える巨体であつたが、そこにあるものを考えればその区画ごとの広さは確かに広いものではなかつた。

それならば、どうやって戦闘訓練を行うのか。それを疑問に思つていたエルンストは、それを初めて使用した時にはさすがに驚いた。「まさか、体の感覚すべてをバーチャルに転送するなど、無茶だと思つたが、あれはあれで結構いいかもな」

今日もまた戦闘訓練を終えた朱鷺守はその卵形のシミュレーターに寄つかかりそう声をついた。

確かに、ミッドチルダの巡洋警備艦においても、魔導師の通常訓練を行うための施設は設けられていた。しかし、それは多少広い空間を防御魔術で囲つただけのものであり、やはりその広さには限界があつた。

しかし、バーチャル空間であるならその限度は無い。

先程も彼らは、20km四方に渡る広大な廃墟のビル群の中で広域戦闘の訓練を行つていたのだ。

確かに、ミッドチルダとミッド・クラスターの違いからデバイスの仮想復元には多少問題はあつたにせよ、集団戦闘やフォーメーションの確認とその練成には十分な機能を有していた。

朱鷺守を筆頭に、その訓練に参加していた面々は先程の戦闘を振り返り様々な話し合ひが続けている。

「やっぱりね、中衛のレイリアに負担が行き過ぎていると思うんだ。エリオンはいま、アリシアのバックアップに回ってもらつてるけど、

エリオンも中衛に回してレイリアと二人の体勢にした方が良いと思う」
ガード

「多用途空戦士として、特定の陣に所属せず、戦場を動き回るなのは、全体を見通してそう感じていたらしい。」

「ですが、それでは前衛へのサポートが少し緩くなりますし、後方支援のエルンストの負担も大きくなると思いますよ。僕のサポートと同時にエリオンのサポートもしなくてはならないですからね」

それに反して、レイリアはあくまでエリオンの前衛支援の位置に
フロント・アシスト
こだわっているようだ。

レイリアもまた、中衛として全体を見渡す役目を負っているためなのはとは違う意見を持っている。

「あたしも、エリイの援護がないと上手く動けないわ」

アリシアも、その意見だけは譲れないらしく、エリオンもアリシアの言葉に強く頷いている。

「エリオンを中衛に据えるとしても、エリオンとレイリアでは同じ
ガンナー
射撃手と言ってもそのスタイルは違いすぎる。高機動型射撃戦闘の
ハイスピード・ガン・シューター
レイリアに対して、局地制圧型射撃戦闘^{ロー・エクステンシブ・ガンナー}とは連携に課題を残しそうな様子がある。俺なら、二人でも三人でも問題なく支援は出来るが」

今までの戦闘経験から、エリオンとレイリアの違いを見抜いていたエルンストは後方支援立場からそう意見を言った。

なのはは少し困った様子で押し黙る。

現在の編成は、前衛としてヴィータ、朱鷺守、アリシアを置き、その前衛、特にアリシアに対する射撃支援をエリオンが行っているという状況だ。このエリオンの支援は彼が自分から名乗りを上げたものであり、双子のリーファのその連携には目を見張るものがある。しかし、その分中衛において全域に射撃支援を執り行うレイリアと、それをバックアップするエルンスト。その状況を見守りつつ、多用途に行動するのは。

やはり、戦力が前衛に偏りすぎているとなのはは感じていた。

ならばいつそのこと、レイリアも前衛支援にして、自分が中衛に回ろうかとも考えたが、それはレイリアとエルンスト反対された。レイリアの生業は、支援ではなく戦闘だとエルンストは感じており、そうあるのならレイリアの支援のため自分が中衛に出なければならぬことをエルンストは嫌ったのだ。

そして、リミッターを解除されたのはもはや射撃を主体にする魔導師ではなく、大規模砲撃制圧戦を要とする砲術魔導師であることも悩みどころとなっている。

「あたしが中衛に回ってもいいぜ。それで、前衛が朱鷺守とアリシア。その支援をレイリアとエリオンがする。それで、後方がなのはとエルンストだ」

グイータの提案も面白いと感じたのはだったが、やはり首を振るしかなかった。

確かにグイータの持つ「グラフ・アイゼン」は近接及び、中距離射撃攻撃も行えるマルチロールのデバイスであるのは確かだが、その真価はやはり敵の防御ごと相手を叩き伏せる近接戦闘であることは明らかだったし、常に全周を見守り、全てを計算に入れてあらゆる方向へと支援を行わなければならない中衛を任せるには少し不安がある。

中衛とは、確かに立ち位置としては華々しい活躍を遂げるものではない地味な仕事である。

しかし、その仕事は前衛と後方のバランスを考慮し最も適切な行動と立ち位置を考慮しなければならないものであり、あらゆる意味で戦列の要となる重要な難しい位置なのだ。

やはり、中衛はレイリアしかないか、と結論づけるのはは、もう一度最初から編成を考え直そうとした。

「お、やってるな。ご苦労さん」

そんな中、ベルディナがシミュレーションルームに顔を出した。「ベルディナ大導師。お疲れ様です」

レイリアは、ここのとこずつと部屋に籠もりっぱなしだった彼

に一礼して迎え入れた。

「ベルディナさん。そろそろ時間ですか」

なのは時計を見て、彼との約束の時間が近づいていることに気がついた。

「ああ、まあ先にそつちのことを済ませておけ。俺も少しだけ時間に余裕が出来た。まだしばらくは大丈夫だ」

なのはそういうベルディナに、「すみません」と言うと同時に彼にも助言を仰いだ。

「なるほどな。確かに、戦列が若干ちぐはぐしているようにも見えるか」

「ベルディナ。あんたならどうする？」

エルンストは、先程までの戦闘データを読みながら指で後頭部をかくベルディナに訪ねた。

「俺ならねえ。あんまり参考にならねえとおもっが」

「興味があるね。教えてくれないものか？」

朱鷺守も身を乗り出した。

「そうだな。俺なら、朱鷺守とレイリア、双子のリーファ、ヴィータと高町のタッグを三つ配置しそれぞれが独自に行動する。おそらく、そのコンビが一番お互いにとって動きやすいだろうからな。そして、その運用方法をエルンストが広域情報収集能力で補い、自身はマルチに行動しそれぞれに射撃支援と不明驚異の排除をする。といったところか。どうも、これまでの戦闘では、エルンストの射撃能力に重きを置きすぎで、こいつの潜伏能力と情報能力をおざなりにしているような気がするな。こんな感じでどうだ」

ベルディナのその言葉に、エルンストは、

（なるほど、自分の手駒を重視するだけに、人を見る目はあるようだな）

と感じた。

「そうか。エルンストは狙撃手。だけど、それはただ射撃に特化した能力ではなく、偵察の能力も意味する。それを最大限有効利用す

るためには、むしろエルンストは他とは離れて潜伏し独自に行動した方が良く。それだと、僕達ではなかなか対処できない不明驚異に対する有効な対策にもなる。僕はいいと思います」

暫くそれを考え、独自にシミュレートしていたエリオンはベルディナの意見に賛成のようだった。

「あたしも、悪くない意見だと思うぜ、なのは」

グイータもベルディナの意見には一理あると感じたのだろう。

なのはは少しまた考えて、

「分かった。それも考慮に入れておくね」

といって、朱鷺守と後でまた打ち合わせをしようということでの話を終わらせた。

なのはの意識がそろそろこちらに向かいつつあることを感じたベルディナは、

「シミュレーターを使うのは久しぶりなんでな、調子を思い出すために先に入ってる。準備が出来たら声をかけてくれ」

というと、なのはに先行してシミュレーターを開き中に身を滑り込ませた。

フィールド等の設定は、どうやら先程まで使用していたものを使うようだ。

中央のモニターに映し出されたビルの廃墟群の中にベルディナの姿が映し出され、彼は軽く準備運動をするようにいろいろと身体を動かし、そこらを飛び回っていた。

しかし、エルンストは一つだけ疑問に思った。

「あいつ、武器を持っていないが、それでいいのか？」

彼の言うとおり、ベルディナはその手に自分たちと同じようなデバイスを持っていなかった。それが、ミッド・クラスターの標準なのかとレイリアに聞いたが、レイリアもそれに関しては分からないらしい。

「僕達の世界でも通常はバトル・ユニットというものを使用するよ。
ミッド・チルダ
その機能も概念も、そっちの世界のデバイスと同じようなものだ。」

だけど、ベルディナ大導師がそれを持っているところは、見たことがないな。たぶん、見えないところで使っていると思うんだけど」
モニター内のベルディナは、一通りの準備を終えたようで、外の彼らに、「まだか？」といって手を振っていた。

なのはは慌てて、自分もシミュレータの筐体に入ると、その脇にデバイスを差し込み筐体を起動させた。

「さあ、始まるぜ。どっちが勝つか、賭けねえか？　ちなみに俺は、高町一尉に12だ」

側のベンチに腰を下ろし、朱鷺守は煙草を吹かし始めると挑戦的な笑みでエルンスト達に目を向けた。

「いいですね。僕は、もちろん上司に10を賭けますよ」

レイリアはその隣に座り、指を二本掲げてニツと笑った。

「あたしは、もちろんなのはさんに5ね」

そんな二人とは離れた席に腰を下ろし、アリシアも乗り気のように片手を広げて見せた。

「僕は……、ベルディナに10かな」

エリオンはアリシアの側に立ち、その行く末を見守った。

「あんた、そんなにもってんの？　お小遣いがピンチだっていつてなかった？」

弟の財布事情を知るアリシアは、少し驚いた様子だったが、エリオンは平然とした表情で、

「勝てばいいんだ。そうすれば、ピンチも解消される」

と言い放ち、アリシアは弟が意外にも勝負師だと言うことを初めて知った。

「お前等、賭け事は感心しないぜ。あたしは当然なのはに6だ」
ヴィータはベンチに座らず、その場にどかと腰を落とした。

「エルンスト、お前は？」

朱鷺守が、手持ちの端末にそれぞれの掛け金を集計し、最後にエルンストの参加を求めた。

「俺は……高町一尉に8を賭ける」

エルンストの答えに、レイリアは満足して彼に笑みを向けた。
彼はそれを無視すると、シミュレーターに背中を預けモニターを
凝視した。

朱鷺守はそれらを集約し、

「^{なのは}白有利か。さて、レースの結果はどうなるかね」
と言つてにやりと笑った。

「どうやら、あいつ等これにかこつけてかけをしているみたいだぜ」
実は外の様子を見ていたベルディナはそういつてあくどい笑みを
浮かべると、なのはに目を向けた。

「もう、あの子達は。後で叱つておかないと」

なのはは呆れた様子だったが、自分の方に信頼が集まっているこ
とに少し嬉しそうな様子だった。

「まあ、掛け金の半額は没収として、残りは奴らにくれてやればい
いさ。ちなみに、どっちが勝つても折半するってことでいいな？」

ベルディナは既にそこまで考えていた様子で、なのはは更に溜息
をついた。

「私は要りません。私が勝ったら、掛け金は全部返却です」

ベルディナは、それはもったいない、といって、それなら是が非
でも勝たなければならんな、とうそぶいた。

「さてと、連中の話し合いも一段落付いたようだ。そろそろ始めな
いか？ 高町一尉」

ベルディナはそういうと、片手を掲げてなのはに挑戦的な視線を
送った。

「ええ、さつそく。制限なし、勝つためなら何でもOK。制限時間
なし。どちらから負けを認めるか、戦闘不能になるまでとことん。
全力全開で」

なのはは【レイジング・ハート】を掲げ、全身からあふれる魔力

をそれに込めた。その顔は笑っている、まさに好敵手を見つけたときの戦士の笑みだった。

「いいだろう。年上として先陣は君に譲ろう」

「後悔しますよ」

なのはは、先陣サレビスを受けたことを屈辱とはとらえていなかった。むしろ、何の制約もなく全力をただ彼にたたき込めることを喜びと感じた。

彼女は、カートリッジをロードする。遠慮なく、5発分を。

彼女の持つデバイスは変形を遂げ、その周囲にいくつもの補助器フラスター・ビームを展開させた。レイジング・ハートはエクセリオンよりエクシードへ、さらには改良を加え体への負担を軽減されたフラスターモードへとその姿は変貌していく。

「すばらしい。それだけの魔力を運用できるとは、噂以上だな、高町一尉。だからこそおもしろい！」

ベルディナもそれを見つつ、右腕に魔力を練り込み始めた。先陣は彼女に譲った。しかし、それは単に攻撃の機会を与えと言うだけで、さすがの彼でもあれを食らえばひとたまりも残らないとは自覚していた。

「いくぞ、バリアブル・アート。今出せる全力を出す。久しぶりに楽しい戦闘ができそうだ」

彼は身のうちに潜む”それ”に声をかけ、その一撃を心待ちにした。

「全力全開！ スターライトオー……！」

それは、彼女が放てる最高最大の魔術だった。錬成した魔力をただエネルギーとして拡散させ、放射するまさに星をも砕けと言わんばかりに高められた魔力の前ではあらゆるものが灰燼と帰する。

「……ブレイカー……！！！」

なのはとベルディナの距離はおよそ1200m。その距離においては、彼女の攻撃も着弾まで数秒を要する。

ベルディナは襲い来る莫大な魔力の奔流を体を感じつつ、ゆっくり

りと口を開きそれを紡ぎ出した。

「創世の時、父なる神はこう告げられた。『記せ、ここより後に命を捧げしものは幸いなり。この後のをもってこの世に在りしものに我は祝福を与えん』」

それはまるで歌のように彼の口より紡ぎ出され、それに呼応するように彼の魔力は呼び覚まされる。

「そして、父なる神はこうも告げられた。『心せよ。我もまたこの世にありて全てを見守らん。この世に遍く在るものにこそ、我が息吹は在らん。感ぜよ、この世に遍く者達よ。我は汝等と共にあるものなり』」

それは祈りの言葉。世界に在りし時、すべてを創造した神の奇跡を語る言葉だった。

「神、双眸を閉じて涙して、その腕を天へと捧げて光となる。光、粉塵となりて世界に注ぎ、世界は静寂に包まれた。創世はここに完遂を遂げ、生まれる者はその命に目覚めた」

彼女の放った光の波動は、猛然とする勢いを崩すことなくただまっしぐらに彼の元へと突き進む。

しかし、彼はただ目を閉ざし、ここにはいない神への祈りを続けるばかりだった。

「神よ、神よ、父なる神よ。あなたは我らと共にある、あなたは全てに在り全てはあなたを礎とす。ここに我らの栄光を。悠久なりし静寂を。語り継ぐ、その全ての縁を」

そして、彼は目を見開きその手に宿る絶大なる魔力を掲げ、最後の言葉を口ずさんだ。

「無垢なる神に祝福を、ルーヴィスなれ、あるらんかし」

彼に襲いかかる彼女の爆流。それにも負けず、なおもそれを飲み込まんとするほどの力が彼の手に宿りつつあった。

彼はそれをただまっすぐそれへと掲げ、高々とそれを口にした。

「其は、聖者を貫きし災いの神槍。その力を持ってあまねく事象を貫き通せ……ロンギヌス流血の神槍！！」

その力はただの一点へと集中され、長く伸びゆく闇の巨杭は彼の手により其れを離れ、一条の軌跡となり投擲される。

わずかに迫った彼女の巨砲の雄叫びはまるでそれを包み込み、飲み込んだかのように思えたが、絶大な力を集約するその飛槍はその一切を抵抗ともせずに、それらをただの無力といわんばかりにはじき飛ばし突き進む。

「そ、そんな！」

すべてを賭した自らの一撃がそれによって徐々に勢いを減じる様を見て、なのははただ呆然とするしかほかがなかった。

「何をしている！　よける！！」

その声に一瞬ほどの反応を遅らせてしまっていたればおそらく、彼女は無事では済まなかっただろう。

たとえ、仮想体であるこの身であっても苦痛は感じるし、その苦痛も過ぎれば本体に対して影響を与える。

なのはは襲いかかる力の巨槍と拡散していく自らの力の奔流に吹き飛ばされそうになりつつも何とかそれをよけることに成功した。

自分のわずか１メートル横を飛び去るその巨槍はそのまま一切の減衰も見せず、ただすべてを貫き飛翔する。

先陣を切った、出し惜しみせず自分のなせる全力を費やしたはずだった。それにもかかわらず、彼はよけず受けず、なおも反撃することですべてを打ち抜いた。

しかし、なのはにはそれが悔しいとは思えなかった。

悔しいと思うこと自体が何か間違っているような気がしていた。むしろ、彼が出し惜しみせず彼自身も己の最高を発揮してくれたことに喜びさえも感じていた。

「私の、完敗です。ベルディナ大導師」

息を荒くし、額にかなりの汗を浮かべるベルディナに向かって、なのはは晴れやかな笑みを向けた。

第二十一話 ” 地球 ”

アナザーエリア、32971号世界。時空連合において地球はそう呼ばれていた。

ミッド・クワスターを首都とする時空連合の世界地図は、首都を中心とした同心円状にそれぞれの世界が組み込まれる形となる。

中心を時空連合の宗主国がしめるセントラルエリア。その外殻を固める理事国の集まるプラネタリエリア。さらに外殻を覆い尽くす、時空連合の管理下にありつつもそれとは協調姿勢を見せない国家群、ターミナルエリア。

そして、その円盤の最も外れ、アナザーエリアと呼ばれる領域に所属する国家群の多くは未だ時空間航行技術も観測技術も持たない辺境のエリアなのだ。

地球もそのエリアに所属し、自分たちの宇宙の外に無限に広がる時空世界を知らない世界だった。

時空航行巡洋艦アークソルジャーに停泊する高速輸送船 テンオは通常の船舶であれば禁止されている単独による時空間離脱および、突入機能を持つ。

そのためこの船は、時空連合が管理する超空間ゲートを使用することなく時空間と宇宙空間の間を行き来することが出来るのだ。

「そろそろ地球の近傍領域へと達します。残念ながら、私達の艦はアナザーエリアへの一定距離以上の接近は許可されていません。最後までおつきあいできないのが残念です」

輸送船テンオに乗り込む面々は、通信モニター越しに話す艦長、本山美由紀の表情が陰る様子を目にしていた。

「いいえ、艦長。ここまでのご助力に感謝します。とても快適な航海でした」

なのはの言葉に美由紀は多少の笑みを浮かべ、

「ありがとう、なのはさん。それでは、いつまでも別れを惜しんでもいられません。貴船の航海の無事を祈ります」

なのは達、元特務機動中隊の面々は美由紀に対して敬礼を贈り、美由紀は敬礼と共にモニターを閉じた。

ハッチが開かれ、テンオが時空世界を飛び立つ様子をレーダー越しに眺め、美由紀は一つだけ溜息をついた。

「行つてしまいましたな」

艦橋の艦長席の側に立つ、彼女の副官であるサライト・カサラ戦佐補（三佐に相当）はそんな彼女に声をかけた。

「ええ。そうですね。とても勇敢な人たちでした」

美由紀は彼からコーヒーを受け取ると、砂糖とミルクをたっぷり注ぎ込みそれを口にした。

「だが、あいつ等、どうも今の地球の状態を知らない様子だったぜ」
彼らの後方に立つ青年、この艦の参謀を務める秋月優一戦佐補はアークソルジャーのレーダー範囲から消えていくテンオを見つめてそう言った。

「艦長と秋月君の生まれ故郷、地球ですか。あの中にもあちら側の地球出身者も多くいたようだな。あれを見てどう思うことや」

サライトは15年前の事件を思う。

「とにかく、幸運を祈りましょう。私達に出来ることはそれだけです」

「だな。操舵士、進路をプラネタリエリア218号へ向けろ、通常航海任務に戻る。アークソルジャー発進」

秋月は、操舵士にそう伝えると共にCIECコンバット・インフォメーション・センターに通信のやりとりを開始した。

背後に広がる地球を含む宇宙に背を向け、その巨体は時空間の海をゆつくりとこぎ出していった。

テンオが転移した場所は漆黒の闇を満点の星空が彩る空虚な空間だった。

「座標修正。天の川銀河太陽系第三惑星衛星近傍」

地球出身者にとつてそれはとてもなじみの深いものであった。

装甲の開かれた窓の外には節くれだらけの表面を見せる月。今は太陽が裏へ隠れているためか、それは黒々とした様子を見せていた。そして、その向こう側に浮かび上がるひとときわ大きなものがそこにあつた。

「地球だ。こうやって見るのは初めてだな」

それをいち早く目にした朱鷺守は、写真やテレビで見るそれとは格別の美しさを放つ生まれ故郷に感嘆の念を抱いた。

「私は、一度だけ。幼い頃仕事で見たことがあります」

なのははそのときと全く様子を違えないその光景に安心を覚えた。あのときは友達を助けたい、これ以上の悲劇を防ぎたいという思いばかりでそれをゆつくりと堪能する暇はなかった。

状況はあのときと同じ、いや状況だけなら今の方が悪いかもしれない。それでも、地球の青さに心を奪われることができる分、自分にも少し心の余裕ができたのかもしれない。

なのははそう思っていた。

「地球へ降ります。大気圏を突入しなければなりませんので、かなりの揺れを覚悟してください」

カーティスはそう通信すると、さつきまで開いていた窓の装甲板を再び閉じ、その舳先を地球へと向けた。

「地球、A3297号世界主星か。いやな事件だったぜ」

カーティスはそう独り言をつぶやくと、通常空間動力を起動させそのスロットルをゆつくりと押しやった。

船の内部にブースターの奏でる振動が重苦しい音として響き渡り、そしてしばらくすると別の振動が船の外部からすべてを揺さぶった。「宇宙で感じる地震か。あまり、心地のよいものではないな」

エルンストは大気の摩擦によって生じる熱がわずかながら船内に漂ってくる様子を感じながら、ただそれだけをつぶやいた。

「大気圏突入完了。レイリア特務捜査官。どこへ行きましょうか？」
振動が和らぎ、それが完全になくなった頃カーティスは通信機越しにレイリアに声をかけた。

「日本の首都、元東京シティーだ。そこに協力者がいるとのことをベルディナ大導師から聞いている」

カーティスはわかりましたと伝えたと再びそこを目指して舵を切った。

最初それを見たときにはそこがどこなのか理解できなかった。ひよつとすれば、目的地に向かう前に立ち寄った休憩地なのかとも思った。

できることならもう少しまともな場所で休憩がしたいと思った。

こんな、廃墟になったビル群が押し寄せる波のそこに沈んでいるような場所ではなく。

「到着しました。日本国元首都圏上空です」

カーティスにそう伝えられたにも関わらず、なのははそれを信じることはできなかった。

「どうして、こんなことに。これじゃまるで……」

水没した都市群の向こう側にはその浸食から逃れられた陸地が見えるが、そこもまた人の気配のない荒れ果てた荒野となっていた。
「見えるかな、カーティス。あの山の麓から数キロほど手前。小高い丘になっているところがあるだろう。とりあえずあそこに降りてくれ」

レイリアは、窓の外とベルディナから渡された地形図、そしてこの周囲の略図を比べながらカーティスに指示をした。

エルンストはそれを見た、確かに彼の視線の先、ひととき高い山の裾野に広がる森林より相当手前には頂上がぼっかりと開けた丘が見える。

森はその丘の奥で止まっており、わずかな深緑が蔓のようにその丘にまわりついているのだった。

あれなら、船体の上部に何かかぶせれば空からのカムフラージュにもなる。

「着いたらいろいろと説明しますので、今は僕の指示に従ってください」

未だ崩れ去った町並みをただ呆然と眺めるなのはと朱鷺守にレイリアはそう伝え、カーティスに指示を送った。

急斜面に獣道が入り組む丘を下った先には、比較的まとまな町並みを残した住宅街が広がっていた。

いや、まともと評した比較対象が水没した都市群であるからそう見えただけなのかもしれない。実際、その光景を初めて見たときにはここが人の住まう場所なのかと息をのむような様子だったに違いない。

レイリアが案内したその住宅街の一角には、崩れつつも未だ神秘的な静謐性を保つ屋敷があった。

「ここは」

その門構え、その先にある荒れ果てた庭を見つめ、朱鷺守は息をのんだ。目を見張り、なぜここがここにあるのかと膝をふるわせた。「隊長？ どうしたのですか？」

それを後ろから眺めていたエリオンは彼の様子の変貌にいち早く気がついた。

「なんてこった。ここは、俺の家じゃねえか」

門のそばにある煤けて文字の読み取れない表札に指をこすりつけ、何とか現れたその文字に、なのはは声を上げた。

ほかの者にはそれが読めなかったが、彼女にはそれがはっきりと見て取れた。

『朱鷺守之屋敷』

それにはそう書かれていた。

「どちら様ですか？」

門前がにわかに騒がしくなり、それに気がついた家主が庭先から姿を見せた。

そして、彼女が彼の姿を目に写したとき、彼女は手に持っていた竹箒を取り落とし、静寂に沈む屋敷に乾いた音が響き渡る。

「お兄様……」

彼女は口を手で覆いながら、朱鷺守棋理を見つめた。

「……七葉……俺の、妹」

朱鷺守棋理は、自らの妹朱鷺守七葉から視線をそらしたただその場にうつむき沈黙した。

第二十二話 朱鷺守

朱鷺守棋理の妹、朱鷺守七葉は兄との再会を祝うことなく黙って彼らを奥の間へと導いた。

垣根は崩れかけ、母屋の屋根や壁も一部が破壊されていたが、整備が行き届いた家屋には人の生活している気配があった。

しかし、家人の気配がしない。

（こんなところで一人で生活をしているというのか、七葉は）

朱鷺守棋理は無言で前をいく妹の小さな背中を眺め、彼女の境遇を思いやった。

夕闇が庭先を覆い始める頃、畳の間に客人を案内した七葉は蝋燭を持って再び姿を見せた。

「申し訳ございません、お客様方。ここのところ、発電設備が不調でして。このような明かりしか用意できません」

部屋の中央におかれた彼女の細い腕ほどにもある蝋燭はそれでも貴重なものなのだろう。

その幻想的なオレンジの光とともに部屋の四方の壁にはそこに座る者達の影が映し出される。

「それで、お話しただけませんか？ お兄様。なぜ……、なぜ、15年前にお亡くなりになったお兄様がここにおられるのですか」
七葉の言葉に呼応して全員の視線がレイリアの元にかき集められた。

誰も何も言わない、ただその視線だけで彼にことの説明を命じていた。

「わかった。話すよ。だから、そんな目を向けなくてくれ」

レイリアはそれでもおどけてみせるが、それに頬を緩ませる者は誰一人としていなかった。

「すでにお察しの通り、この世界。この地球は、高町一尉や朱鷺守

「尉が知っている地球ではない」

なのはと朱鷺守棋理は無言で頷いた。

「ここは、何というのかな。たぶん、一番しっくりくる言い方をすれば二人の知る地球の平行世界の地球だということなんだ」

そして、レイリアは続けた。この地球で何が起こったのか。なぜ、この地球はこんな状況になってしまっているのか。

「15年前にね。僕がまだ子供だった頃の話だ。この地球で大規模な時空災害……いや、時空犯罪といった方がいいかな。それが起きた。だから、この地球は滅びた。僕はそうきかされている」

レイリアはそういうと、七葉が差し出したお茶に手をかけた。

「地球規模の時空災害でした。膨大な数の人々が亡くなり、今でも多く者がここで苦しい生活を続けている。そして、私のお兄様はそのときにお亡くなりになられた」

七葉は丁寧な手つきで茶を点てながら、静かに言葉をつないだ。

「平行世界とか、時空犯罪とか、難しいことは私にはわかりませんが、あなたは七葉のお兄様ではないということですね」

七葉はそういつて茶を棋理の元へ差し出した。

朱鷺守棋理はそれに手をつけることができなかった。

「向こうの世界の七葉は、15年前に死んだ。殺された。だから、俺はその復讐のためこの身を血に染める決意をした」

朱鷺守棋理はそのときを思い出していた。ただ無力だった日々。最愛の妹の死を背負いながらその敵だけを思い描いていた日々。

「俺はその日々を間違っていたとは思わない、少なくとも俺はそうしなければ生きてはいけなかった」

朱鷺守棋理は面を上げることができず、己の手を握りしめた。
「会わなければよかった。そうすれば、揺らぐことはなかった」

まるで、懺悔のような言葉をはき出す朱鷺守棋理を見て、エルンストは結局このものも自分と同じような道を歩いてきていたのかと感じた。

自分だけではない。それは当たり前のことだったが、エルンスト

にとってはなぜか新鮮な驚きがあった。

「ですが、私は、七葉はお兄様ともう一度こうしてお会いできて嬉しく思います」

七葉はそういうと、朱鷺守棋理の両手を握りしめた。

「俺もだよ、七葉。俺の知るお前ではないにせよ、こうして再び会えたことをうれしく思う」

「うれしいですわ、お兄様」

彼女の両手を握り返す彼の両手を胸に抱きながら、七葉は静かに涙をこぼした。

七葉が立てたお茶を飲む朱鷺守棋理は、やはり七葉の入れる茶が一番だと思ふやきながら、レイリアから今後について話を聞くこととした。

レイリアの答えは実に簡素だった。

「敵を迎え撃つ。連中は必ずここに現れて僕たちを消そうとするはずだ。それを撃退し、追い返し。そして、連中の居場所を特定させる。ベルディナ大導師がそのために今奔走しているところだ」

敵を探すためのもっとも手早い方法。それが、己をさらし罠として敵をおびき寄せることだ。

しかし、それは多大なリスクを背負うこととなる。敵を全滅させず、撤退させつつ自分たちは罠としてほとんど無傷で生き残らなければならぬ。

レイリアはエルンストに目配せし、エルンストは小さく頷いた。

その話が一段落したところで、部屋の天井からつり下げられていた電球に光がともった。

「どうやら、発電機の調子が元に戻ったようですね。少し様子を見て参りますので、お客人の方々はどうぞごゆるりとなさいませ」

七葉はそういうと立ち上がり、静かに部屋を後にした。

「俺も行こう。案内しろ」

朱鷺守棋理も七葉について部屋を出る。

「エルンスト、少し話をしよう。このあたりは結構おもしろいものが多そうだよ」

エルンストの隣で彼に声をかけようかどうか迷っていたアリシアを無視してレイリアはそういつてエルンストを連れ出してしまった。

「……先を越されちゃったね、アリス」

なにやら同情したような目を自分に向けるエリオンにアリシアは、
「うるさいわね」

といってその頭に拳をおろすと、足音を荒げて部屋を出て行ってしまった。

「なあ、なのは。あたしは腹が減ったな」

ヴィータはずっと正座でしびれた足をもみほぐしながらだらしく足を開いた。

「そうだね。船から食べ物をとってこようか？」

なのはは、彼女の足をあわてて閉じさせようと必死のようだ。

「だったら僕も行きます」

エリオンは一人でいるのも癪に思い、二人についていくことを決めた。

「そうだね、一緒に行こうか」

「はい。なのはさん」

そうして、なのは、ヴィータ、エリオンは連れだって屋敷を後にした。

第二十三話 二人の反撃

朱鷺守の屋敷での歓待は身に余る者だとなのはは感じていた。船に積まれていた最低限の食材を吟味し、七葉が真心込めて作った料理は実に素朴な味わいで、今は遠い空の元にある母の姿を思い出すほどだった。

朱鷺守棋理は、終始仏頂面でそれを食していたが七葉にどんお代わりを頼む姿は見ていてほほえましい者だった。

しかし、気になることもあった。夕食が始まりしばらくすると、そのにおいにつられて仲間の面々も徐々に姿を見せたが、その中にはエルンストの姿だけが見えなかった。

「ねえ、レイリア。エルンスト君はどこに行つたのかな？」

なのはの問いに、

「何でも、感覚を取り戻す。とか言つて森にこもつてしまいましたけど？ 呼び戻しましょうか？ たぶん、無駄だと思いますけど」

レイリアは飄々とした面を崩さず頼に米粒をつけながら答えた。

結局、代わりになのはがエルンストに連絡をつけようとしたが彼は無線封鎖を行っているようで、呼び出し音さえもかからないという具合だった。

食事も終わり、朱鷺守の屋敷の広い浴場で久方ぶりの風呂にたっぷりとそれまでの疲労と汗を流した面々はそのまま誰が先とも言わず、あてがわれた客間で眠りこけてしまった。

フクロウの鳴く声が森の中を響いていた。エルンストはその声を聞き、その声を暗号代わりに使つてもいいなと思つていた。

深夜の闇に沈む森の中にはそれこそ何の光も宿らない。時折ざわめく風の音に耳を澄ませても、それに人や動物の足音が混じることはない。

エルンストは時折訪れる眠気を刺激的な味のする飲物でやり過ご

しながら、傍らに置く【ストライク・ビューワー】に意識をやった。
(周囲に敵反応なし)

【ストライク・ビューワー】の答えに再び監視に戻る。先ほどからこの繰り返しだった。

レイリアがなぜエルンストを誘い外へ出たのか。それには全く他意のないことだった。

「敵はいつ来るかわからない。だから君に監視をしてもらいたい」

正直なところ、エルンストもすでにその疲労はピークに至っていたが、それでも行わなければならないことであれば彼は全く躊躇しない。

そして、今に至るまで彼の期待に応え続けた。

夜明けはまだ遠い、敵が訪れるとしたらどのタイミングになるだろうと彼は考察した。【コールド・アイズ】から伺える朱鷺守の屋敷にはまだいくらかの光が灯っているようだった。

まだ、誰かが眠っていないのだろうか。それとも、敵を欺くための偽装か。

もしも、自分たちの敵がすでにこの地に進入しているとすれば、もしも自分がその敵だと仮定した場合どのタイミングで奇襲をかけるだろうか。エルンストは考え続けた。

(俺なら、しばらく二、三日は監視を続ける)

エルンストはそう答えに至った。狙うべきはこちらの緊張がもつとも緩んだときだ。それは、単に朝起きたとか、食事を取り終わつたときだとかそういうことではない。

敵の襲撃があることはすでにわかっている。だが、それがいつになるかわからない。人間とは不思議な者で、どのような状況に立たされていてもある時を過ぎればそれが日常となり、ふとしたきっかけで緊張が一気に緩んでしまうのだ。

そして、それが訪れるのはおそらく三日後か四日後とエルンストは予想していた。

そして、敵はその間は闇に乗じて監視をするのみにとどまるだろう。

しかし、エルンストはそれだけの時間を与えるつもりはなかった。今、【コールド・アイズ】の視界の隅で何かが動いた。

エルンストは、【コールド・アイズ】にそのまま監視を命じ、傍らのライフルを取り寄せ【ストライク・ビューワー】をのぞき込んだ。

（視界変更。暗視モニターへ）

【ストライク・ビューワー】はその表示を、赤外線と魔力反応を検出するものへと変更する。

（目標補足。データ収集開始）

暗闇に浮かび上がった人型の赤い物体にフォーカスを合わせ、彼はそれがいったい何者かを探り込んだ。

それが敵である保証はなかった。ひょっとすれば、にわかに入が集まる朱鷺守の屋敷を怪訝に思い様子を見に来たこのあたりの住民であるかもしれないからだ。

エルンストは慎重にその動きを探った。

まだ、主立った魔力の反応はない。少なくともそれは通常の一般人が普段から放出している魔力の量とパターンを告示している。

（殺すべきか。殺さざるべきか）

エルンストにとってそれが最たる問題だった。

しかし、今のままではその判断は付きそうになかった。

エルンストは、屋敷を伺い続けるそれを朝日が昇るまで監視し続けた。

夜明け後、朝食のための食材を取りに行くと言ってレイリアは丘の頂上の輸送船へと足を運び、その隙間に挟まれていたエルンストの言つてを読み取った。

「屋敷の南に不振な影あり……か。早速、きたわけだ。監視体制を作っておくべきだね」

打ち合わせ通り、レイリアはその返答を書いた手紙をその隙間に滑り込ませ、格納庫に保存されていた食材を手に丘を下った。

そして、深夜エルンストは再びその影を同じ場所で発見した。

レイリアの返答の通り、かなり隠密性の高い監視装置がそれのそばに置かれ、エルンストは「ストライク・ビューワー」によってその情報を入手した。

とたんに浮かび上がるその詳細なディテールにエルンストは確信を覚えた。

（こいつは、敵だ）

遠くからは確認できなかったその懷から、周りとは違い、ひときわ多くの魔力を放出するものが潜んでいた。

それは間違いない、魔術戦闘を行うためのデバイスだ。

エルンストは、ライフルを構えなおし、初弾を装填した。

（弾頭予測）

情報の少ないフィールドであったが、地形的な複雑さは少なく、しかも距離は1600m程度。

この距離で外しては狙撃手の名折れだと意気込み、彼は呼吸と鼓動を制御し始めた。

いつもの調子で弾を発射すれば、おそらくそれは相手を貫き、その垣根をも破壊してしまうだろう。それではまずい。

密かに囷役になってくれている彼らに申し訳が立たない。

ならば、普段よりも低速で、体内ではじけ飛ばずに停滞するものを選ばなければならない。

（特殊軟化弾をセレクト。弾速最微速。弾頭予測修正）

【ストライク・ビューワー】は薬室に装弾し直されたその弾頭のデータを読み取り、スコープのレティクル（十字照準）に映し出された弾頭の飛翔予測曲線を修正した。

風はほとんどない。

エルンストはそれを狙い、引き金を引き絞った。

風に紛れるほどの微音を立ててそれは闇夜を疾空し、その肩口を貫いた。

そして、エルンストはそれがその次にどのような行動に出たかを確認することなく、ライフルをおろし、地面に伏せる身をさらに低くし、わずかに吹く風の音に紛れ移動を開始した。

明日の晩からは、自分が目標になるだろうと予測し、彼は慎重にあたりの空間に意識をとけ込ませ、【コールド・アイズ】を使用せずその情報を意識のうちに取り込み始めた。

朝、誰よりも早く起きたレイリアはいち早く南の門を調べ上げ、そこに付着した血痕を隠匿した。

そして、朝食時まで二度寝をし、昨日と同じように輸送船へと向かった。

「一人を排除、そちらの連絡を待つ……か、いよいよだね」

レイリアは手早く手持ちのメモ帳に、「ベルディナ大導師からの返答が在りしだい連絡する」と記すと、昨日とは別の箇所をそれを滑り込ませた。

彼の気配は感じない。この周囲にはいないのか、完璧に環境と同化しこちらが感じられないだけか。

とにもかくにもレイリアはエルンストのすべてを信頼し、今は仲間達をごまかす続けることが自分の仕事だとしてその場を離れた。

ざわざわという草木の揺らぐ音が山中に響き渡る。風が吹いていた。この風がよるまで続いてくれないことを祈りつつ、エルンストはいい加減限界にきつつある意識を、薬さえも利用して呼び起こしながら、その中で動きを探っていた。

日中から何となくその気配はあった。どこか自然とは違う感覚がこの森の中に潜んでいる。

それは、遠目でレイリアの動きも観察していたようだったが、彼が残した手紙には気がつかなかったようだった。

しかし、エルンストもまた監視下にある輸送船に近づくことができず、レイリアからの返答を確認することはできなかった。

しかし、エルンストは感じていた。敵の中に専属スナイパーと超一流の偵察員はいないことを。

確かに、自分たちを監視し暗殺するために送り込まれた相手でもあり、その気配の隠し方と潜伏行動の取り方はどうのいつたものだった。

しかし、どうやら彼らは全く準備のない相手の寝首を刈ることを得意としても自らと同じ立場にして待ち受ける潜伏者に対する対策は不十分だったようだ。

（ならば早々に撤退するべきだ。少なくとも俺ならそうする）

自分たちのようなものは、対策が不十分であるなら何の未練もなく退却し、後日完璧な準備をすませてから相手を上回る戦術をもって相対する。

つまり、連中は素人だとエルンストは感じていた。

いや、時空世界屈指の偵察狙撃手であるエルンストが評価するなら誰もが素人であるとされるだろう。

しかし、相手は複数。エルンストが感じているその数でも少なくとも三人はいる様子だった。

エルンストは、すでに【コールド・アイス】を待機状態へと戻し、それを情報収集に使っていない。ではなぜ、彼はそこまでのことがわかるのか。それが、彼の持つ希少能力^{レア・スキル}の一つ、【空間掌握】の力だった。

遠くから女性の話し声が聞こえる。これは、なのはとヴィータの声だった。

敵の三人の間に緊張が走る様子をエルンストは感じることができた。やはり、暗殺を生業にする彼らも、エースの中のエースと誉れ高い彼女たちを前にすると気後れしてしまうのだろうか。

だが、彼らはけっしてそれらに手を出そうとしなかった。

日没まではまだ時間がある。

エルンストは、自分に対して愚痴を言い始めた二人の会話を頭の隅で聞き取りながらゆっくりと移動を開始した。

日没後、その前に動き回った成果としてエルンストは敵のおおよその位置をつかんでいた。

（排除が目的ではない。敵を違和感なく撤退させることが目的だ）
レイリアと何度も何度も確認したそれをもう一度頭に刻み込み、黄昏に沈む空を見上げ、闇の到来を待った。

広葉樹とシダ植物が生息する森は、とりわけ風の音を強く響かせる。結局日中の風は夜になってもその勢いを衰えさせることはなく、少し寒々しい空気を作り出していた。

（動いたか）

せめてもの眠気をごまかすため、半分だけ意識を閉ざしていたエルンストはその動きに呼応してすべての意識を表へと誘った。

（右から一人。左に二人、こっちはタッグで動いているな。他には……動きなしか……）

彼らは通信を取り合っていないようだ。その程度の常識は持ち合わせているようで、エルンストは安心した。

森の中でひととき大きな巨木に背を預けるエルンストは、右側にライフルを掲げ、それを立てた膝の上に置き、右手はグリップにその指をトリガーに添え、空いた腕は頬で固定された銃床を支えた。

（初弾装填。弾頭通常、弾速通常）

昼頃から休むことなく広げていた【空間掌握】により【ストライク・ビューワー】は十分すぎるほどの情報を蓄えていた。

エルンストは、その身に漂う気配を周囲の環境にどうかさせそのときを待った。

最初の目標は、地面にはいつくばりながら周囲を油断なく観察しつつ彼へとどんどんと近づいていく。

その先に待つものは何か、それさえも考慮せず。

（距離670。障害物なし。オールグリーン）

狙う場所は、膝の一点。

エルンストはその動きが一瞬止まったことを確認し、トリガーを引き絞った。

音速を超えて飛翔するそれは、わずか0.3秒のごく短時間でそれにいたり、その衝撃波が生み出す甲高い音をあたりにまき散らした。

足を打ち抜かれ、それが体から離れ空を飛び、彼は一瞬で意識を失った。

（賢い判断だ）

とエルンストは思った。このような状況では、無様に声を荒げ自らの立ち位置をこれ以上さらすよりは素直に気絶した方がいい。

しかし、それは味方に対して自分は無事かどうかを伝える手段を失ったと言うことだ。

おそらく、残る二人は彼を死んだものとして扱うだろう。

いや、連中に負傷者を救護する気概があるのかどうかは不明なところ、たとえ負傷して行動不能であることがわかったとしても彼に残された道は、見捨てられる運命のみだったのかもしれない。

エルンストは雑念に扉を閉めると、巨木より背中を浮かせ、今度は自分が地を這う虫になる番だった。

エルンストは敵を甘く見ていたことを思い知らされた。

先ほどまで行動を同じにしていた残りの二人は、エルンストの射撃が終了した時点で散会し、片方はその場を監視し、もう片方は負傷したと思われる仲間の方へと向かっていく様子だった。

（負傷した仲間を回収してきた方をしとめるか。それとも残った方をしとめるか）

エルンストは一瞬迷った。

しかし、前者は外道の所行だと判断し、すぐさま後者を選択する。外道、彼を知る人間が聞いたら何を今更とあざけるだろうが、そ

れは彼にとって唯一持ち合わせる誇りでもあった。

（俺は殺人者ではあるが、殺人鬼ではない）

絶対に無用な殺しは行わない。目的が達成されればそれ以上のことは行わない。それが、人を撃つ狙撃手の持つ普遍的な誇りでもあった。

敵はどこまで行けば撤退を開始するだろうか。すでに敵はその戦力の五〇パーセント失ったはずだった。一人は片腕を亡くし、もう一人は片足を亡くした。すでに戦える状態ではない。

エルンストが彼らを殺さなかったのは、一つの理由がある。彼らを負傷に押さえておくことで、残りの二人の足を押さえるということだった。

いや、もしも彼らは最初から五人のチームで、今は最初の者を救護するために一人が抜けている状態だったとしたら。

ならば、後一人、やるか、やらないか。

もしも、敵が五人いるのなら。最後の一人を生かしておく道理はない。

（さあ、どう出る）

散会した二人のうち一人は、すでに足を吹き飛ばされた者のそばで応急処置をすませ、すでに撤退に入っている。

このまま最後の一人がどう出るか。

エルンストはその行動をつぶさに観察するため、それにさらに接近した。

そして、それが仇となった。彼は接近しすぎた。

距離320 m。

エルンストはライフルを構え、それをのぞき込んだ。

「……！！」

エルンストは口から漏れそうになる声を何とか押さえ込み、そのまま音も気にせずその場に倒れ込んだ。すぐ上を飛び去っていく銃弾の嵐。

（しまった！！俺としたことが！！！！）

発見されたと感じたときにはすでに遅かった。

断続的に発射されるそれは、徐々に徐々に射線をしたへしたへと移していき、後数センチで彼の背中をえぐるほどのところまで持つて行かれた。

そして、その瞬間それは止まった。

弾切れ。

ひきっぱなし

フルオート射撃でうち尽くした彼は、手早く弾倉の交換に入ろうとしたがそれだけの間隙があればエルンストにとっては十分だった。エルンストは、そのまま身を転がせ、派手に立てる音にもかまわず丘を転げ落ちていった。

さすがに敵もその行動を予測できなかった様子で、不規則な機動で自分へと近づいてくる彼に対して必死に銃弾を浴びせようとするが、焦る手つきではそれに当たるはずもない。

カムフラージュネット

エルンストは転げ落ちる際にライフルを手放し、偽装網を脱ぎ捨て、腰に差されたナイフを取り出し、敵へと一気に躍りかかった。

ケリ

立ち上がる際に繰り出した脚撃によりエルンストは敵の武器を明後日の方角へはじきとばし、振り向きざまに反対の足で回し蹴りを放った。

彼は、それを脇に食らい、そばの巨木に身を打ち付けられ激しく咳き込んだ。

エルンストはそれを見逃さず、彼の手を取り足を固め地面へと組み伏せた。

「お前は間違いなく強敵だった!」

エルンストの最後の言葉を彼、いや”彼女”はどうとらえただろうか。エルンストは何の躊躇もなく、目を見開きまっすぐと自分を見つめる彼女のみぞおちの僅か上にナイフを突き立てる。

ズリユツという不快な感触とともに突き刺されたナイフの両脇から赤の飛沫が夜空を染め上げた。

第二十四話 決意

夜明けを待ち、エルンストは自らの手で殺害した彼女の遺体を丁寧に葬るとその足で朱鷺守の屋敷へと向かった。

「ふう……今回は、さすがに疲れた」

エルンストは、自らの体の状況を確かめ取り合えず風呂に入りたいたと思った。この三日ほど彼は常に行動を制限していた。つまり、それは、風呂に入らない体を洗わないと言うことではなく排泄さえも控えなければならぬ状況だったのだ。

さすがに股間に設置されたパックがあるためそれらのおいをあたりにまき散らすことはないが、不快であることこの上ない。

そう思い、門をくぐろうとした彼に巨大な影が襲いかかった。

「てめえ、今まで何処に行つてやがったあああー！！！」

その影は天空を埋め尽くす巨槌として彼を押しつぶそうとし、エルンストは持ち前の勘の良さからそれをぎりぎり回避する。

ヴィータが鬼のような形相でその身を真つ赤なドレスに包み、エルンストをにらみつける。

そのあまりの恐怖に彼は、それに襲いかかるさらなる恐怖への反応が遅れた。

「デイバイイイーン……」

圧倒的に練り上げられる魔力。それが波動となって自分自身を襲いかかることを感じた。

そして、その次の瞬間耳を打った、カートリッジがロードされる音が三つ。

「バスタアアアー！！！」

その薔薇色の波動の向こうには、まさに白い衣服に身を包んだ悪魔ともとれる彼女がそびえ立つ。

エルンストはなのはによって放たれたその波動に戦慄を感じた。

（まずい、あれは非殺傷設定であっても飛ぶ！！！！）

ヴィータの巨槌をよけて体制の崩れた彼だったが、それでも腰をひねりきり足が折れることもかまわず地面を蹴り飛ばした。

ジュツといういやな音が自身の裾から響き渡り、彼は何とかそれを避けきったと思ったが、天空から飛来する迅雷に、またもや反応が遅れた。

「エルンストの……馬鹿ああー!!」

その瞳に蓄える涙とともに美しい軌跡を描き、アリシアの持つ突撃槍型デバイス【ストライクイーグル】はその名に恥じぬ速度を持つて地に伏す獲物に爪を立てる。

いったいその切っ先に何を仕込んでいたのか。それはエルンストの体をギリギリ反れ、地面へと突き刺さったと思いきや、それを起点にして大爆発を起こし、エルンストの体を遠慮なく吹き飛ばした。
「が、はあ！」

地面にたたきつけられたエルンストは肺の中だけとは言わず、腹からもすべての空気をはき出し、一瞬意識が飛びかけた。

「おっと、まだ気絶するには早いぜ」

立ち上がるうとするエルンストを捕まえて、その間接を決めた朱鷺守はそのナイフ【ナイトホーク】を彼ののど元に押し当てた。

「話はレイリアから聞いている。まあ、よくやったといたいところだが」

朱鷺守は怒りを押し隠さず、さらに間接を締め上げナイフを首筋に深く押し当てようとする。

「一言ぐらい相談してくれてもいいんじゃないかしら？ 私たちは、そ・ん・な・に、頼りにならないのかな？」

すっかり殺る^や気を見せるのはは、笑顔の上どこかまるで全身にブットイ青筋を立てている様子だ。

その手に持つ【レイジング・ハート】をすでにエクシードモードにしているところから、ひよっとすればエルンストを殺すつもりなのかもしれない。

「僕も、心配しました」

着陸後、その場に泣き崩れるアリシアの背をなでながらもエリオンは自身の双銃型デバイス【トムキャット】を構えその銃口をエルンストに向けていた。

「てめえは、何でもいつも一人でやろうとすんだ！　もっとあたしらを頼れ。仲間だろ！！」

ヴィータは城砦のごとく巨大な【グラーフ・アイゼン】を元の規模に戻し、エルンストのそばの地面をそれでたたきつけた。

そういえばレイリアの姿が見えないなど、周りを見回したエルンストだったが、その彼はすでに縁の側の植え込みで伸びきっているようだった。

エルンストは自分の運命を覚悟し、素直に気を失うこととした。

砂の入った頭陀袋のごとくぼろぼろになったレイリアとエルンストが、ようやく目を覚ました頃なのは達は客間でくつわを並べていた。

「先ほど、ベルディナ大導師より連絡がありました」

畳敷きの部屋のもととも上座に座るレイリアは押し黙る皆の前で辞した。

言葉少なく述べられたそれを耳にするだけで、その場にいた全員がその意味を正確に理解できた。

「つまり、決戦ということか」

朱鷺守の静かな言葉は間違いなくその場に座る者達の心を乱した。「いよいよってことね」

今まで後手に回り、ストレス全開でいらしていたアリシアもようやく訪れようとする鉄火場への期待に眼を輝かせた。

「そこで、僕から皆さんに、正確にはエルンスト以外の皆さんに提案があります」

アリシアの啖呵に戦意を高める皆に、レイリアはにっこりと笑みを浮かべそれに待ったをかけた。

「なに？」

なのはは出鼻をくじかれた不満が、レイリアの今までの行いのためか、彼を見る視線は幾分冷たい。

嫌われたものだ、とレイリアはそれと同種の冷やかさを持つ方々の視線を適当にいなした。

「ここで手を引いてください。この先は後には戻れない道です」

沈とした空気が一面に張り巡らされた。

「どういうことだ？」

朱鷺守の声は激昂を何とか押さえ込んだ雰囲気を持っていた。静かに低くはき出された声は、しかし、レイリアにおそれを抱かせるには十分で、彼は密かに冷や汗が背中をたれるのを感じた。

「まあ、最後の確認というものです。ここから先は一切の保証がもてない。死ぬ可能性の方が高い。いや、運良く生き延びられたとしても、社会的な人格はすべて殺されることになるでしょう。場合によれば時空連合に亡命していただくことにもなりかねない」

亡命。その言葉はあまりにも重い響きを持っていた。つまり、レイリアはこれより先に進むためにはそれまでの自分をすべて捨てる覚悟をもてと言っているのだ。

「幸い、今ならまだ皆さんは僕たちに仕方なく協力しているという口実を使うことができます」

レイリアはなのはの方を向き、

「高町なのは一尉。あなたは、娘と恋人が人質になっていることを理由に裁判所に訴えることができます。現在、高町ヴィヴィオとユニ・スクライアを我々が保護観察に置いていますので、我々はそれを人質としているという言い訳にできるというわけです」

なのはは息をのんだ。

「八神ヴィータ二尉も同様、八神はやて他ヴォルケンリッターの面々。双子のリーファは孤児と言うことでしたが、育ての孤児院の園長夫妻ということではどうでしょうか？ 朱鷺守棋理一尉は当然ながら世界は違えども妹さんを入質に取ることもできますし。ここにはいませんが、カーティス・ボーマンも故郷のお姉様とご両親をこ

こちらで預かっています。今なら、それらを理由に当局への言い訳にすることが出来る。すでにベルディナ大導師を通じて調整済みです」
レイリアは言った。ここから先に進むにはすべてを捨てる、しかし、今ならまだ逃げる道が用意されている。

「ちよつと待てよ、あんたとエルンストはどうなんだ？」

ヴィータは彼の言う逃げ道の中にエルンストとレイリアの名前が存在していないことを言及した。

「エルンストに関しては、申し訳ないと言っしかないね。君は、すでにこちら側に深く入り込みすぎている。もちろん、その原因の多くは僕たちにあるんだけど。ベルディナ大導師でもこればかりはどうしようもなかった」

エルンストは、

「まあ、当然だな。逃げ道が用意されていても今更何処にも逃げ道はないからな」

といって頷いた。

「そして僕は、こちら側の人間だ。もとより逃げ道などない」

レイリアの言葉にはすでに決意をすませた者の気迫が込められていた。

「僕たちは今から6時間後、地球時間13:00にここを出発します。それまでに決めておいてください」

レイリアはそう言い残すと客間を後にする。

エルンストも黙って彼について客間を出ようとするが、そんな彼の裾を何者かがつかみ取った。

「……どうした、アリシア」

エルンストのジャケットの裾をつかんだアリシアは、うつむいたまま小さな声で懇願する。

「今日は、あたしの側にいてほしいの」

エルンストがなぜと聞くと、アリシアはキッと彼をにらみつけ、
「デ、デバイスの調整よ。最終調整。今ぐらいしか時間がないでし
ようっ。」

「しかし、お前はそれでいいのか。もう戻れない道だ」

「あたしが逃げるでもおもってんの？ 馬鹿にしてるわ」

「そうか。だがデバイスの調整はエリオンとすればいいのではないのか？ 最終調整というよりは、連携の最終確認をした方が有意義だと思うのだが」

「エ、エリイとはいってもやってるからいいの。たまには違う人の意見も取り入れなくちゃいけないでしょう！？ とにかく付き合いなさい！」

アリシアは腕を振り回しながらエルンストを外へと引っ張っていく。エルンストは、一度だけエリオンの表情を伺うが、エリオンは頷いて二人を見送った。

「お前の姉貴も積極的になったな。弟のお前としては少し寂しいんじゃないねえのか？」

朱鷺守は、座布団から部屋の隅の柱に背中を預けながらプカプカと煙草を嗜んでいた。

「確かに、そうですけど。僕たちは今までお互いに依存しすぎてきた。だから、アリスが他の人に興味を持ったことは、僕としては嬉しいと思います。僕らは一度お互いを卒業しなければならぬ。そう思っていましたから」

朱鷺守は思いの外しっかりとした考えを帰したエリオンに感心した。

「なるほどな。お前は、行くのか？ 地獄へ」

「ええ。アリスが行くなら、僕はアリスを守ります」

「よく言った。お前は俺のようになるな。守り続ける」

朱鷺守はそういつて立ち上がった。

「七葉に茶でも入れさせよう。少し待ってな」

立ち去ろうとする彼の背中をなのは止めた。

「朱鷺守一尉。あなたはどうするのですか？」

「俺か？ 俺がこのまま引くわけがないだろう？ 社会的に死ぬ？ 上等じゃねえか、それに亡命生活つてのもなかなかクールでいい

じゃねえか。それにこつちの世界には七葉もいる。万事こともなしだ」

朱鷺守は、まるで胸のつつかえがとれたような豪快な笑い声を上げながら障子を開き、縁側を歩いていった。

「朱鷺守は単純でいいよな。あたしはどうすっかなあー」

ヴィータは座布団を枕にしてごろつと横になった。天井を仰ぎ見るその表情には迷いが含まれてないようにも見えるが、それは彼女の天の邪鬼なポーカーフェイスなのかもしれない。

「ヴィータちゃんは、迷ってるの？」

なのはは正座を崩し、横座りになつてばらけたヴィータの長い髪をいじり始める。

「たぶん、迷ってないんだろつな。だけど、あたしははやての側を離れたくない。ずーっと一緒にいるって誓った騎士だからな。それを割り切るなんてできねえよ」

ヴィータは、ふう、とため息をついた。

「私も、悩んでるのかな。いっそのこと、最初から逃げ道なんて用意してくれなかったらって思うとなんだか納得ができないよ」

「あたしもそう思う。レイリアってやつは最後まで嫌な奴だな。土壇場であたしらの決意って奴を乱しやがって。あー、むかついてきたー！」

ヴィータは、ガアっとうなり、腰で勢いをつけて立ち上がった。

「ヴィータ二尉はどこへ？」

エリオンは客間をでようとするヴィータにその行き先を尋ねた。

「レイリアの所だ。一言ぐらい文句でもいわねえと気が済まねえ」

「だったら、僕も一緒に行きます。アリシアが言ったようにこれが最後の機会になるでしょうから、僕もレイリアからいろいろと聞きたいこともありますから」

エリオンはレイリアと同じ射撃系の魔導師だ。故に、彼から最後の教えを賜る最後のチャンスだと思ったのだろう。

ヴィータは「勝手にしな」といってさっさと廊下を歩いていく。

「みんな強いなあ。私は、だめだなあ」

なのは誰もいなくなった客間に一人のこり、ミッドチルダに残してきた愛しい人たち、培ってきた仲間のことを思いやった。

捨てることなんてできない。だけど、このまま進めばそうしなければならぬ可能性が高い。

「ユーノ君からは、らしくないって言われるだろうな。昔の私なら悩むこともなかっただろうし。やっぱり、変わっちゃったってことなのかな」

なのははゆっくりと畳に体を横たえた。

「みんなの声が聞きたいな。ヴィヴィオ、ユーノ君、フェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃんにすずかちゃん。クロノ君、リンディさんにエイミィさん。六課のみんな。今頃どうしてるのかな。会いたいよ」

決意は決まっている。だが、彼らの顔を思い浮かべることにはその決意のどこかが揺らぐ気がする。

なのははそんな自分の感情をもてあましながら、うとうとと微睡みに沈んでいった。

昼食をそれぞれ別々にとった彼らは、誰も申し合わせることなくそのときを迎えた。

「悪いねカーティス。ずっとほったらかしにしてしまつて。退屈だつただろう？」

ここについて以来ずっと、輸送船テンオにこもり資材の管理と船体の整備を行っていたカーティスはレイリアの労いをありがたく受け取った。

「こいつを放置していくわけにはいきませんしね。むしろ、こいつの側にいられてご機嫌ですよ。俺も、彼女も^{テンオ}」

輸送船をまるで自分の恋人のように扱う彼はレイリアの予想とは

違い、実に楽しそうに振る舞っている。

「もう一仕事してもらおう。コンディションはベストに保っておけ」
ようやくアリシアに解放されたエルンストは、合成蛋白質を口にしながら自身のデバイスの調整に精を出している。

アリシアとの訓練はエルンストにとっても有意義なものとなった様子で、新たに考え出した【クリミナル・エア】のセッティングを行っているようだった。

テンオに搭載された簡易ではあるが性能のよいデバイス調整器に【クリミナル・エア】をつなぎ、先ほどから忙しそうにキーボードをたたいている。

「ねえ、エルンスト。その行の値はおかしいだろう？ ちょっと大きすぎない？」

レイリアはそれを側で見守りながら気がついた箇所に関しては様々に助言をしている。

「だが、これより小さければ弾頭の修正にコンマ12の誤差を残す」「それぐらいは容認できるんじゃない？」

「お前のデバイスならな。だが、俺の者ではコンマ12はでかすぎる。せめてコンマ02ほどにはしなくては話にならない」

「なるほどね、それが君の精密狙撃の秘密ってことか。とすると、他の機能はかなり割を食うことになるね」

「致し方のないことだ」

二人はしばらくそうして意見を交わしつつ、これからのデバイスはこうあるべきだとか、キハイル式の欠点はどうかとかの議論を展開していた。

「お二方。あと、20分ほどで時間ですので。準備をすませておいってください」

カーティスの言葉にレイリアとエルンストは議論をいったん止め、時計を見た。

「時間か」

エルンストは時計から目を上げ、周りを見回した。そこにいるの

はレイリア、カーティス、自分。他にはいない。

「結局、身を引いてくれたってことかな。賢い判断だね」

レイリアはそういつつも少し寂しそうに肩をすくめた。

「いや、そうでもないようだ」

無意識のうちに周囲の状況を把握していたエルンストは、山道を登る複数の気配に気がついていていた。

「よう、そろそろ時間だな」

朱鷺守が木々の狭間から顔を見せた。その後ろには、双子のリーファとヴィータ。そして、朱鷺守七葉が立っていた。

「やあ、皆さんおそろいで。まさか、自殺願望者がこんなに多いとは思いませんでしたよ」

レイリアは喜びつつも憎まれ口は外さず彼らを迎え入れた。

「自殺願望と言うよりは、心中願望者といった方がいいな」

「ああ、なるほど。君は上手いこと言うね。言い直すよ」

エルンストの提案にレイリアは手を打ち、エヘンとのどを鳴らすと、馬鹿みたいに爽やかな笑みを浮かべ、朱鷺守達に向かって言い放った。

「まさか、心中願望者がこんなに多いとは思わなかったよ。君たち、よっぽど気が狂っているようだね。病院に行った方がいいと思うよ」

というレイリアに、ヴィータは「やかましい！！」と言って【グラーフ・アイゼン】で彼の頭を殴り飛ばした。

エルンストは、やれやれとため息をつく、デバイス調整器の電源を落とし【クリミナル・エア】につながれたケーブルを無造作に外した。

「調整はうまくいった？」

そんな彼にアリシアが声をかけ、彼の持つデバイスをのぞき込んだ。

「まあ、まあといったところだ。本当なら、もう少ししっかりとした設備で行いたかったが。一回の戦闘程度なら問題なく超えられるだろう」

「そう、よかった」

すっかり棘のとれたアリシアはそういうとにつこりと微笑んだ。

「お前の姉貴、ずいぶん可愛らしくなっちまったな」

朱鷺守はエリオンにそつと耳打ちし、エリオンもそれに頷いた。

「ところで、高町一尉はどうした？　いないようだが」

エルンストはヴィータの側に彼女がいないことを知り、なのはの居場所を尋ねた。

「あたしは一緒に来てない」

ヴィータはそついうと屋敷への道を見つめた。

「そうか」

エルンストの寂しそうな表情にアリシアは少しなのはを嫉妬するが、自分も同じ感情を抱いていることに何も言えなかった。

「こないかもしれませんね」

後5分と迫った時間にエリオンはそつつぶやいた。

「仕方ないね。みんな、乗り込んでください。出発します」

レイリアは、それに見切りをつけ全員をテンオへと誘った。

「まあ、仕方ねえよ。特に高町一尉は残してきたものも多い。正しい判断だと俺はおもう」

誰よりも先行してテンオへ乗り込んだ朱鷺守に誘われるようにみんな重し足取りでそれに続く。

「皆さん、お気をつけて。お兄様、七葉はお兄様のご武運をお祈りいたします。どうか、ご無事で」

七葉は去っていく皆の顔を一人ずつ確かめ、深く頭を垂れた。

最後に全員の乗船を確認したエルンストは最後に朱鷺守の屋敷を一瞥し、首を振ってそれを振り解くと自分も素早くテンオに乗り込んだ。

「それでは、離陸します。シートベルトを締めておとなしくしていただきます」

カーティスはそついつて、テンオのエンジンを点火させた。

テンオは、身を包み込むネットを自力で引きちぎるとそのままゆ

つくりと上空へその身を躍らせた。

「これより少ししたら、時空連合の回収艇がここに来るから。高町一尉はそれで回収されることになるね」

次第に小さくなる朱鷺守の屋敷を見下ろしながら、レイリアは小さく彼女に別れを告げた。

エルンストもそれを見下ろし、そして、にやつと笑った。

「カーティス。後方のハッチを開け」

エルンストは、レイリアの通信機を奪い取ると急いでカーティスにそれを命じた。

「えっと、そろそろ加速を開始しますので、危険です」

「いいから早くしろ。最後の客がお出ました。」

最後の客、と聞いて皆窓から外を見下ろした。

さっきまで沈黙を守っていた朱鷺守の屋敷。しかし、そこから白い軌跡を伴い上昇してくるものがあつた。

「おい、急げ。早くハッチを開くんだ」

朱鷺守もそう叫び、シートベルトをパージすると後方の格納庫へ続く扉を押し開けてそこに身を躍らせた。

「まったくなのはやつ。主人公は最後に現れるっても、ちつとは場合を考えろつての」

ヴィータは憎まれ口を叩きながらも頬を緩ませ、狭いテンオの船内で赤いドレスのスカートを翻し朱鷺守を追った。

「ごめんなさい。眠っちゃってて、遅れた」

開かれたハッチから吹き出される風に髪を靡かせて、なのはは荒い息に肩を上下させてそこに立っていた。

「ようこそ、高町一尉。飽くなき闘争への道を選んだあなたを歓迎しよう」

エルンストは、柄にもなく恭しい手つきで彼女を迎え入れた。

第二十五話 フォートレス（前）

時空世界、ターミナルエリア4312号 エメリア共和国、政府管轄外空域。

岩山に偽装されたそこは、今となつてはその周囲に無数の飛行体を携える巨大な要塞と化していた。

先行偵察に出張ったエルンストとアリシアはその様子を見てただあっけにとられるしかなかった。

「これは、思つた以上だったな」

「なに？ あのガジェットの数。異常じゃない」

空を埋め尽くす飛行ガジェットの総数はすでに5000を上回っているだろうか。

エルンストはその大半は幻像なのではないかと観察を続けたが、そのどれもが確かな実体と質量を持つことを確認し、敵の戦力規模を思いやりさらに途方に暮れた。

「これでは、地上も制圧されているだろう。さて、レイリア。この要塞。どう攻める？」

レイリアとの回線は開かれておらず、その答えを出す者はいなかった。

「どうすんの？ エルンスト？」

先行偵察を提案したエルンストに強引についてきたアリシアは緊張のあまり自分で判断する余裕はなかった。

「とにかく、敵の大まかな規模と要塞の外観は捉えられた。いったん帰投して報告だな」

エルンストはそう伝えたと、行くぞといって小高い丘の頂上から反対側の谷へと足を進めた。

要塞より数キロ先にあるスラムの街でエルンストとアリシアは仲間と合流し、それを報告した。

スラムの難民らしい煤けた服がようやく板に付いてきた彼らは、それを聞いてもやはりピンとはこなかったようだ。

「航空ガジェットが5000って、それは何かの間違いじゃないのか？」

レイリアがそういうのも納得できる。しかし、それは幻影でも模^ミ擬体でもないことをエルンストは伝えた。

「エルンスト君が言うのなら間違いはないよ。敵は総数5000。外だけでそれなんだから、中はどうなっているか。想像はしたくないね」

なのははそうつぶやいた。彼女はどこから調達してきたのか、その姿はハデな柄の入ったタンクトップを上に着て、下はきわどく裁断されたジーンズ地のホットパンツに、サングラスまでかけて、まるでその姿は遊び慣れた少女のような様子を見せる。

「だがな、5000なんて数。このメンバーじゃまともにあいてなんてしてられねえぞ」

グイータはどうすんだ？ レイリアを見た。彼女の姿は、なのはの姿とは違い、薄手の白いワンピースを上から着ているだけで、その見た目ではむしろなのはの方がやんちゃな少女のようにも見える。

「それでは、潜入ですか？」

エリオンは特に表情を変えずに確かめた。

「まあ、それしかないかもね」

アリシアも偵察に疲れたのか、いすに座ってぐったりとしていた。双子のリーファは特に代わり映えのない私服で、エリオンは無地のTシャツに半ズボン、アリシアは薄手のブラウスにフワツとしたミニスカートと、その姿は一般人の中に完全にとけ込んでしまっている。

「進入経路はどうなる」

ここにきても相変わらず黒いスーツ姿を崩さない朱鷺守はその中では明らかに浮いてしまっているが、その雰囲気から彼にちょっとしたいをかける者は居なく、今では女性陣のボディーガードのように街

を歩いている。

「一つだけ見つけた。要塞と山の継ぎ目。そこに小さいが人の通れる程度のひび割れを見つけた。何処につながっているかは不明だが、罠である可能性もある」

グレーを基調とした都市迷彩を心がけるエルンストの姿は、さすがというべきか街の雰囲気に完全にとけ込めるような姿だった。

何の特徴もなく、街角ですれ違ったとしてもどこかであったことがあるなという程度で誰の印象にも残らない。

下手に興味に走らないその姿は彼のまじめさを感じることができ

る。

「どうする？ レイリア。お前の判断だ」

レイリアは少しの間逡巡して思いを張り巡らせた。自分たちの目的、そのためのもつとも効率のよい用兵。そして、自分の目的を果たすためにはどうすればよいか。

思案するレイリアを皆は黙って見守った。この判断がその後をすべて決める、その重要な決断をレイリアに委託することに誰も疑問を感じていなかった。

そして、レイリアはゆっくりとまぶたを開き、面を上げ、宣言した。

「潜入班と陽動班に分けます。潜入班は先ほどエルンストが言った経路を使用し内部へ。陽動班は外でガジェット殲滅を行います。

潜入班は速やかにガジェットのコントロールを破壊し、その後陽動班は内部へ進行。事態の掌握を行います」

レイリアが下した判断は実にシンプルでオーソドックスなものだった。しかし、シンプルな作戦はそれだけ堅牢であること意味する。特にここにいるメンバーはどちらかといえば派手な戦闘を得意とする者達だ。

「班分けは、潜入班はエルンスト単独。おそらく、それがもつとも効率がよいはず。残りのものは外部にて陽動を行います」

レイリアはエルンストに目を向けた。エルンストは何も言わず、

一度だけ頷く。

エルンストの単独潜入。それに異を唱える者は居なかった。おそらく、この中で誰が彼について行っても彼の足を引っ張るだけだと言うことが理解されているからだろう。

空戦S+ランクの魔術師である高町なのはを筆頭に、陸戦AAAランクのヴィータ、空戦AAAランクである朱鷺守。そして、双子のリーファとレイリアもそれぞれAランクを超える魔導師である。陽動を行うにはまさにうってつけともいえる集団に違いない。

「作戦開始は明朝現地時間5：00時。それまでに各員コンディションを万全にしておいてください」

レイリアは最後にそう伝え、部屋に集まった面々は「了解」の一言を残し、エルンストとレイリアを置いて退室した。

全員が退室した後、レイリアは少し疲れた様子でため息を一つ付き、木造の椅子に深く身を沈め込ませた。

「緊張しているのか？」

エルンストはそんな彼の様子に口を挟んだ。

「緊張は、しているね。基本的に僕は臆病だから、自分で決めた作戦がうまくいくかどうか心配だよ」

「臆病であるのなら俺もそうに違いない。だが、お前ならあらゆることを笑顔でやり遂げるものだと思っていた。殺しもな」

レイリアは面を上げ、そしていつもの笑顔を浮かべた。

「ああ、そうだね。君の言うとおりだ。ここのところ今までしてこなかったことばかりを経験して気を張りすぎていたのかな」

エルンストが情報収集とその運用を切り札とするように、レイリアにも一つの切り札があった。

それは、あらゆる者の警戒を解くその作られた笑顔だった。

レイリアもエルンストとはカテゴリーの違う暗殺者である。その笑みと人当たりのよい人格を武器にして彼はあらゆる組織、集団にとけ込みすべての信頼をえることで仕事をしてきた。

時には寝食を共にしていた女性の身辺からすべての情報を取得し

た後、それを殺害して立ち去ったこともある。

友人となった男の晩餐に呼ばれ、その家に爆薬を仕掛けたこともあった。

まさに外道とレイリアは自分の行いを自嘲する。

「やっぱ君には気づかれるか」

「ああ。初めてあったときから、お前からは俺と同じ臭いがした。多くの命を踏み台にし、その血を浴び続けてきた者の臭いだ」

「そっか。そこまで気がつかれているんなら、もう話してしまってもいいかな」

レイリアはそういうと、椅子から立ち上がり給湯器のスイッチを入れお茶を入れた。

「お前の真意をか？」

「というより、君にお願いがあるといった方がいいかな」

エルンストはレイリアからマグカップを受け取り彼の話に耳を傾けた

「ようやくあたしも暴れられるってことだな」

街から遠く離れた場所にある広く切り開かれた荒野の中でヴィータは【グラーフ・アイゼン】を杖についてそう口にした。

「そうだね。やっと私たちも戦えるんだね」

白いバリアジャケットに身を包みながら、なのはも【レイジング・ハート】を下ろし、一息ついた。

今ではうち捨てられた鉱山の跡地。所々に放置されたまま何十年もそこにある建物らしき残骸などが並ぶその場所は今ではなのは達の訓練場になってしまっている。

要塞からかなりの距離があり、街からも遠い。誰の目にもまらないその場所はまさに彼らにとって絶好の訓練場に違いなかった。そして、二人もまた明日に控えた決戦のため最終調整を終えたと

ころだ。

「だけど。結局明日も、エルンスト君は一人なんだね」

なのはバリアジャケットを解放し普段着に戻ると側の岩に腰を下ろした。

「だな」

ヴィータもデバイスを首飾りに戻し、なのはの隣であぐらをかいた。

都会の喧噪も虫の音も獣の声も響かないその場所を照らすのは、幾億の星々と夜空を彩る三つの月。

光害のない夜空には大気によって瞬く星空が一面に広がっている。「やっぱりここにいたか、二人とも」

鉾山の広場の周りに広がる森の木々の裏側から朱鷺守が顔を出した。

「朱鷺守一尉。あなたも訓練ですか？」

なのははそういつて立ち上がり彼を迎えた。

「まあ、そんなところだな。二人に混ぜてもらおうかと思っていたんだが、少し遅かったようだ」

朱鷺守はそういつて笑うと、その場に腰を下ろした。

ヴィータはそんな彼の体からアルコールの臭いが漂ってきていることに気がつき、少し眉をひそめた。

「朱鷺守、お前。飲んできただろう」

「まさか、飲んできたのではなく、まだ飲んでる最中だよ」

彼はそういつと、懷から蒸留酒スプリッツの缶を取り出しにやっと笑った。

「明日に響かないようにしてくださいね。それと、飲酒での訓練は禁止されていますよ」

なのはは苦笑を浮かべ、もう一度岩に腰を下ろした。

「ここは管理局じゃねえんだ。少しぐらいは大目にみてくんない」

朱鷺守は手のひらサイズの缶から少量酒を口に含むと余韻と共に息を吐き出し、夜空を見上げ、少しの間沈黙を保った。

自然と会話のなくなる三人だったが、その沈黙を破ったのはヴィ

ータだった。

「なあ、朱鷺守。今回の作戦、どう思う？」

今回の作戦、明朝に控えたそれを思い朱鷺守は少し思案して答えを出す。

「どう思うも何も、現状できる最良の作戦だろう。俺も同じことを考えていたから、特に疑問はない」

その答えはなのはもヴィータも想像していたことだった。

「だけど、結局またエルンスト君に頼ることになってしまいました」
なのはの言葉に朱鷺守も、「そうだな」と相づちを打つ。

「だが、まあ。いいじゃねえか。俺たちは俺たちのベストであいつを支援する。あいつは俺たちの支援を受けてベストを尽くす。それでいいじゃねえか」

おそらく、朱鷺守も納得できないところがあるのだろう。しかし、宣告述べたとおり、自分たちがエルンストと同行したところのできることは、彼の足を引っ張ると言うことだけであることを理解していた。

「何事も、完璧に回することはねえか」

ヴィータはそういうと寝転がった。夜風に冷やされた地面が背中を通して体の熱を奪い心地がいい。このまま寝ちまおうかと彼女は一瞬思ったが、なのはの手前それはやめておいた。

「そうだね」

なのはは寝転がって広がったヴィータの髪をいじりながらつぶやいた。

『Master, there is the word that
the right man in the right place.
And he is the best scout
soldier……（マスター、適材適所という言葉があります、
そして彼は最高の偵察兵であり……）』

なのはに気を利かせ、【レイジング・ハート】はその身を光らせた。

「うん、わかってるよ、レイジング・ハート。私は私のできるベストを尽くすだけだつて。わかってるよ」

『All right, master. I will do my best with you tomorrow. (それでいいのですマスター。私も明日、あなたと共にベストを尽くしましょう)』

「ありがとう、レイジング・ハート。心強いよ」

『Me too. (私もです)』

「相変わらず、デバイスとは仲がいいな」

レイジング・ハートを手のひらにおいて、楽しそうに会話をするなのは見て朱鷺守はゆつくりと杯を傾けた。

「長いつきあいだからな」

まだ会話を続けるのはを見てヴィータも体を起こして自分のデバイスをつついた。

寡黙な「グラフ・アイゼン」はそれに光を明滅させることで答えた。

「さてと、俺はそろそろ戻らせてもらうよ。二人ともあまり遅くならないようにな」

朱鷺守はそういうと酒缶を懷にしまい、立ち上がった。

「あ、あまりお相手できなくてすみませんでした。朱鷺守一尉」

レイジング・ハートとの会話に没頭するあまりあまり会話もできなかったなのは朱鷺守にわびた。

「気にすんな」

朱鷺守はそういいながら手を振り、森の奥へと消えていった。

「あたしらもそろそろ帰ろうぜ。なんだか眠い」

ヴィータはそういいながら目をこすりながらあくびを着いた。

「そうだね、帰ろうか」

なのはもレイジング・ハートから手を離し、ふうと一度ため息をついた。

第二十六話 フォートレス（後）

早朝、山に囲まれた盆地に位置する要塞は視界を遮る濃い霧の中に埋没してその姿を伺うことはできなかった。

レイリアはその霧に乗じてその上空へと進入し、全員を確認した。「ガジェットの数値は変わらず。空中に5000、陸上に4000。合計9000ほど、10000には届かないが。かなりの数だ」

すでに別ルートより進入を開始しているエルンストの通信に空に飛ぶ彼らは緊張を高めた。

「目標潜入ポイントに到達。これより潜入を開始する。では、手はず通りに」

エルンストはそのまま返信を待たず通信を切り、以降の通信を不通とした。

「それじゃあ、私たちの出番だね」

なのはは【レイジング・ハート】を構え、嬉々とした様子でレイリアを見た。

「ええ。では、先陣を任せます。遠慮なくぶちかましてください」
レイリアは笑顔と共に親指を立て、あげくにはウィンクさえも彼女に送った。

「うん。お願い、レイジング・ハート」

「Yes, master. Mode Excelliron. Cart
ridge load（了解です、マスター。モードをエクセリオンへ移行。カートリッジをロードします）」

その先端より少し手前に装備された弾倉から、レイジング・ハートはベルカカートリッジを本体に装填させ、なのはのあふれんばかりの魔力をさらに増強させ莫大な光を放つ。

「温存しておけよ、本番はまだまだ先だ」

朱鷺守はその絶大な魔力を感じ、ヒュウと口笛を吹いた。

「高町一尉の攻撃の後、各自散会。チームを組みつつ戦闘開始」

レイリアの指示に全員が「了解」と答え、なのはは脳裏にインプットされた敵の中心へとその矛先を向ける。

「デイベイン・バスター……！」

どこからか鈴の音がチリンと鳴った。

「複雑な作りだ」

隔壁の割れ目から内部に進入したエルンストは、未だアラームの響かない内部を見回しそのため息をついた。

先ほどから【ストライク・ビューワー】が収集する情報を租借し、彼はその内部にしかれたセキュリティシステムの密度の濃さを思い知った。

「急ぐか」

そして、エルンストは【クリミナル・エア】をセットアップさせガジェットをコントロールする場所を検索した。

そして、歩き出したエルンストの懷から鈴の鳴る音が一つ響いた。

「なんだ？」

エルンストはそれを取り出し、そして見た。両親の形見のものかもしれない壊れたデバيسコア。それは何の光も放たない赤い宝石だった。

おそらく気のせいだったのだろうと彼は、それを再び懷にしまい込み道を急いだ。

「いいか、お前ら。単独で相手とやり合おうとするな。常に連携を心がける」

ひっきりなしに次が現れる戦場で、両手に持つナイフを振るいながら朱鷺守は全員に檄を飛ばした。

「そういうあなたも、もう少し連携を意識したらどうですか？」

その戦場の中心に立ち、様々な特殊効果弾頭を打ち続けるレイリアがそう朱鷺守に伝えた。

レイリアの周囲には彼を守ろうとするかのように、様々な色彩を

放つ光弾がぐるぐると飛び回る。

その数はすでに20を超えて、なおも増え続ける。

「Magic bullet, semi active control. Guard to Tokinokami」

レイリアはそう叫び、朱鷺守の周辺に魔力弾を展開させた。その数8。

2発のデコイを含むそれは、ガジエットの照準を乱し、残る6は朱鷺守の死角に回り込もうとするそれらに襲いかかり打ち抜く。

「余計なことだよ、レイリア」

チツと乱暴に舌打ちした朱鷺守は、勝手に自分の獲物を捕られた腹いせに彼の背後に目をやった。

レイリアの弾頭をかくぐり、高速度で飛来するガジエットをその目が捕らえた。

「Extreme Hurricane!!!」

その言葉と共に朱鷺守の姿が消えた。いや、それはレイリアの目にそう映っただけに過ぎず、彼の姿は彼の背後に飛来するガジエットの機体を正確に捉え、それを両断した。

「俺に何の意識が必要だって？」

にやつと笑う朱鷺守は、ガジエットが吹き上げたオイルがべつとりと付着したナイフ、【ナイトホーク】を掲げニヤツと笑っていた。「これは失礼。あなたの機動力は最高です」

朱鷺守の切り札。人間では到底移すことのできないほどの高速軌道制御技術は、それだけで力となるほど練り上げられたものだ。

朱鷺守はまたにやりと笑い、

「レイリア、お前は双子のリーファをフォローしにいけ。俺は、高町一尉とヴィータ二尉の所へ行く」

「了解です、朱鷺守一尉」

レイリアは再び特殊効果弾頭を周囲にまき散らしながら苦戦を強いられつつある双子のリーファの元へと飛び去っていった。

「ガジエット残り4800。先は長そうだな」

朱鷺守は、煙草を吸う仕草でため息をはき出すと、側に寄つてきたガジェットを一掃しそのまま姿を消した。

そして、彼が姿を示した先で戦闘を繰り広げる彼女たちはいきなり自身達の周りにのさばっていたガジェット達が一瞬でくず鉄に変化したことに目を見張った。

「朱鷺守一尉」

なのはは力強い増援に声を上げた。

「お二方の獲物を奪つてしまい申し訳なかったな」

それは先ほどレイリアに奪われたことに対する腹いせだったのだろうか。それに対してヴィータは、不満そうな表情を浮かべるが、獲物となるガジェットはまだまだ大量にいることを見、「グラーフ・アイゼン」の巨体を振り回す。

彼女の小さな体を起点として、それはまさに嵐のような回転を始めそれに群がるガジェットをことごとく打ち砕いていく。

「俺も、負けられないな。Extreme Hurricane!!」
再び神速の嵐が吹き荒れた。

「アクセルシユート。行つて!」

『Yes, master』

薔薇色の粒子が収束し、彼女の周囲に広がり幾重もの結晶を形作る。それらはなのはの意志に忠実に従い、飛翔し彼らの周囲を埋めるガジェットの一翼に襲いかかる。

その一つ一つに込められた魔力、それを見て朱鷺守は改めて彼女の身に込められた魔力の絶大さを実感した。

「さすがはAce Of Ace。魔力量は時空世界随一か」

「朱鷺守、後ろだ!」

なのはの攻撃に目を取られた朱鷺守は背後、左右、正面、上下にガジェットの侵入を許した。

魔力行使の直後に硬直するなのは、敵を捌くことに手一杯のヴィータではそれをフォローすることができない。

敵の一斉射撃、光に満たされる朱鷺守。

「Illusion Air」

その爆風の先にあるものは、多くの姿を持つ朱鷺守。

「幻術？ だけど魔力は感じない」

なのは再び魔力をチャージしながらそれに目を見張った。

幻術により自らの姿多く見せる術は、彼女にとつて初めてではなかった。現在執務官としてそのキャリアを積み上げるティアナ・ランスターもその幻術の使い手だったが、彼のものはそれとはまた違って見える。

ガジェットもその姿に幻惑され、その攻撃を停止させる。

「Escape Air」

朱鷺守達はそれを眩き、自ら生み出した幻術の数だけの攻撃を重ねる。

それは魔力を利用した幻術ではなく、彼の体得した特殊な機動制御だった。動きに緩急をつけ、瞬速と低速を組み合わせることで錯視を引き起こす。

周囲のガジェットを排除した朱鷺守はその姿を再び一体へと戻す。
(なるほど、あれはガジェットにも有効ということか)

急加速と急制動を繰り返すその機動は、体に莫大な負担を強いるものだった。故に、朱鷺守の間接は様々な類の軋みをあげ始める。
(やはり、あれは疲れるな)

朱鷺守は思い通りにならない自身の体の限界に舌打ちすると、痛覚のノイズを強引に頭の中から追い出すと、再び神速の世界へと飛び込んでいった。

『そんな戦い方を続けていると、いつかすべてを失いますよ、朱鷺守一尉』

朱鷺守はなのはの念話にゆっくりと笑みを浮かべた。

『問題ない、すでに覚悟の上だ』

守りたかったものを守れなかった。そのときから彼はすでに覚悟を決めていた。この身に何が訪れようとすべてを受け入れると。

彼は自らのすべてをかけて戦場を駆けめぐる。その瞳には何の後

悔も浮かんでいなかった。

要塞に鳴り響くアラームは自分の侵入に対するものではないことは明らかだった。

閉ざされた隔壁を迂回しつつ、天井に張り巡らされた通気口の狭い通路に身を押し込めていたエルンストは外の様子に意識を向けた。ここからではその様子を感じ取ることはできない、しかし「ストライク・ビューワー」が収集した情報からその状況を組み立てると、彼らの戦況は消して悪いものではないということだった。

（だが、多勢に無勢か。急がなくては）

外の警備に対して内部の警備はそれほど嚴重ではなかった。ここまであっさりと侵入できたことに彼は敵の罠を感じ取ったが、今のところその様子はなく、要塞全体は外の彼らへの対策に追われている様子だ。

確かに、内部を警備するガジェットがかなりの頻度で彼の下を通り過ぎるが、ガジェットごとときには彼を発見するような手だてはないことは明らかだった。

そして、彼はしばらく進み、エアダクト通気口から漏れ出す光を視界に捕らえた。

（目標地点に到達。警備は……警備兵四人と制御技師八人か）
コントローラー

コントロールルームの正面のモニターには要塞周囲の戦略図が映し出され、その縁の小窓にはそれぞれ六人の魔導師が映し出されていた。

それは、外で必死にガジェットと戦う仲間達だった。

まだ誰も落とされていない。エルンストはそれを確認すると、腰のポーチから一掴みほどの大きさのものを取り出しその先端を捻った。

「お休み（Good night）」

エルンストはそうつぶやくとそれを通気口の隙間から部屋へと落とし、自身は身を潜めた。

チャリンという音と共にそれは部屋の中央の床にはね、それと共に莫大なエネルギーをはじき出した。

熱と衝撃、四散する破片をまき散らし、そこにいた者達はそれにあおられるように吹き飛び、エルンストはその部屋へと降り立った。「き、貴様は……」

体を吹き飛ばされ息絶え絶えに身を横たえるそれに、エルンストは小型銃を突きつけ、
ハンドガン

「あんたには恨みはない。だが、任務のためだ。死んでくれ」といってその引き金を引いた。

部屋の中に動くものが居なくなったことを確認し、エルンストはその中央のコンソールに向き合うと、【ストライク・ビューワー】とそのシステムを連結させその内部へと侵入する。

「ガジェット停止。基地防衛システム休止。システムパスワードロック」

その瞬間、システムのモニターに映る無数の光点が一気に停止した。

「任務完了。次のステージに移行する」

エルンストはそう呟き、来た道とは違う通気口を通ってその部屋を後にした。

数分後、ガジェットの停止を受けてコントロールルームに駆け込んだ警備兵とシステムエンジニアだったが、そのシステムがきわめて堅固なロックがかけられていることを発見し、基地に何者かの侵入があったことを初めて知ることとなった。

ガジェットの停止を受け、レイリア達はエルンストの任務の成功を確信し、彼らも作戦の第二段階^{セカンド・ステージ}への移行を開始した。

そして、ガジェット共に基地の防空システムとその防壁がまとめてダウンしたところになのはがたたき込んだ大規模砲撃に基地に大穴が穿たれることとなる。

レイリアを中心とした陽動班はそのまま基地制圧隊として敵本拠

地へと堂々たる凱旋を果たした。

彼らの侵入を許した基地全域は、非常警戒態勢が敷かれ先行した侵入者への対策は後に回されることとなった。

それほど、基地制圧隊の攻撃は熾烈で、既に用済みとなったガジエットの復活が絶望視される中戦場へとかり出された魔道警備隊は彼らの進行を止めることはできず、彼らの進む道の後ろには気を失う彼らの姿が累々と積み上げられるばかりだった。

なのははエルンストとの合流を提案したが、このままの勢いを止めたくない朱鷺守は彼との合流を後回しにしてそのままの進行を提案する。

そしてレイリアは朱鷺守の提案を採用し、ただその中央へと駆け上がる。

後はその首謀者、この要塞の主を追い詰めるだけであつた。

レイリアは広い広間の中心に立ち、ようやくこの時がやってきたと、敵魔導師立ちを排除し終えた彼らに目を向けた。

「どうしたの？ レイリア」

【レイジング・ハート】をおろしたなのはは、流石に体に襲いかかる疲労に額の汗をぬぐった。

「ようやく排除し終わったか。結構、優秀な奴らを雇ってやがったな」

朱鷺守も同様にその疲労を隠せない様子だった。体の節々に襲いかかる痛覚^{ノイズ}を無視しきれず、彼は膝をついた。

「朱鷺守一尉。少し無茶をしすぎです」

エリオンはそんな彼をいたわるように、その背中をなでた。

「だけど、あたしもいい加減疲れたわ。あと少しだって思いたいけど」

アリシアは【ストライクイーグル】を今だけセットオフさせ、その場に崩れ落ちるように座り込んだ。

「あたしはまだまだいけるぞ。さあ、次は何処だ？」

ヴィータはまだまだ猛る戦意を奮い立たせ、「グラーフ・アイゼ

ン」を肩に背負いレイリアに視線を移した。

なのは、朱鷺守、ヴィータ、双子のリーファの視線を受け、レイリアはどこか寂しそうな笑みを浮かべ、そしてその言葉を紡ぎ出した。

「次はありません。これでお終いです」

レイリアはそういつて指を鳴らした。それはすべての終局を伝える指鳴りとして広い空間に響き渡った。

エルンストはその一部始終を少し高い場所、彼らの立つ位置では影となりその姿を伺うことのできない位置で見ていた。

レイリアの指鳴りは彼の耳にも届けられ、それと同時にレイリアの眼前にたたずむ彼らはその床から伸びる光の束縛の元にひれ伏すこととなった。

「どういづつもりだ……。レイリア」

朱鷺守の声。怒りを秘めながらもそれをあらわにしない、重く響き渡る声。

「レイリア、あんた何を……」

デバイスをセフトオフさせたアリシアはその束縛をもろに受け、何もなく事もできずただ傳くだけだった。その眼に浮かぶ一条の涙は、何もできない自分に対する憤りなのか。

「僕たちを、裏切るのですか？」

体を縛られていてもなお冷静さを崩さないエリオンの視線がレイリアに突き立てられる。

「裏切りではないよ、これが僕の目的だ。ただそれだけのことだ」

レイリアはそういうと再び自らの拳銃型デバイス【トールラス】を構え、それを身動きできない彼らに対して撃ち込んだ。

その弾頭が提供するものは、彼らに対する束縛を強める結果だった。

「その通り。彼はもとよりこちら側の人間だ」

その声と共に、レイリアの側に転移する者があった。それは、突

然床に描かれた魔法陣として光に包まれその姿が徐々に明らかになつていく。

そして、その姿が完全に明らかになったとき、彼らは息を飲み込んだ。

「ご苦労だったな、レイリア。君の有能さには脱帽だよ」

そこに立っていた者、それは特務機動中隊の司令官。南雲白貴だった。

「僕の命を人質に取っておきながらよく言うよ。僕は初めから依頼主を裏切ったりはしないのに」

レイリアは両手を掲げ、肩を下ろしそうつぶやいた。

「仕事柄、人を信頼することができなくてね。残念ながらそれを取り去ることはできないが、その分君は多大な力を得ることになった。それに関しては感謝してもらいたいものだな」

南雲はそう鼻で笑い、捕縛された彼らを一瞥した。

「Fの遺産、戦闘機人、聖王のゆりかご。それらを知っている君たちを生かしておくことは私の利益に多大な障害を残す者になるのである。リカルド・マックフォートが暗殺されたとき、奴の名を使っていたことが公になると拙い。だから君たちには死んでもらうこととした」

なのは達は齒ぎしりをして彼をにらみつけた。

「だが、君たちをみすみす殺してしまうことも利益に反することだというレイリアの提案を受けてね。そこで、君たちには実験体になつてもらふこととなるよ。君たちの能力、技術。それらを今後の兵器運用に有効利用させてもらおう。そうすれば私にも莫大な利益が舞い込むこととなる」

「利益、利益……。お前の頭ん中にはそれしかねえのかよ！　そうやってどれだけの命をもてあそんできた」

朱鷺守は口の縁ににじみ出る血をかみしめ、泥を吐くようにそれを言葉にした。

「私の利益は、時空世界の利益につながる。そうして、私は多くの

者の命を奪い、そうして多くの命を救う手だてを提供してきた。君たちがかつて設立した機動六課、そして特務機動中隊。ジェイル・スカリエツィ。それらもそういった利益の上に成り立ってきたものだ」

「レイリアも、そんなことに納得したというの？　そんなくだらないものにあなたは共感したというの？」

なのはの叫びはレイリアの心に届けられ、レイリアはうなじをかいて頭を垂れた。

「共感なんてしていませんよ。高町一尉。ですが、僕は雇われの兵士ですから、クライアントの正義などには興味ありません。ただし、雇われた以上自分の仕事をするだけです。それが僕の正義ということですか？」

それは完璧な回答だった。そして、なのはも彼の思惑を感じ、その力を解放した。

「わかったよ、レイリア。あなたが自分自身の正義を貫くなら私も私の正義を貫くよ」

なのはの力を受けて、彼らの束縛は軋みをあげ始める。

「あたしも、テメエを赦さねえ」

ヴィータの雄叫び、朱鷺守の覇気、双子のリーファの底にあふれる力の源流が一つとなり、彼らを束縛する光の綱は鈍い残響を残して消滅した。

「やはり、この程度では動けるか。では、レイリア。彼らを何とかしたまえ」

南雲はそういうと、レイリアから一步下がり彼を包み込むように光の壁がその周囲を守った。

「了解しましたよ、クライアント殿。金の分は働いて見せましょう」
完全に自由を取り戻したなのは達を前に、レイリアは【トールス】を構えキハイル式カートリッジをロードした。

レイリアの周りに出現した大量のガジェット。そして、外では使用されることのなかった戦闘機人。レイリアはそれらを自由に操り、

彼らと相対する。

「さすがはレイリアだ。こっちの行動を完璧に理解している訳か」

【Illusion Air】と【Extreme Hurricane】を集中運用しつつ、その死角を狙うかのように攻撃を重ねる戦闘機人達を相手に朱鷺守は、レイリアの戦術に舌を巻いた。

「しかも、こっちはさっきまでの戦闘と、先ほどの束縛破壊でかなりの力を失っていますから。かなり不利です」

朱鷺守を援護するように射撃を続けるレイリアも、自身のデバイス【トムキャット】を握る手が震えることを自覚していた。

「ただどあいっだけは許せないのよ！ 絶対にぶった押して謝らせてやるんだから」

アリシアは枯渇しつつある魔力を、ベルカのカートリッジで何とか増幅しその側を飛来するガジェットを一体ずつ殲滅していく。

しかし、その状況は圧倒的に不利であるに違いない。それを俯瞰するエルンストの目にも彼らの身の振りには精彩がかけていると感じていた。

そして、エルンストは前日、レイリアと最後に交わした言葉を思い出していた。

『君に願いがあるといった方がいいかな』

それは誰にも気がつかれてはならない、レイリアの覚悟と真意がいったい何処にあるのかを示す言葉だった。

そして、彼はそれに了承した。

エルンストは【クリミナル・エア】を構え直し、【ストライク・ビューワー】をのぞき込んだ。

その先に移るレイリアの行動は、流石に多くのガジェットと戦闘機人を操るためなのか普段とは違い、自ら積極的に動かずその場に立ち止まり射撃支援を行っているだけだった。

エルンストはついにこの時がきたと自覚し、その照準を彼の額へと会わせた。

（弾道予測）

その言葉を忠実に守り、【ストライク・ビューワー】は目標となる距離と周囲の環境をすぐさま処理し、その正しい弾頭軌跡を彼に与えた。

「レイリア。お前は、間違いなく信頼に値する人間だった」

【ストライク・ビューワー】の先に移る彼の面がエルンストへ向けられた。その表情はどこか、安心したような笑みに包まれているように感じられた。

そして、彼はその引き金を引いた。

第二十七話 闇に戻りし者

そうして事件は解決した。レイリアはエルンストの射撃を受けその身を朱に染め上げ、その命を散らした。

彼は、その命の終わりに何を見たのだろうか。エルンストは感じていた、あれはおそらくすべてをやり遂げた者の安らかで誇らしい最後だったと。

レイリアの死と同時に停止したガジェットと戦闘機人はその後ののは達の攻撃で完全に機能を停止し、それを見届けていた南雲もまた、エルンストの放った一撃の下でその活動を停止していた。

突然に収束したその事態を見つめ、ただ呆然とそこに横たわる二体の亡骸を目にして何の行動も起こすことのできない彼らのもとへ降り立ったエルンストは、レイリアが背負ってきたもの。自分自身に託したものを語った。

レイリアの覚悟。それは、今こうしてこうあることだった。

エルンストはあの夜に聞かされた言葉を、彼の遺言ともとれるその言葉を一字一句違えることなく口にした。

レイリアは、南雲によってその命を質に取られていた。故にレイリアは確かに今まで南雲の利益のために行動し、エルンスト達機動中隊の面々をこうして畏へと誘い込んだことは確かなことだ。

しかし、レイリアはその立場さえも利用し、最終的に確実に南雲をしとめるタイミングをエルンストへと提供したのだ。

「あいつは最初からすべてを裏切っていた。俺たちも、南雲も」

そう、レイリアの切り札とは裏切りであり、その立場を有効利用することだった。

「殺すことはなかったじゃないの。あんたは、それだけ知っていたのに、レイリアを殺したっていうの？」

アリシアは歯を食いしばり、手のひらを握りしめ、自分自身を消耗品として活用したレイリアの亡骸をただ見つめていた。

「あいつの命は、もう既になくなっていた。あいつは、俺に頼んだ。自分を殺してくれと」

俺はただ、その望みをかなえただけだと言い放つエルンストは、その表情を一切変えることなく、自らの感情を一塊のマシンへと変貌させた。

「それが、こいつの覚悟だったって訳か。結局、自分の命を持ってすべてをやり遂げた。まったく、お前達は何処まで潔いのか。これだけのものを見せられては、自分自身の決意の甘さを突きつけられたような感触だ」

自らの羽織るコートをレイリアの亡骸に送り、朱鷺守はまるで死んでいった彼に敬意を表するように深く頭を垂れた。

「私にはわからない。どうして死ぬ必要があったの？ どうして死ぬことを選んだの？ それを言ってくれば私たちが力になれたかもしれない。誰も死なないですむ方法があったかもしれない。それなのになぜ？」

なのはは震える膝に力を奪われ、その場に崩れ去るように跪いた。「理由は明快です。そうすることで果たされることがあり、守れるものがあつたからです。それが俺たちの行動理念。最大限有効活用されるべき部品としてのあり方なのです」

エルンストの言葉に、なのははキツと瞳を鋭くさせ彼をにらみつけた。

「君は、どうして、何で。どうしてそんな生き方しか選べないの？」
おそらく、なのはには一生をかって理解のできないことだろうとエルンストは感じていた。人命より優先しなければならない任務がある。その結果を出すためには己の命さえも消費する必要がある。そうあつて守られるものがあり、果たされることがある。

沈黙に沈む彼らを、いや、要塞全体をとりわけ巨大な振動が襲いかかる。

「なんだ？」

必死に体の安定を取ろうと足を踏ん張る朱鷺守だったが、これは

地面自体が傾いていることを感じ、一度空中に低く飛び上がった。
「まさか」

エルンストは、最悪の事態を想像し【ストライク・ビューワー】に情報収集を命じた。

「いったい何が……」

アリシアにしがみつきながらエリオンもその振動に耐えつづける。そして、その振動が緩やかになり次第に消えていった。

エルンストは起き上がり、【ストライク・ビューワー】が収集し処理した情報を引き出しそれを見て驚愕した。

『よう、無事か？』

そして、困惑に彩られた彼らの中心に一人の男性がモニター越しに割り込みをかけてきた。

「ベルディナ・アーク・ブルーネス。あんたか」

もう、顔も見たくないと思っていた彼の姿がそこに現れたことに頭痛を覚えた朱鷺守は、彼に対して嫌そうな表情を隠さず伝えた。

『無事のようなだ。何よりだ』

ベルディナの言葉にエルンストは頭を振って答える。

「無事ではない。レイリアが死んだ」

『そのような。それに関してはこちらの予定通りだ。何もお前が気にすることではない』

やはり、レイリアの死は最初から予定されていたと言うことか。

ベルディナであれば、彼を消耗品として扱うことに躊躇はないはずだ。

「ところで、この揺れはいったい何なのですか？ あなたが出てくると言うことは何かやっかいなことが怒っていると推測できますが、ようやくアリシアから離れたエリオンは冷静な視線に棘を混ぜ彼を見つめた。

『おそらく、エルンストは既に感づいているだろう。どうだ？』

ベルディナの要請を受け、エルンストはそれに応えた。

「この要塞が現在浮遊し、徐々にその高度を上げていつている。こ

のままだと、いずれ大気圏を突破し宇宙空間へ。ストライク・ビューワーの予想では、この要塞は時空間を航行する能力もあると出ている」

『ご名答、流石だな。エルンストの言うとおり、そいつは今浮遊要塞として息を吹き返した。レイリアが最後によこした情報によると、やつかいなことにその要塞はどうやら聖王のゆりかご並かそれ以上に危険な代物であるらしい』

聖王のゆりかごの危険性を知るなのはとヴィータはそれ以上の危険性のあるものと知らされ、寒気を覚えた。

『現在、何とかそれを破壊できるぐらいの戦力を集めている最中なんだが、正直間に合いそうにもない。それがもしも時空間への進出を赦せばこちらでは対処のしようがない』

ベルディナは言葉を切り、モニター越しにそこに立つ全員の表情を伺った。

『お前らに頼む最後の任務だ。そいつを黙らせる。以上だ』

ベルディナは彼らの答えを聞くことなく通信を終えた。おそらく間に合わないにせよ最後の切り札として大規模戦隊の集結に戻ったのだろう。

「まったく、言いたいことだけ言って、自分はさっさとおさらばって訳か。何処まで行っても自分勝手な奴だな」

朱鷺守の愚痴にアリシアは大きく頷き、不満に腕を振り回した。

「まったくよ。何よ、あいつ。ひよっとしたらあいつこそ諸悪の根源なんじゃないの？ 一番最初にやつつけてやらないといけなかったんじゃない」

その意見には賛成だとエルンストは答え、朱鷺守にこの後の行動について意見を求めた。

「とにかく時間がない。部隊を二つに分けよう。片方は、コントロールルームでこの要塞のコントロールを掌握する。もう片方はこの要塞の動力室へ向かいそれを完全に破壊する」

その意見に全員が肯首で答えた。

「それなら、コントロールルームには俺とエルンスト。そして、残りは動力室へ……」

という朱鷺守は、そこまで言葉をつなぎ、突然体を折り曲げた。

「と、朱鷺守さん。どうしましたか？」

なのはは突然咳き込みうずくまり、咳き込む朱鷺守に驚き彼に肩を貸した。

「ここで限界が来るとは。今回は少しはしゃぎすぎたか」

口の端に鮮血を浮かべながら、朱鷺守は力なくなのはの肩に体重を預ける。

「どうやら、コントロールルームには俺一人で行くことになりそうだな」

エルンストの呟きにアリシアは異を唱えるが、エルンストはそれを拒否した。

「何でよ？」

アリシアは勢いよくエルンストに飛びかかるうとするが、その勢いも急激に抜け去る力の前に崩れ去ることとなる。

「あ、れ？ 何で？」

がたがたと震える体を両手で抱えながらアリシアは呆然とその状況を見下ろした。

「アリスも限界なんだよ。そもそも僕達の体はそれほど長時間の魔力運用には適していないんだ」

アリシアほど急激な魔力運用をしたわけではないエリオンは彼女に比べれば幾分ましにも見えるが、それでもそのうちに潜む疲労と障害は無視できるほどではないようだった。

「決まりだな。高町一尉は朱鷺守一尉を。エリオンはアリシアをそれぞれつれて脱出。安全地帯へと誘導する。そして、残った俺は制御室へ。ヴィータ二尉は動力室を頼んでもいいか？」

ヴィータは満身創痍の自分たちを見回して、静かに頷いた。

「ちい、悔しいがお前の言うとおりだな。俺たちがここにいれば足手まといになる」

朱鷺守はこみ上げる吐血をこらえ、足を踏ん張った。

「エルンスト。絶対帰ってきてよ。待ってるからね」

震える声で言うアリシアにエルンストは頷きを返した。

「それでは、高町一尉、朱鷺守一尉、リーファ姉弟。後ほど」

エルンストは最後に彼らに最敬礼を送り、そして立ち去る。広間の隅の壁に最後に残された爆薬をセツトしそれに火をつけた。

爆発と共に大穴が穿たれ、その先には巨大なメインシャフトの巨抗が姿を見せる。

「なあ、エルンスト。昨日の晩、酒場のポーカーで大もうけしてな。今夜はそれで飲み明かそうぜ。未成年とか酒が飲めねえとかなしにして、一晚騒ぎ明かそうぜ」

朱鷺守の残した言葉にエルンストは肩をすくめて返した。まったく、決戦の前夜にこのものはいったい何をいていたのか。だが、それも悪くないと思ってエルンストは、「実は俺も酒は好きだ」と言っ

て返した。

エルンストは、風が吹き上がるその巨抗を見下ろした。何処までも延々と続くように見えたその空洞は下から吹き上げる風にのって不気味な音を奏でる。

エルンストは、覚悟を決めてそれに身を躍らせた。

それを見届けたなのは達は朱鷺守、アリシアに肩を貸しその場を離れようとする。

しかし、なのははエルンストが立っていた場所に一つの光り輝くものがあることに気がついた。

「これは？ デバイスかな？」

なのははそれを拾い上げ、その赤色の真球が自分の持つデバイス【レイジング・ハート】のコアに酷似していることに気がつく。

「エルンストが持ってた奴だな」

なのはの肩を借りる朱鷺守は、それがいつもエルンストが肌身離さず持っていたものだと言うことに気がついた。

なのはは壊れて反応を返さないそれをしばらく見つめ、後でエル

ンストに返しておこうと思いいそれをスカートのポケットにしまい込んだ。

「あたしも途中まで一緒に行く」

ヴィータはそういつて彼らを先導するように先を飛び立った。

第二十八話 エルンスト・カーネル

落下によって流れていく抗の側面には様々な側道が穿たれていた。吹き上げる風の多くはその側道から流れてくる様子でそこが何処につながっているかを知る手だてはない。

飛行特性の低いエルンストは、それでも落下速度を調整することはできる様子で、その速度を窒息しない程度に押さえ込むことにいっぱいだった。

故に、彼はその側道を通って飛来する敵に注意を向けられなかった。

彼が気づいたときにはその黒い影は彼の側まで迫っており、彼は【クリミナル・エア】を緊急展開しその一撃を何とか凌いだ。

「テムエだけは逃がさねえ。ゆるさねえ。腕をぶつ飛ばされたクリス、足を吹っ飛ばされたジョージ、そしてテムエに刺し殺されたシルフィーの敵だ」

その一撃を何とか受け止め、その勢いのままに側道の一本に放り込まれたエルンストは小さくしたうちをした。

（こちらカーネル。現在、敵とエンゲージ。到着は少し遅れる模様。^{オーバー}以上）

エルンストは要塞内のどこかにいるヴィータに向かってそう通信を投げ込むと、そのままの体制でライフルを構え、それを放った。

「こちらカーネル。現在、敵とエンゲージ。到着は少し遅れる模様。^{オーバー}以上」

その通信を聞いていたヴィータもまた敵に囲まれていた。広間を出た彼女たちは、それから幾分もしないうちにガジェットに囲まれ、ヴィータはそれらをすべて引き受けることで戦えない者達を先に逃がしたのだった。

ガジェットの数は既に20を超えている。このまま時間をかけて

いればまだまだ群がってきそうな勢いだ。

「こつちも遅れそうだ」

グイータはそう呟き、周囲に散会しつつあるそれらの一角を目指して巨槌を大きく振りかぶった。

（こいつ、強い！）

エルンストは四方より襲いかかる魔法弾をなんとかして避けながら、彼の直接攻撃を【クリミナル・エア】で受ける。

地球の山中では分からなかったが、どうやらこの手合いは隠密の能力が低い分、近接戦闘に関してはかなりの練度を持つ魔導師だったようだ。

本来、姿を隠し息を潜め、相手に気づかれずにその命を刈り取るエルンストにとっては姿をさらしてしまっている今では、勝てる見込みはほとんどない。

「オラオラ、どうした？ 逃げ隠れしねえと何もできねえのか？ この臆病者」

その相手は、どうやらただでは自分を殺さないつもりらしい。先ほどから何度も何度もその機会はあったはずが、彼はそのたびごとに最後の一撃を放たず離脱を繰り返している。

（なぶり殺しにするつもりか）

それほど相手の憎悪は強い。おそらく、あの山中で失った相手の仲間とは相当に信頼しあっている仲だったらしい。

それが、あのような方法であっけなく撃退され、その中の一人、おそらく彼がもっとも信頼している女性を自分が殺したから、ただでは殺してやらないと彼は思っているのだろう。

（だが、それは甘いことだ。殺せるときにやらなければ次どうなるか分からない）

エルンストは、手合いが自分に対策を考える時間を与えていることを余裕ではなく甘さだと捉えていた。

（だが、どうする）

エルンストは隙を見て【クリミナル・エア】の銃弾を発射するが、手合いの反応はそれを超えていた。

相手の操る二本のナイフは、確かに朱鷺守が操るものに比べれば幾分か鋭さに欠ける。しかし、それはエルンストの足、胴、肩口に襲いかかり徐々にそれを切り取っていく。

決して深くない傷もそれが蓄積していけば行動を制限する要因に十分変化していく。

そして、エルンストはふとした反応の遅れから彼の脚撃を脇腹に食らい、そのまま十数メートルを吹き飛ばされ、壁にぶち当たり止まった。

（ストライク・ビューワー、解析開始）

よくない理由により敵との距離が開いた。既に体の数力所では骨格が軋みをあげ、そののいくらかは破碎され、亀裂が走っている。

行動不能になったエルンストをなぶるように、彼は地面に足を下ろしその十数メートルの距離をゆっくりと歩いて来る。

残りの距離が十メートルを切った。【ストライク・ビューワー】

は先ほどまでの戦闘で収集した敵の情報の解析を終了し、エルンストに勝利の道筋を掲示した。

（敵反応速度から、その飛翔体の速度はおよそ音速の1.5倍が必要。できることなら秒間1.2発のフルオート射撃を、ほぼ近接距離にて行うことを推奨する）

その計算結果を知り、エルンストは呆れたような笑いを浮かべた。（クリミナル・エア。いけるか？）

エルンストの問いかけに【クリミナル・エア】も自らのコンディションを洗い直しその答えをたたき出した。

（可能。ただし、連射は1.4秒が限界）

エルンストは、「そうか」と呟き、【クリミナル・エア】のセッティングを変更した。

事実上、【クリミナル・エア】の発射体の速度には上限はない。もちろん、物理的に光速を超えることはできないが、あげようと思

えは何処までもあげることができる。

ただし、それは【クリミナル・エア】そのものを犠牲にすること
もいとわなければだ。

発射体を加速するためには薬室と銃身に高強度の力場を発生させ
なければならぬ。そして、その力場の力はその二者にも多大な影
響を与える。

つまり、強力な地場を発生させたコイルはその力場のために自ら
崩壊させることと同じように、弾速を向上させるためにはそれだけ
強力な力場を発生させる必要があり、それは先のコイルと同様、【
クリミナル・エア】そのものを崩壊させる危険性もある。

エルンストは、【ストライク・ビューワー】を【クリミナル・エ
ア】から取り外し、その銃身をまっすぐと構えた。

弾速 5100 m/s 。その銃口エネルギーは、およそ 2.6 MJ
にも達する。21世紀初頭の地球で使用されていた 50 mm 口径対物狙
撃銃の銃口エネルギーは、確かせいぜい 15 kJ 程度でしかなかった。
たはずだ。

発射体を $0\sim 5100\text{ m/s}$ まで、銃身長僅か 1000 mm で加
速させなければならない。それに必要な加重はおよそ 265 トン 。

そして、必要な出力は単純計算で 1716 GW 。
キガ・ワット

不可能だとエルンストは悟った。そんな魔力を出力できる人間な
ど、この時空世界を見回しても存在しないはずだ。

（カートリッジロードを要求する）

【クリミナル・エア】は静かにそう提案した。

エルンストはそれ見やった。そして、思い出した。レイリアが最
後の夜に自分に手渡した切り札。キハイル式カートリッジのことを。
エルンストは腰のポーチに探り当て、それを取り出した。

総数5発。ベルカ式カートリッジと併用されたそれは確かに、エ
ルンストの不足する魔力を補うだけの容量と出力を兼ね添えていた。
（いいだろう、最後の賭だ。クリミナル・エア。頼んだぞ）

エルンストは静かにそう念じると、それらをまとめて薬室へと送

り込んだ。

クリミナル・エアはすぐさまそのチャンバーの構造を変化させ、それらカートリッジシステムを連続運用できる仕様へと変更する。

あの日、アリシアに触発され、レイリアと共に考えた「クリミナル・エア」の新機構。それは、それまで彼が見向きをしなかったカートリッジシステムの運用を考慮に入れたものだった。

（カートリッジロードを確認。出力規定値をマーク。準備完了）
オルグリーン

【クリミナル・エア】から取り外された「ストライク・ビューワー」は銃から送られてくる諸元を正しく分析し、すべての準備が整ったことを知らせた。

エルンストは歩み寄る自らの死に向かってそれを向け、何の躊躇もなくその引き金を引き絞った。

莫大な魔力の渦が正に暴発するかのごとく放出され、エルンストは襲いかかる力に翻弄されるようにその意識を切り取られた。

目を覚ました彼の視界には、巨大な爆発で辺り一面が吹き飛ばされた様子の回廊が映り込んだ。その様子はエルンストを中心に周りの構造物が真球状に切り取られたかのような様子で、彼の放った魔力の凄まじさを物語るようだった。

（クリミナル・エア、状況報告）

体中に走る痛覚^{ノイズ}に頭を持って行かれそうになるが、エルンストは冷静に現状を把握することとした。

（クリミナル・エア、並びにコールド・アイズ機能停止）

それは「ストライク・ビューワー」の報告だった。そして、彼は悟った。自らの持つデバイスがどうなっているかを。

それは、既に残骸に過ぎなかった。優美な直線を描いていた銃身は爆発により四散し、ストック、フレーム、グリップ、そのすべてに亀裂が入り原形をとどめないほどに破碎されている。

その爆発のあおりを受け、【コールド・アイズ】もまた機能を停止し、【ストライク・ビューワー】の報告によればいかなる処置を

施したとしても修復不能だという結果がはじき出される。

「流石にカートリッジ5発は無理があったか。次は、もっと高強度に作り直さなければな」

（さよなら、俺の相棒達。静かに眠れ）

エルンストは「クリミナル・エア」と「コールド・アイズ」に短く別れを告げ、それらを放りだした。

「ストライク・ビューワーが残っただけでも僥倖か」

幸いなことに最後に残った「ストライク・ビューワー」には目立った損傷は確認できない。彼はそれを身に携え、再び本の道へと戻り、目的の場所へと降りていった。

『こちらヴィータ。動力室に到達。そちらの到着を待つ』

ヴィータからの通信が入ると同時にエルンストは要塞のコントロールルームに到着し、そのコンソールにアクセスを開始していた。

「こちらエルンスト。現在、要塞内を検索中。少し待て」

エルンストはそのデータ項目から動力室に関するものを検索し、そのコントロールを支配しようとする。しかし、それは阻まれた。

「こちらエルンスト。どうやら動力炉の停止には特定職員の個人認証と24桁のパスワードを必要とするようだ。パスワードだけならストライク・ビューワーで何とかなるが、個人認証を回避するには相当な時間がかかりそうだ。隔壁と防衛システムの沈黙には成功したが、最終防壁の解除ができない。予定通り手動による停止を要求する」

エルンストはそう答え、ヴィータの『了解！』という嬉々とした返事を聞いた。

「さて、こちらは動力炉以外のシステムの掌握と動力炉停止後の軌道安定制御を組み込まなくては」

エルンストはコンソールシステムと「ストライク・ビューワー」

をアクセスさせ、要塞すべての隔壁を開放し、そのまますべてのシステムをオールダウンさせた。

コンソール入力装置を操作し、最後のキーを押し込んだところで要塞全域を包み込むほどの衝撃と振動が襲いかかった。

『こちらヴィータ。動力炉の破壊終了。チョロいもんだぜ』

エルンストはコンソールのモニタに動力炉停止の警告が出されたことを確認し、ホッと一息ついた。

『確認した、では合流して……』

脱出だと言おうとした彼の言葉を、再び襲いかかった衝撃がかき消した。

『今の衝撃はなんだ？』

どうやらヴィータもそれを感じていたらしく、エルンストは「すぐに調べる」と言って再びコンソールを叩き始めた。

しかし、それは調べるまでもなく、続くアラーム音と要塞内に流されたアナウンスがそのすべてを語っていた。

『動力炉停止、並びにシステムに致命的なエラーの発生を確認しました。これより当要塞【永遠の箱船】は機密保持のため自壊システムをロードいたします。職員は速やかに所定の手順により脱出を。残り時間30分』

自壊システムをロード、それはつまり……、

『自爆か！』

ヴィータの言うとおり、この要塞は自らを保全するためすべてを抹消するつもりのようなのだ。

「ヴィータ二尉。どうやら合流する暇がなくなったようだ。これ以降はそれぞれ独自の判断により脱出。外で会おう」

エルンストはそう手早く告げると、急いで脱出の準備にかかった。

『了解！ 後でな』

ヴィータも通信を切った。

「あのシャフトを登るには時間がないか。ストライク・ビューワ。他の脱出路は検索できるか？」

エルンストは自らの飛行特性のなさに少し歯ぎしりをするが、「ストライク・ビューワー」がはじき出した答えに少し安堵を浮かべた。

『この先の通路の先に職員脱出用の短艇^{カッター}を確認』

ここから500mほど先に浮かぶ光点は確かに理想的な脱出路となつているようだ。エルンストは、すぐに制御室のドアを抜け、そこへと急いだ。

残り26分。十分間に合う。

衝撃により隆起し、鉛管をむき出しにする廊下を走り抜けながらエルンストはヴィータに通信を開き、

「こちらエルンスト、脱出用の短艇^{カッター}を発見。後に回収してくれるとありがたい」

と伝え、ヴィータは、

『ああ、あたしもそろそろ脱出できそうだ。なんか、外と中では通信がつながりにくいらしい。さっきからなのは達が呼んでいたらしい』

と答えた。

なるほど、道理でヴィータの声が聞き取りにくくなっているわけだとエルンストは感じると、ヴィータとしばしの別れを告げ、遠くなる彼女の声を最後まで追っていた。

『自壊システム完遂まで残り15分。職員は速やかに所定の手順により脱出を。残り15分です』

エルンストの道もほぼ終わりが見えている。この曲がり角を行けばそこには脱出艇が待機しているはずだ。

エルンストは角を曲がり、その片鱗を目に移した。

その瞬間、襲いかかる大規模な振動。廊下を照らし続けていた証明が一瞬で遮断され急激に遮られる視界。

エルンストはその次の瞬間に襲いかかった大規模な崩落に体を取られ、再び意識を失った。

要塞を脱出したヴィータは彼女を心配して救出に駆けつけていたのはとエリオンと合流した。

「ヴィータちゃん。これはいったいどうなっているの？」

内部からは様子が分からなかったその要塞は、今となってはその巨体の各地で小規模大規模な爆発を起こし、そのみの端を崩落させて言っている様子だった。

「一応任務完了だ。それより早く離脱するぞ。どうやら、この要塞、自爆するらしい」

ヴィータの簡潔な説明になのはは度肝を抜かれるが、その側にエリオンがいないことに気がついた。

「エリオン君は？」

「脱出艇を見つけたらしい。後で回収する手はずになってる。それよりも急げ、時間がない。全力でこの空域を離脱するんだ」

ヴィータとなのは、エリオンは崩落によってまき散らせる大小様々ながれきをぐり抜け一心不乱に飛び続けた。

高度は既に3万メートルを超え、心なしか息も苦しい。それでもバリアジャケットに守られる自分自身の魔力を信じ彼女たちは飛び続ける。

エリオンとの再会を確信して、彼女たちは安全な場所へと逃れつつあった。

目を覚ましたエリオンはまず現状の確認を急いだ。どうやら自分分は5分ほど気を失っていたらしい。

未だ視界の戻らない暗闇の中で、【ストライク・ビューワー】は自身の無事を証明するかのように光を放ち、彼の視界をサポートする。

そして、見回した自分自身の周囲にエルンストはため息をつき、崩落の続くその場に座り込み節くれ立つ壁にその身を預けた。

崩落によって大規模ながれきが積み上げられ、彼の行く手と戻る道をふさいでいた。

「ストライク・ビューワー、情報を」

エルンストはそれを告げ、「ストライク・ビューワー」が処理した情報をすくい上げた。

（崩落により進行不可能。^{カッター}短艇の機能停止を確認。状況打開策、現在検討中）

おそらく、この状況を打開できる策は残されていないだろうとエルンストは確信していた。光を明滅させ、得られる情報と現状とを比較し未だその策を模索する「ストライク・ビューワー」に手をやり、エルンストは、もういいと告げた。

「なんと言っことはしない、今まで俺が殺し、俺が死なせてきた奴らの仲間入りをするだけだ。これは、既に決められたこと。むしろ、この状況で終われるのなら本望に違いない」

彼は静かにそう口にした。

しかし、その後に襲いかかる感情の渦に彼は思わず頭を抱え込み立てられた膝にそれを埋め込んだ。

「死にたくない」

さらに大きな崩落が襲いかかる。時折聞こえる爆発音は、基地に埋め込まれた自壊プログラムの遂行を物語っていた。

「俺は、まだ生きていたい」

閃光がほとばしり、肌を焼く熱と光が彼に襲いかかる。

「こんなところで、終わりたくない……」

膨大なエネルギーの奔流が身体を包み込むことが分かった。熱に変換されたエネルギーは次第に身体の中へと侵食していき、徐々に徐々に彼の意識を白い闇へと落とし込んでいく。

そして、その熱が意識に根を張っていくと同時に、彼の心は次第に穏やかになっていくようだった。

そして、彼は唐突に理解した、その死に行く刹那の間彼の体中を光の速さよりも高速でその情報は駆け抜けていく。結局自分も生にしがみつくと臆病な人間だったのだと。

『ああ、そうか。だから命というものは尊いのか。高町一尉、あなたの言うことが正しかった。俺はただそれから逃げていただけだった。だが、同時に俺は自分の命であなただちが助かることを嬉しく思う』

薄れ行く意識。この世界の全ての謎が解明されたかのような歓喜に身体が震える。既に手足の感覚はない、痛いとも熱いとも辛いとも、悲しいとも。白い闇に沈むに連れそういった感情がまるで熱に溶かされていくように霧散し、残るものは単純な歓喜の歌だけだった。

そして、その最後に残った彼女の笑顔を思い出し、何故自分はあれほどまでに彼女を気にしていたのか。その謎が今解き明かされた。（あなたが無事なら、俺はこの命に意味を見いだすことができる。それが、俺の生き様だったと思わせてほしい）

愛しい彼女の笑みを、まるで子守歌のような声を浮かべ、今はただ眠りにつかう。まるで揺りかごのような穏やかな闇に包まれて。

爆発と閃光は全てをなぎ払い、大規模な崩落を引き起こし。静寂だけが残された。

第二十八話 エルンスト・カーネル（後書き）

補足：美浜原発2号機、加圧水型原子炉の出力がおよそ500MW。
それに對してエルンストが必要とした出力が1716GW即ち原子
炉3234機分。これは日本の総発電電力の数倍にも及ぶ規模です。
ギガワット

もつとも、ベルカ式カートリッジシステムとキハイル式カートリ
ッジシステムの諸元が不明でしたので5発使ってもこの出力は発揮
されないかも知れません。

ただし、TNT爆薬の出力が1160GWであり、必要時間も1
27マイクロ秒という短さなので、まだ現実的には可能かと考察し
ました。

エピソード

「ああ、そうだな。今回はまあ、何とかあったか。その代わり優秀な手駒を二つも失ってしまった。早急に手駒を揃えなければならんな、またよろしく頼むよ」

「分かってる。ああ、その通りだ。問題ないよ、アグリゲット、全ては事も無しだ」

「そうだな。ああ、そっちのかみさんにもよろしく言っておいてくれ。今回は随分迷惑をかけたってな。俺の娘か？ 元気すぎてこっちが参るよ、まったく」

「了解だ、アグリゲット。……時空の海に平穏あれ……そのために我々は全てを投げだそう……この命を掛けて……全ての命を掛けて……」

そうしてベルディナ・アーク・ブルーネスは受話器を下ろした。

時空管理局の教導隊本部。ベルディナ・アーク・ブルーネスが再び座る執務室をノックするものがあった。

「入れ」

ベルディナは既にその来客を知っており、そこから顔を出した人物を迎え入れた。

「失礼します」

幾分やつれた表情をしているその女性、高町なのははそれでも2週間前のあのときに比べれば幾分かましな顔つきを取りもつつあるようだ。

「調子はどうかな？ 高町教導武官次補」

あの事件の後、高町なのはは教導評議会により、教導武官次補の任命を受けた。それは事実上の昇進であり、ベルディナにとっては

なのはの口止めをしておくための材料でもあった。

あの事件は、公では発生しなかったことにされていた。浮遊要塞【永遠の箱船】は時空連合管轄内で起こった大規模な災害として処理され、高町なのは達はその事件の重要参考人として時空連合の縛りとなった。

しかし、その事件の背後に何ら犯罪とつながるものが発見されなかったと結論を下した時空連合はその身柄を時空管理局へ返還された。

時空連合と時空管理局はこの災害の主任格であると予想される、レイリア・フォートとエルンスト・カーネルを第一級広域指名手配し現在も搜索中だ。

エルンストは結局あの後発見されなかった。【永遠の箱船】の残骸は巨大な岩山となり、なのは達は時空連合の捕縛に会うまで彼を搜索していた。

あれほど生きることがつらかったときにはないとなのはは今になって思い出す。

なのははベルディナとこれ以上話すことはないとして、手に持った封筒を静かに彼に差し出した。

辞表とかかれたそれをベルディナは見下ろし、一つだけため息をついた。

「今となってしまつては、これを拒否する権利は俺にはないだろう。だが、この大事な時期に優秀な人材を失うことは時空世界の損害になるとおもわんか？」

しかし、なのはは首を振り、ゆっくりと口を開いた。

「それは、あなた方の損害であり利益でしょう？ 私は彼らのような生き方をすることはできません。私にその覚悟はありません」

ベルディナは彼女のその覚悟を思い知り、ただ「そうか」と言ってその辞表を受け取った。

「それと、これもお返しします」

なのはは赤色の宝石を取り出し、彼の前に置いた。

それは、なのはの持つデバイス【レイジング・ハート】のように見えたが、それは違った。

「これは？」

ベルディナの問いになのはは答える。

「エルンスト君が持っていたものです。壊れて動きませんが、彼の生きてきた証です。受け取ってください」

「……いいだろう……」

ベルディナはそれを受け取り、なのはの提出した辞表の上に置いた。

「最後に何か聞いておきたいことはあるか？ 本来なら機密事項にふれることだが、君には特別に答えよう」

「聞きたいことはありません。しかし、教えていただけるのなら一つだけ。あなたの目的は何ですか？ どうしてあなたはこの道を？」

「理由か。今となつては遠い昔のことだ。ただ、俺はあのときこの時空世界の平穏を夢見ていた。そして、それが果たせるのならすべてを犠牲にする覚悟をした。ただそれだけのことだよ」

「そうやって犠牲を積み上げ、あなたは何を得たのですか？」

「さあな、失ったものが多すぎて、俺は何を得たかったのか分からなくなった。それでも果たされることがあり、守られるものがあるならそれでもいいと思っていた」

なのはは彼がレイリアとエルンストの言うことと同じことを口にしたことに少なからず嫌悪感を抱いたが、彼が積み上げてきた年月と失ってきたものの数を思うとたまらなく悲しくなってしまう。

そして、なのはは実感した。この人もまた、自分が消耗品として最後を迎えることを願っている。

「行きます」

なのははそういつてきびすを返した。

「さようなら、高町なのは。君は間違いなく優秀な魔導師だった」
ベルディナの言葉を最後に扉が閉められ、部屋に静寂が戻った。

ベルディナは紅茶のカップを取り、一息ついた。そして、机の上

にのせられた赤い宝石に目をやった。

壊れて機能を失ったデバイス。エルンストが常に肌身はなさなかったそれは、先ほど高町なのはが身につけていたものとその形状は酷似している。

ベルデイナはおもむろに通信機を取り上げ、それに耳を当てる。

「俺だ、アイマード・ウェボン・デバイスAWD社につなげ。私的な用事だ」

回線がつかぎ直され、しばらくして目的の人物が電話口に声を示した。

「ああ、キハイル教授か？ 俺だ、久しぶりだな。いや、なに、一つ調べてもらいたいデバイスがあつてな」

カーテンから差し込む光が、今は息を引き取っている赤い宝石に差し込まれ、鈍い光を放った。

教導隊本部を出たなのはは一度だけそれを振り返り、今まで自分が過ごしてきた日々を思い返していた。

多くのものを得て、そしていくらかのものを失った。彼らは立ち去る自分を見て、どう思うだろう。賢明だと言っだろうか、臆病者と感じるだろうか。

なのはは首に提げられた【レイジング・ハート】を握りしめ、深く深く息を吸い込み、そしてはき出した。

「もういいのかい？ なのは」

なのはは振り向き、そこに立っていた男性、ユーノ・スクライアに笑顔を向けた。

「うん、みんなとはお別れをすませたから。もういいの」

ユーノは、「そう」といつてなのはに手を貸し、その正面につけられた乗用車に彼女を誘った。

ユーノの運転で発進する車。そして、流れゆく町並みをただじつと見つめて、なのはは口を開いた。

「ねえ、ユーノ君。ユーノ君は好きな人っているの？」

「え、えっと、なのは。どうしたの急に？」

「きつとユーノ君に好きになって貰える人は幸せなんだろうな。うん、きつとずっと死ぬまで、死んでも幸せでいられるんだろうな」

「な、なのは？」

「ねえ、私、知りたい。ユーノ君が好きな人が知りたい。教えて？」

「そ、それは……なのはも知ってるんじゃないの？ そのひと。僕の側にいてくれて、僕を幸せにしてくれる人。それは、一人しかないよ」

「うん、知ってる。知ってるけど、聞きたいのユーノ君の口から」

「そ、それは……、それはね……」

『失ったものがあつた。なくしてしまったものがあつた。それは多くは取り戻せないものだけど、それでもたくさんのかけがえのないものを私はもらった。』

だから、私は幸せになろう。私の、私たちの幸せのために眠りについた彼らのためにも。私はせめて笑顔でいよう。

そして、私に笑顔をくれる人と一緒に生きていこう。そうすればきつと、誰もが苦しまなくてもいい世界が訪れるはずだから』

(end)

エピソード（後書き）

これにて完結と相成ります。ここまでおつきあいいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8521f/>

魔法少女リリカルなのはFF ~ Midnight Circus ~

2010年10月8日11時15分発行